

小菅ヶ谷北公園保全管理計画



竹林



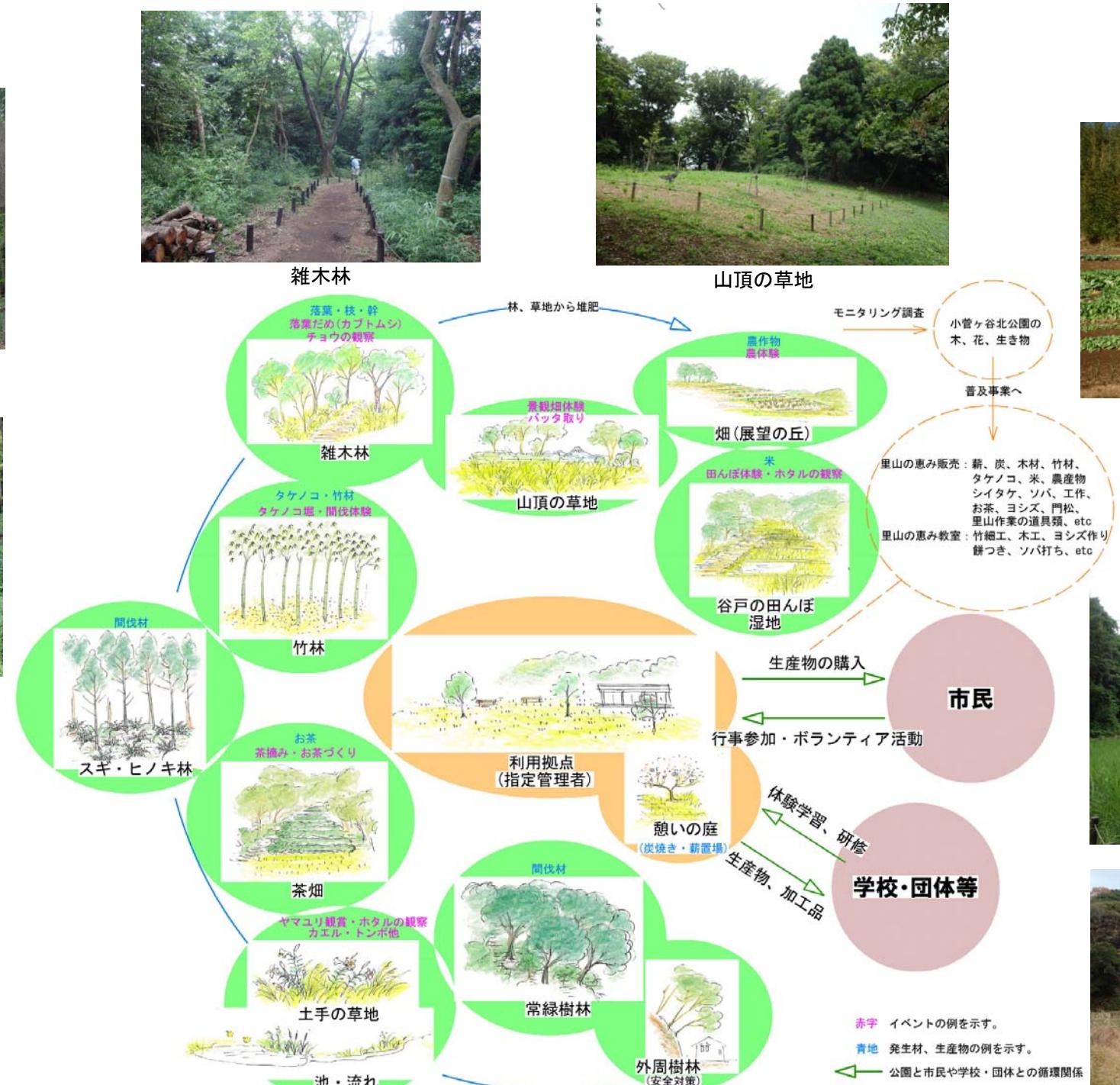
スギ・ヒノキ林



土手の草地



池・流れ



茶烟



外周樹林(安全対策)



谷戸の田んぼ・湿地



畠(展望の丘



ヘイケボタル(目標: 各100頭)



ゲンジボタル(目標:各100頭)



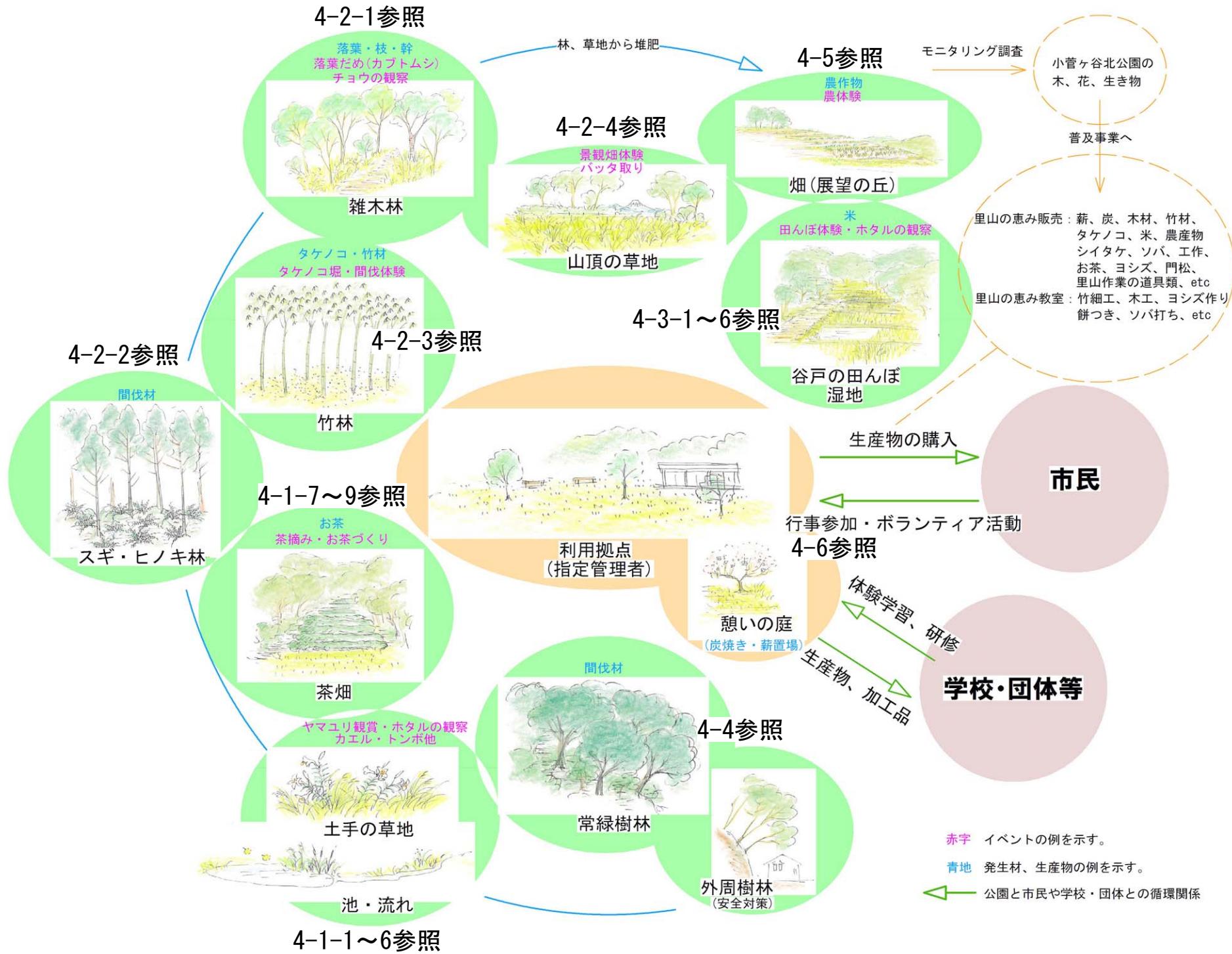
ヤマユリ(目標: 土手に300株)



夏型アゲハチョウ(目標: 市内全種観察)



猛禽類(目標: 観察できる)



【目次】

1. 計画地の概要と土地の変遷	1
2. 計画の目的と策定の流れ	2
3. ゾーニング計画	3
3-1. ゾーニング計画の考え方	3
3-2. 保全管理計画ゾーニング図	4
4. ゾーン別保全管理計画	5
4-1. 利用拠点ゾーン	5
4-2. 散策の森ゾーン	14
4-3. 自然観察ゾーン	16
4-4. 樹林地ゾーン	24
4-5. 展望の丘ゾーン	25
4-6. 懇いの庭ゾーン	26
5. モニタリング計画	27
5-1. ゾーン別年間モニタリング内容	27
5-2. モニタリングルートマップ	33
6. 運営事業計画	34
7. 保全管理計画の進め方及び今後の課題	37
8. 検討会議事録	38
9. 参考資料	50
資料1：小菅ヶ谷北公園水準書(平成25年5月環境創造局)	50
資料2：小菅ヶ谷北公園現存植生図(平成27年度環境創造局)	51
資料3：小菅ヶ谷北公園生物調査 (平成27年度春～夏期鳥類調査、冬期鳥類調査、 平成27年度は虫類調査より)	52
資料4：第1、2回検討会確認生物リスト(環境科学研究所 七里)	53
資料5：小菅ヶ谷北公園植物調査図(平成27年7月横浜植物会)	54
資料6：自然観察ゾーン・低木と草本(平成26年度指定管理者)	55
資料7：自然観察ゾーン平成26年度管理指示図の修正 (平成26年度指定管理者)	56
資料8：樹林管理の手法	57

【用語について】

目標種：目標とする環境が整えば、出現する又は個体数が増加する生物を目標種とし、環境指標・モニタリング対象生物として定めました。

景観畑：作物の生産に加え、景観形成の視点を持って耕作される畑を示します。

蝶道：特にアゲハチョウの仲間に見られるチョウの行動で、林内の明るさや食樹や食草の場所等により、一定したルートを飛び蝶道と呼ばれます。本公園の雑木林にも確認されていて、保全・グレードアップを目指します。

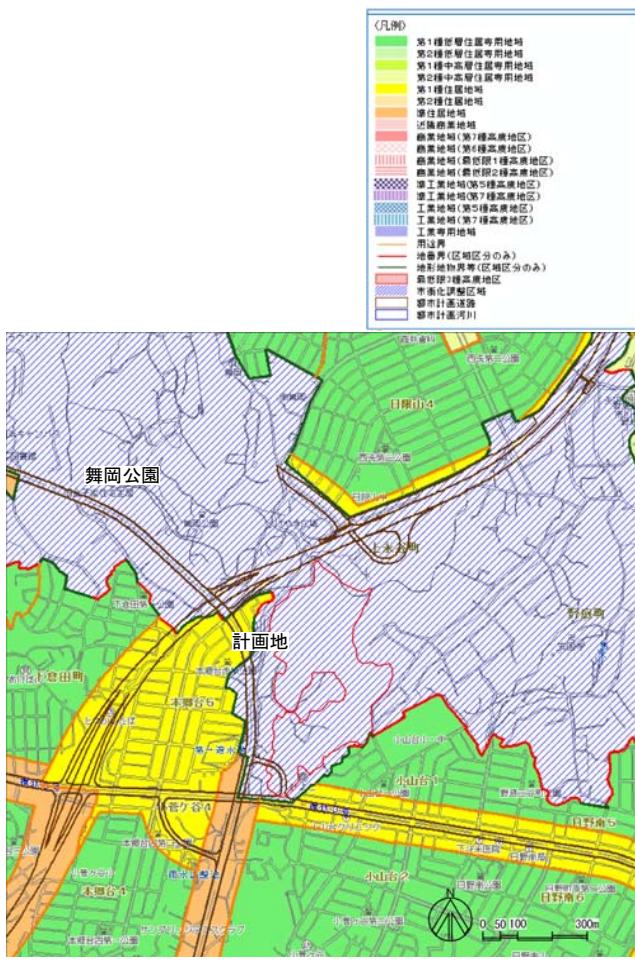
計画地の概要と土地の変遷

(1) 計画地の概要

住所：栄区小菅ヶ谷四丁目31番ほか
 公園面積：12.7ha（公開面積9.7ha）
 公園種別：風致公園
 都市計画：市街化調整区域
 公開：平成21年6月（自然観察ゾーン）
 平成26年4月（利用拠点ゾーン）
 平成26年7月（散策の森ゾーン）
 平成27年7月（散策の森ゾーン北口エリア）



位置図

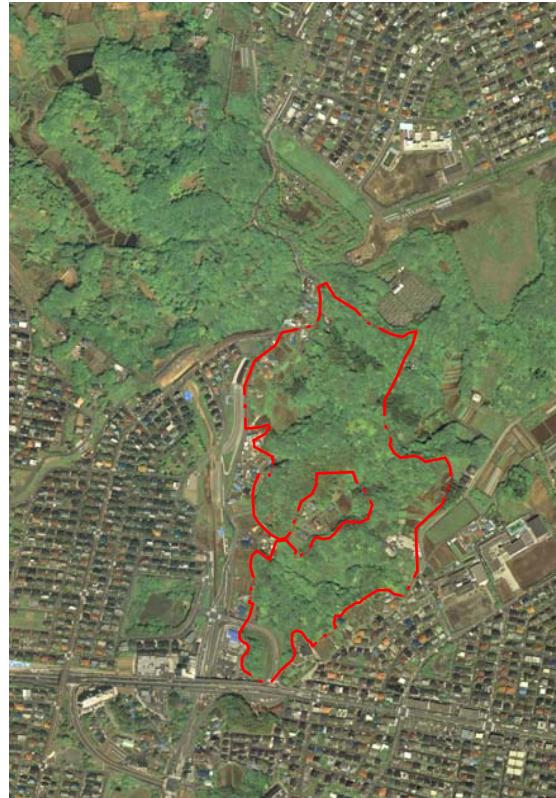


都市計画図



公開範囲図

(2) 土地の変遷

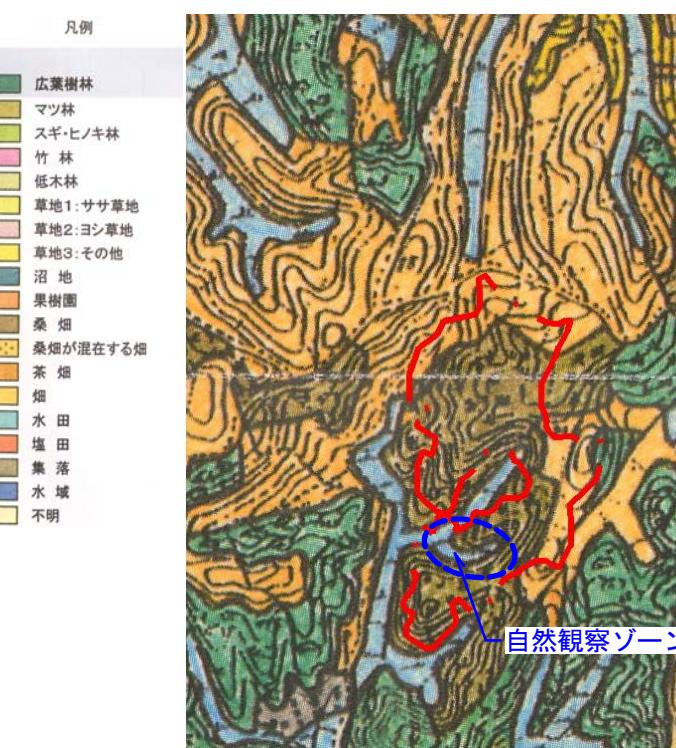


平成16年航空写真 (横浜市)

- ・平成16年には周辺部は全域宅地開発されていて、市街化調整区域の緑地が平成26年以降も残っています。
- ・小菅ヶ谷北公園は、この市街化調整区域の重要な緑地となっています。



平成26年航空写真 (横浜市)



明治中期横浜の植生図

(横浜国立大学・横浜市環境科学研究所)



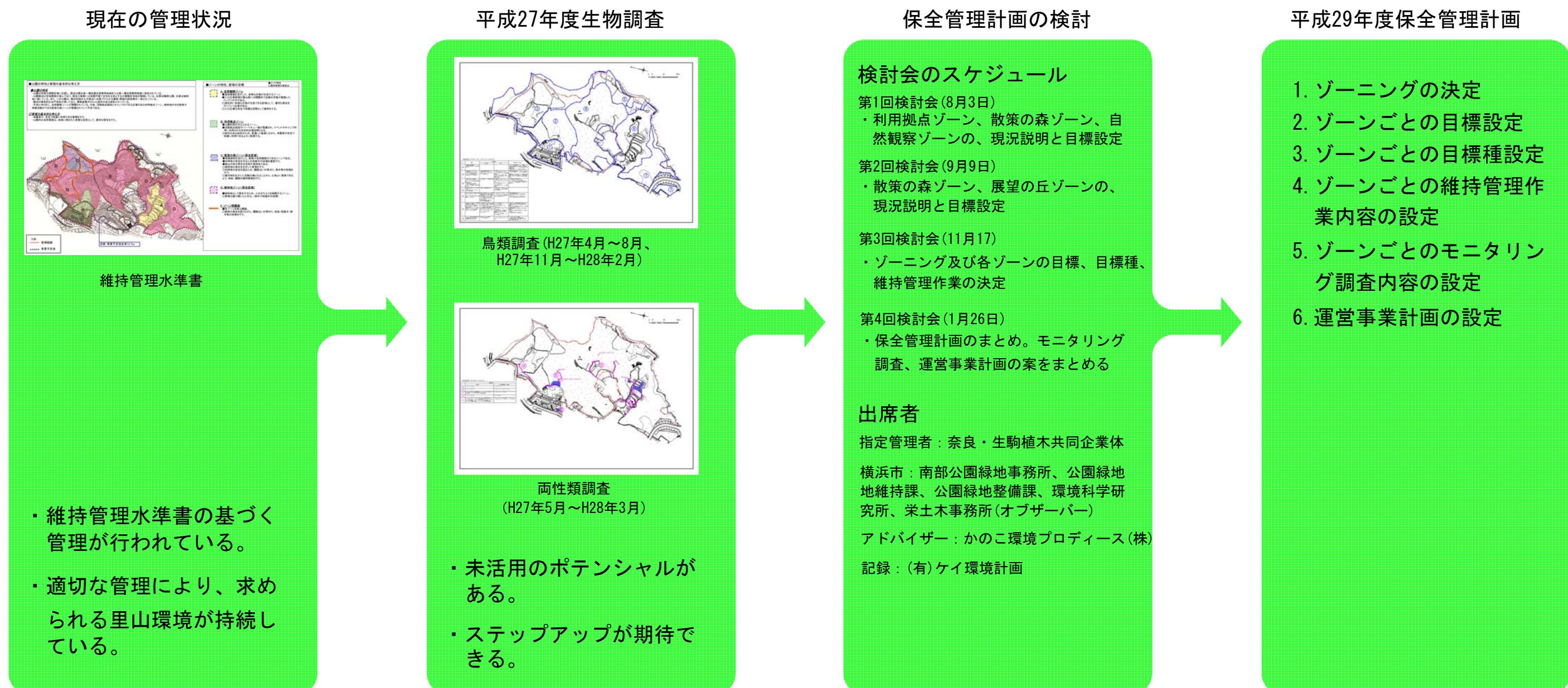
明治初期～中期
歴史的農業環境閲覧システム

- ・自然観察ゾーンの湿地は明治期の水田に由来します。
- ・斜面部はマツ林であったと推察されます。

■計画の目的

1. 潜在するポテンシャルを活用した、里山環境ステップアップの目標を示します。
2. 目標の環境を創出・継続するための方法を示します。(管理方法とモニタリング調査の方法)
3. 現在求められている里山利用の多様性を踏まえ、現代の里山環境システムの方向を示します。

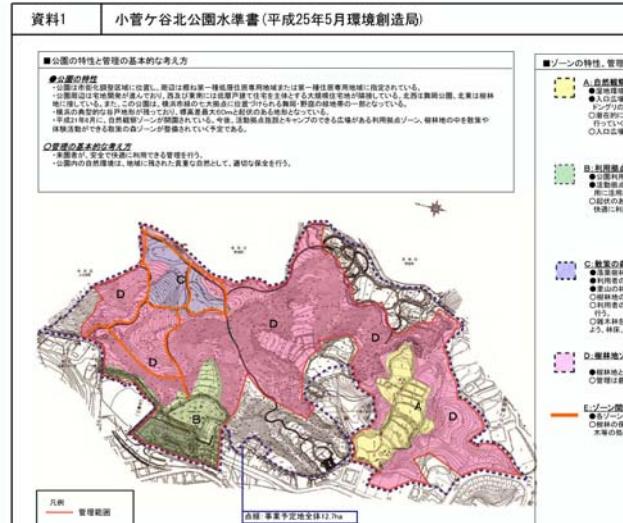
■策定の流れ



3. ゾーニング計画

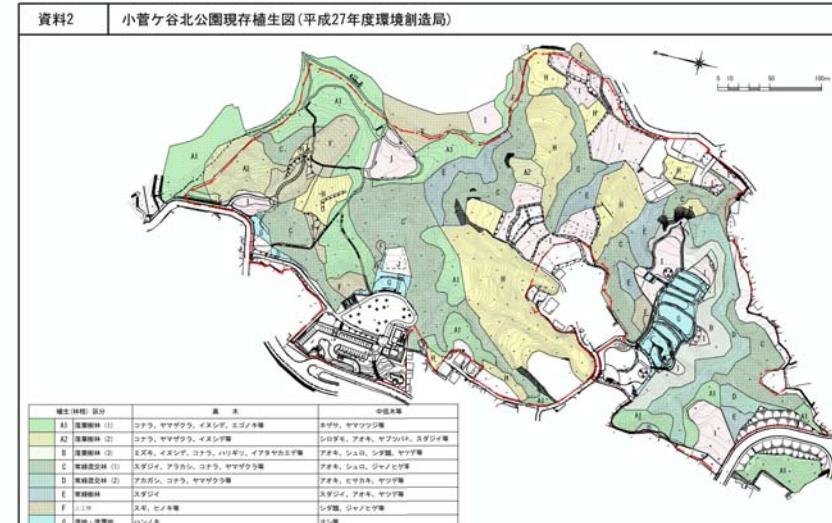
3-1 ゾーニング計画の考え方

■小菅ヶ谷北公園水準書



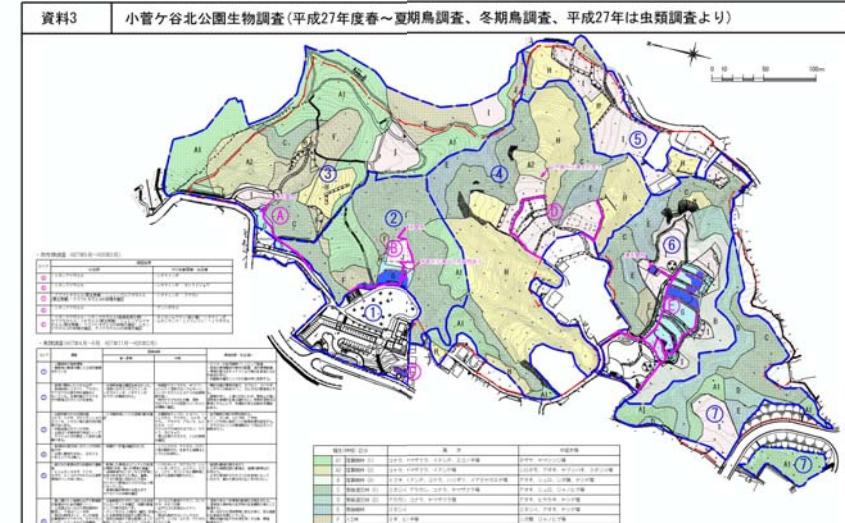
ゾーンの特性と管理計画を多少修正

■小菅ヶ谷北公園現存植生図



植生区分に合わせゾーン境界を微調整

■小菅ヶ谷北公園生物調査

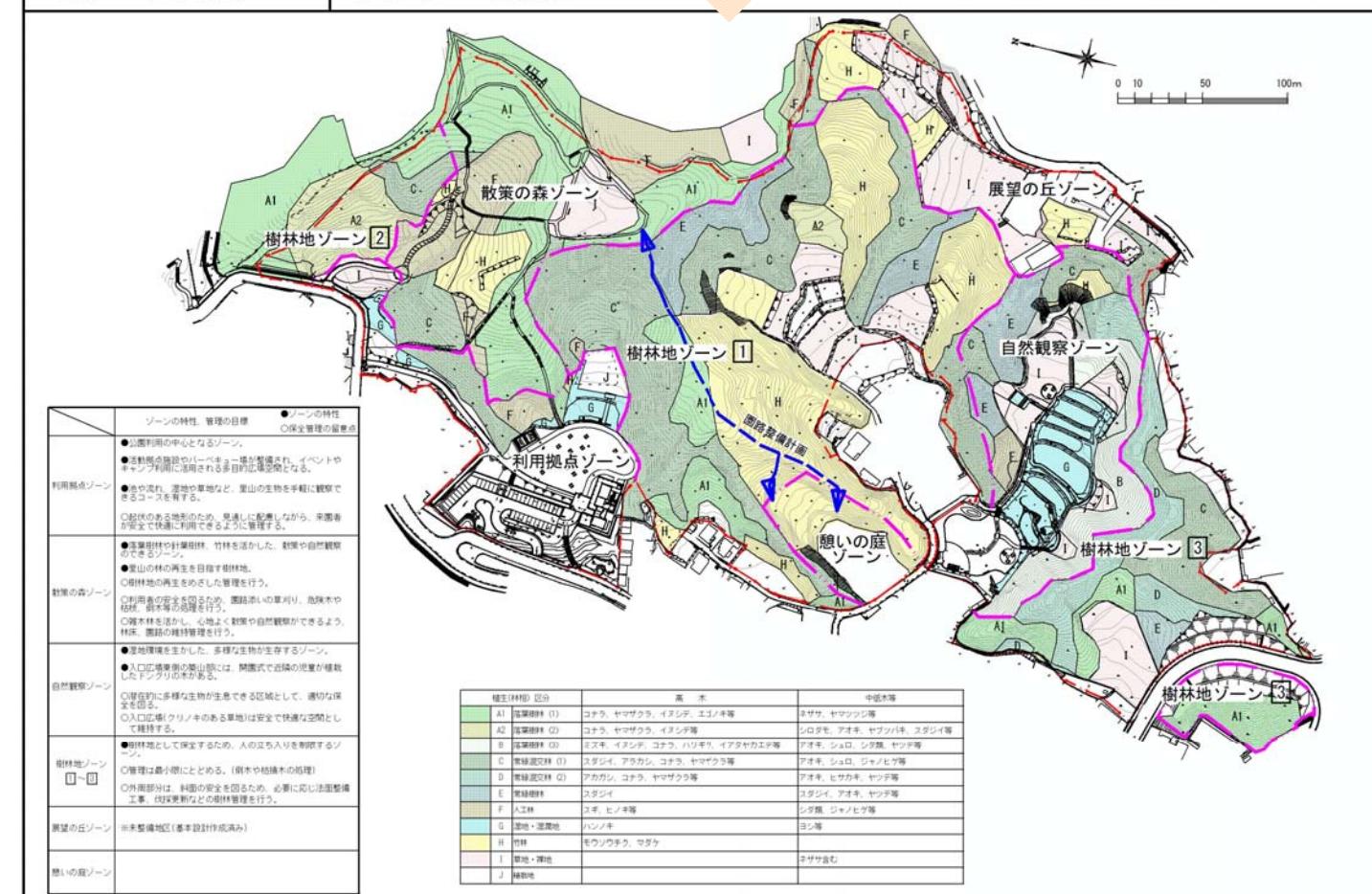


鳥類調査のエリア設定をゾーン区分の参考とする。
は虫類調査の水系をゾーン区分の参考とする。

■ ゾーニング図

3. ゾーニング計画

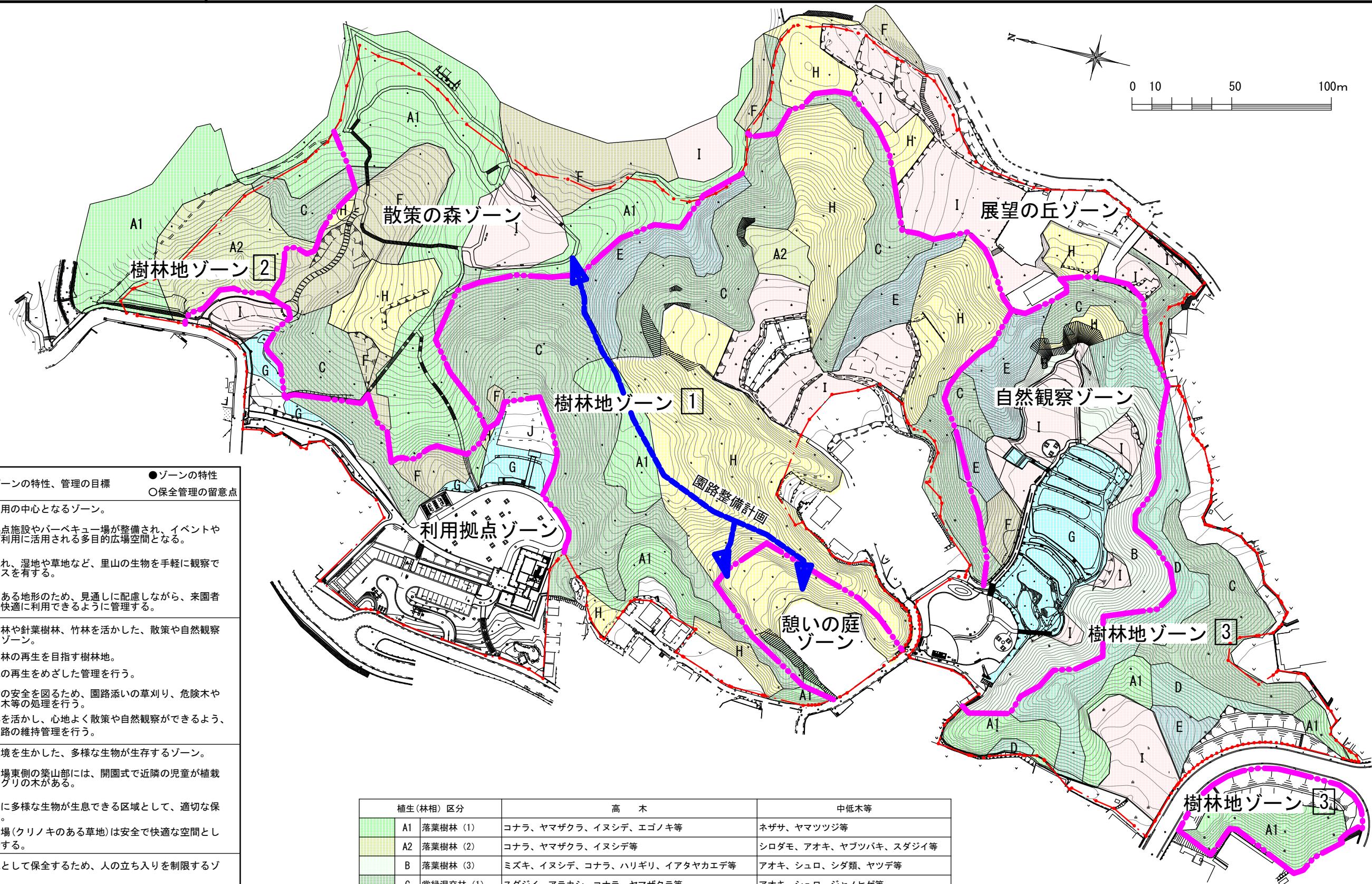
3-2 ゾーニング図



3. ゾーニング計画

3-2 ゾーニング図

●ゾーンの特性、管理の目標 ○保全管理の留意点	
利用拠点ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ●公園利用の中心となるゾーン。 ●活動拠点施設やバーベキュー場が整備され、イベントやキャンプ利用に活用される多目的広場空間となる。 ○池や流れ、湿地や草地など、里山の生物を手軽に観察できるコースを有する。 ○起伏のある地形のため、見通しに配慮しながら、来園者が安全で快適に利用できるように管理する。
散策の森ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ●落葉樹林や針葉樹林、竹林を活かした、散策や自然観察のできるゾーン。 ●里山の林の再生を目指す樹林地。 ○樹林地の再生をめざした管理を行う。 ○利用者の安全を図るため、園路添いの草刈り、危険木や枯枝、倒木等の処理を行う。 ○雑木林を活かし、心地よく散策や自然観察ができるよう、林床、園路の維持管理を行う。
自然観察ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ●湿地環境を生かした、多様な生物が生存するゾーン。 ●入口広場東側の築山部には、開園式で近隣の児童が植栽したドングリの木がある。 ○潜在的に多様な生物が生息できる区域として、適切な保全を図る。 ○入口広場(クリノキのある草地)は安全で快適な空間として維持する。
樹林地ゾーン ①～③	<ul style="list-style-type: none"> ●樹林地として保全するため、人の立ち入りを制限するゾーン。 ○管理は最小限にとどめる。(倒木や枯損木の処理) ○外周部分は、斜面の安全を図るために必要な法面整備工事、伐採更新などの樹林管理を行う。
展望の丘ゾーン	※未整備地区(基本設計作成済み)
憩いの庭ゾーン	



植生(林相) 区分	高木	中低木等
A1 落葉樹林 (1)	コナラ、ヤマザクラ、イヌシデ、エゴノキ等	ネザサ、ヤマツツジ等
A2 落葉樹林 (2)	コナラ、ヤマザクラ、イヌシデ等	シロダモ、アオキ、ヤブツバキ、スダジイ等
B 落葉樹林 (3)	ミズキ、イヌシデ、コナラ、ハリギリ、イタヤカエデ等	アオキ、シユロ、シダ類、ヤツデ等
C 常緑混交林 (1)	スダジイ、アラカシ、コナラ、ヤマザクラ等	アオキ、シユロ、ジャノヒゲ等
D 常緑混交林 (2)	アカガシ、コナラ、ヤマザクラ等	アオキ、ヒサカキ、ヤツデ等
E 常緑樹林	スダジイ	スダジイ、アオキ、ヤツデ等
F 人工林	スギ、ヒノキ等	シダ類、ジャノヒゲ等
G 湿地・湿潤地	ハンノキ	ヨシ等
H 竹林	モウソウチク、マダケ	
I 草地・裸地		ネザサ含む
J 植栽地		

(1)園路添い湿地

特性：北西斜面で水系を有するこの場所は、生物相が豊かで保全管理上、ポテンシャルが高い。

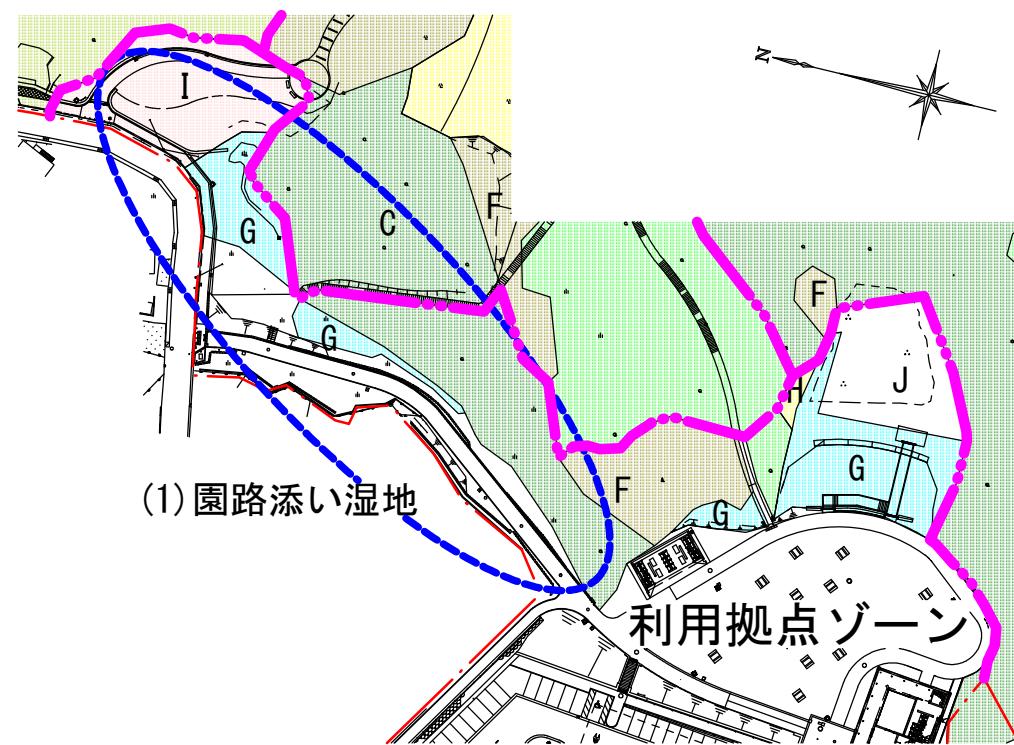
管理状況：土手は、適切な管理により、ヤマユリ等生育する環境が維持されている水系は部分的に管理されているが、一体性を持った管理は行われていない。

利用：レストハウス、駐車場、バーベキュー場等の施設が集中し、本園の中では、最も利用者が多い場所である。

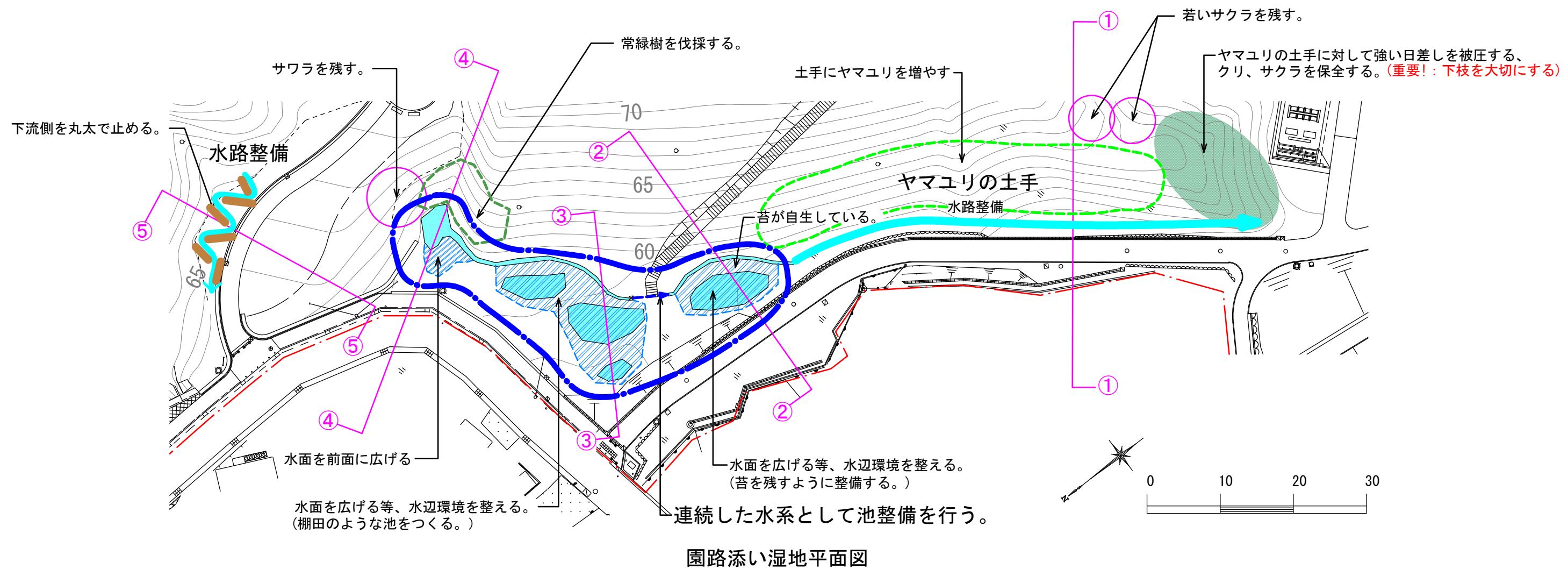
園路は平坦で、ビジターにとって手軽に里山の自然に接することのできる場所である。

ポテンシャルの高い自然環境を活用して、より充実した里山環境の保全・育成を図って行く。

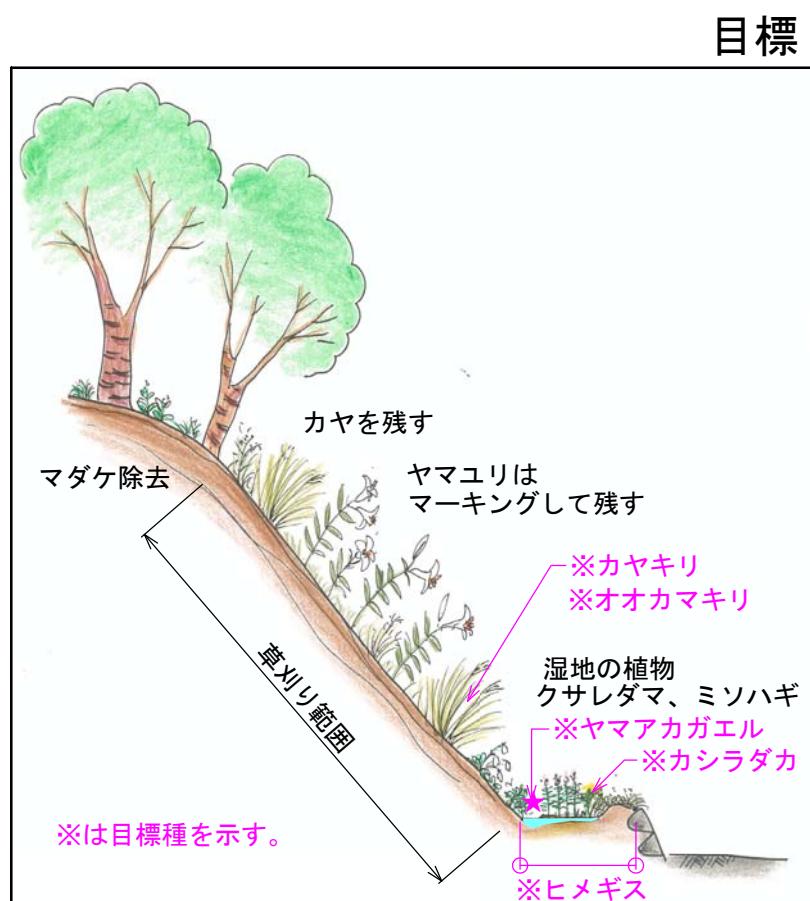
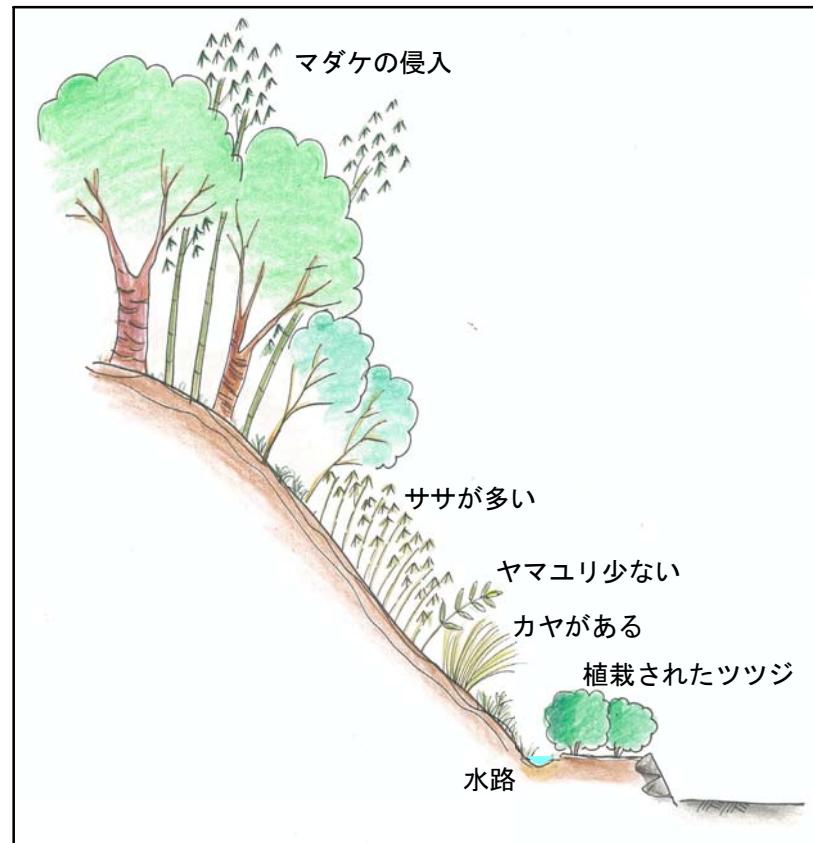
目標：ポテンシャルの高い自然環境を活かし、手軽な観察コースをつくる。



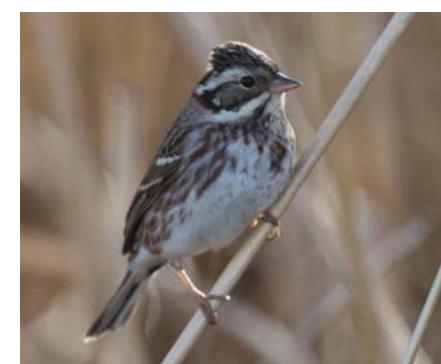
(1)園路添い湿地 9月



断面図 ①(ヤマユリの土手) 現在



【目標種】

カヤキリ
(環境科学研究所:七里)オオカマキリ(獅子ヶ谷)
(環境科学研究所:七里)ヤマアカガエル
(小菅ヶ谷北公園両生類調査)ヒメギス♂
(環境科学研究所:七里)カシラダカ
(小雀公園生物調査)

作業Step1 目標：ヤマユリの観賞スポット育成

- ヤマユリを増やす
2月：地際まで草刈りを行う。(ヤマユリの種子が落ちてから)
※種子散布が完了してから、または完熟種子を落としてから。
- 5月：ヤマユリにマーキングを行う。(6月の草刈りの準備)
6月：ヤマユリを残して刈高10~15cmで草刈り。ヤマユリを
を効果的に見せることができる。

【目標種】



(小菅ヶ谷北公園)

作業Step2 目標：カヤ場と湿性草地をみせる

- カヤ場をつくる
2月：カヤの親株を残し草刈りを行う。カヤ場とヤマユリは
セットで見せることができる
- 水路(湿地)の整備
既存水路はホタルの生育に適している。11月中旬に湿地を拡幅整備し、
既存樹のツツジをミソハギ、ハンゲショウ、クサレダマ、セリ
等の湿性植物に転換していく。
- クサボケ、フジバカマに変えるには、ネザサを取る。

注意点

- ※-1 エリアは奥のサクラまでとし、若いサクラは残す。
クリノキは強い日差しからヤマユリを守り重要である。
そのため下枝を大切に残した管理を行う事。
- ※-2 マダケの進入を防ぐこと。
- ※-3 キアゲハ、ナガサキアゲハ、カラスアゲハ等の
アゲハチョウ類が出現することは、ほど良い明
るさの指標である。

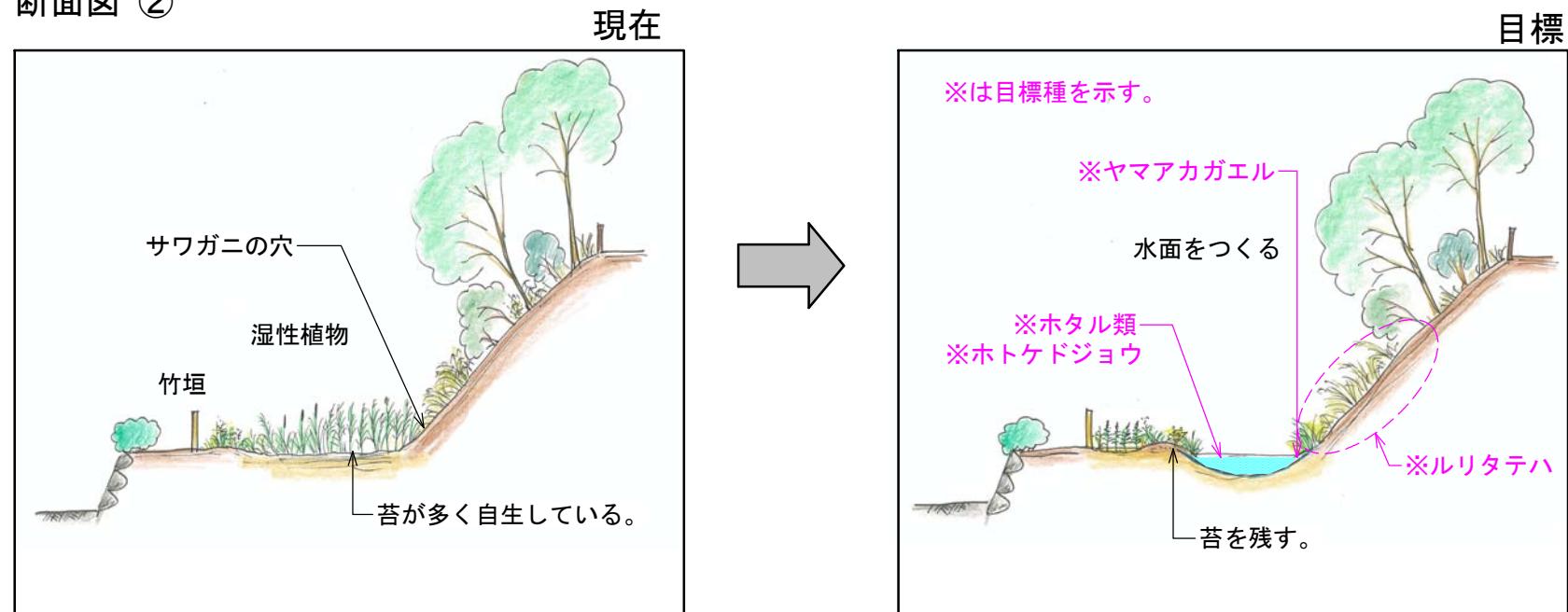


断面図 ①(平成28年7月)



断面図 ①(平成28年12月)

断面図 ②



断面図 ②(平成28年7月)



断面図 ②(平成28年12月)



【目標種】



ルリタテハ
(小菅ヶ谷北公園指定管理者)



ゲンジボタル
(環境科学研究所：七里)



ヘイケボタル
(環境科学研究所：七里)



ホトケドジョウ
(環境科学研究所：七里)



ヤマアカガエル
(小菅ヶ谷北公園両生類調査)

作業Step 目標：湿地のグレードアップ

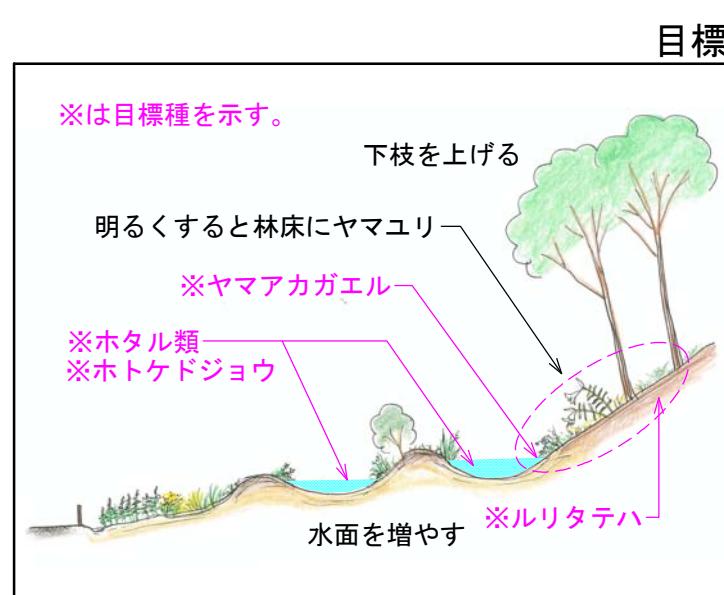
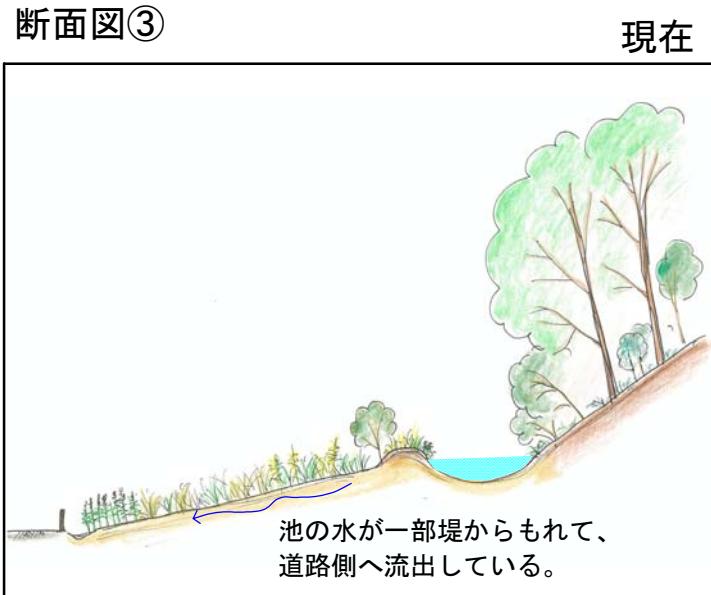
- ・自生している苔を残し、面積が広く、水量の安定した開放水面をつくる。
- ・安定した開放水面により、ヤマアカガエル、ヒキガエル、ホタル、ホトケドジョウ、ヨシノボリの生息が期待出来る。
- ・モニタリング調査等の結果を踏まえ、目標とする環境を選択する。(2月の草刈りのあり方等) 作業に応じた環境状況を観察して、バランスをみながら目標環境を決めて行く。

選択肢-1：ヨシを残すとカラ類等の鳥の餌場になる。

選択肢-2：モニタリング調査で、ホトケドジョウの繁殖が確認されればヨシは刈る。

選択肢-3：ヨシを取って、セリ、ミゾソバ、タネツケバナなどの湿性植物に変われば、コサギ、カシラダカが入って来る。カシラダカはセンダングサ、ミゾソバの実を食べる。

断面図③



作業Step1 目標：湿地の斜面にヤマユリを加える

- コナラの下枝を取り、林床を明るくするとヤマユリが出る。

作業Step2 目標：湿地のグレードアップ

- 水域を増やす(防水シートで止水)ことで、ミソハギ、ワレモコウが生息する湿原景観をつくる。
- 落葉樹を補植すると、ホタルも現れる。
- 自然環境のポテンシャルが高く、少し手を入れると、すごく良くなる。

2月：全てを刈る。(自生するミソハギ群落の育成)



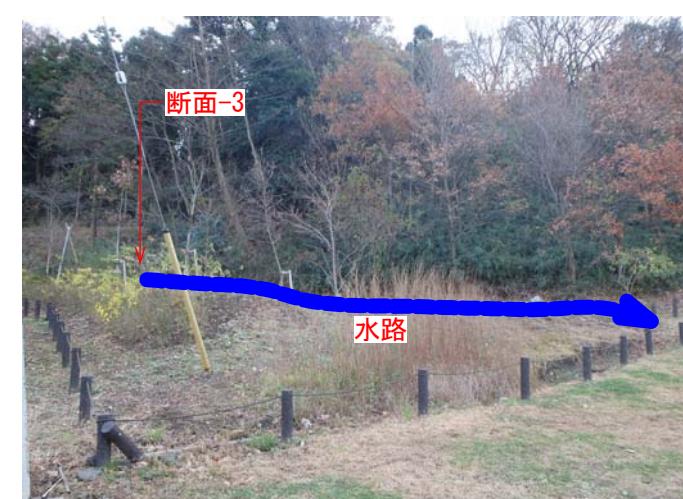
断面図 ③(平成28年7月)



断面図 ③(平成28年12月)



断面図 ③(平成28年12月)



断面図 ③(平成28年12月)

【目標種】



ルリタテハ
(環境科学研究所：七里)



ゲンジボタル
(環境科学研究所：七里)



ヘイケボタル
(環境科学研究所：七里)

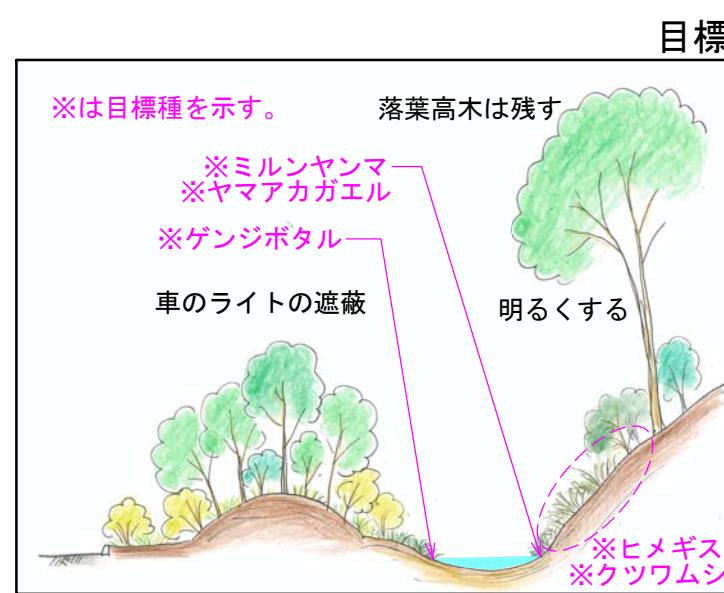
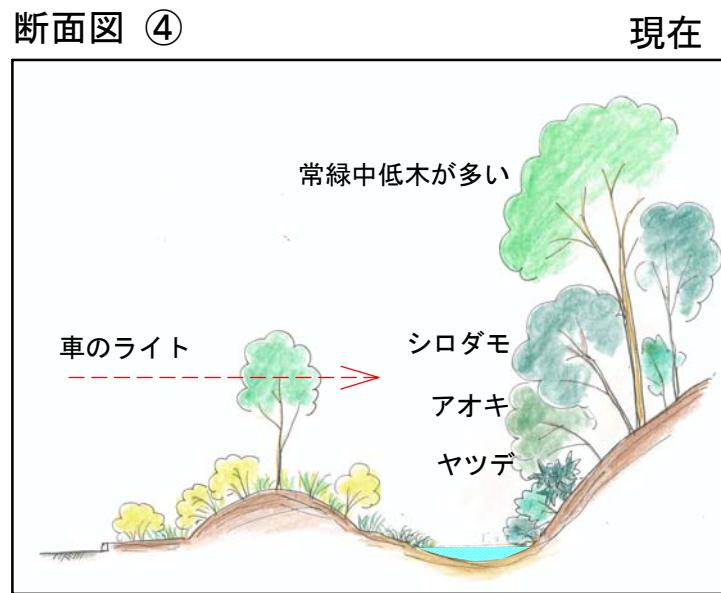


ホトケドジョウ
(環境科学研究所：七里)



ヤマアカガエル
(小菅ヶ谷北公園両生類調査)

断面図④



作業Step1 目標：ゲンジボタルを増やす

- ・山側の木はサワラを残し常緑樹は全て切り(11~3月)、明るくする。
- ・ミズキは剪定する。
- ・道路のライトを遮蔽するため、ハンノキを2本程度補植する。

作業Step2 目標：開放水面を拡張し、ホタル生息地のグレードアップ

- ・ゲンジボタルを増やすためには、現状の水面はそのまま残し、他に水面を広げると。
- ・水路に、棚田のような畦をつくり、蛇行し連続した水面とする。
- ・一部常緑樹を残すと、ミルンヤンマ等の大型トンボの産卵場所にもなる。

注意点

- ・道路のライトはホタルにとって最悪であり、遮蔽する必要がある。
- ・山側の常緑樹を取り、林内を明るく保つこと。
- ・常緑樹は4~5年に1回切り戻し、生息環境を維持する。



ミルンヤンマ

(環境科学研究所：七里)



ヒメギス♂

(環境科学研究所：七里)



クツワムシ

(環境科学研究所：七里)



ゲンジボタル

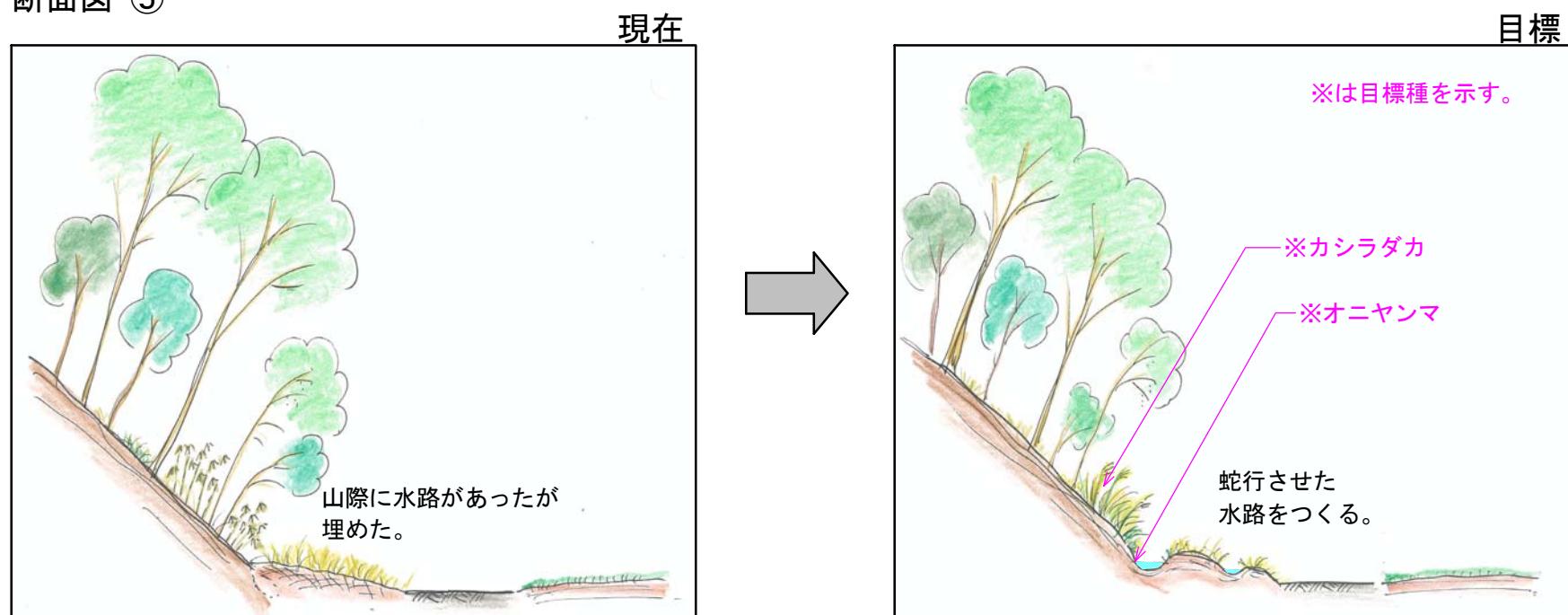
(環境科学研究所：七里)



ヤマアカガエル

(小菅ヶ谷北公園両生類調査)

断面図 ⑤



断面図 ⑤(平成28年7月)



断面図 ⑤(平成28年12月)

作業Step1 目標：明るい草地の維持

- 明るいアゲハチョウの入って来る場所を維持する。カラスザンショウを残す。

作業Step2 目標：湧水を有効活用し湿性草地に

- 発生している湧水は排水しているので、湧水をストックしてから排水し、明るい湿地性の草地をつくる。
- 蛇行しながら湧水を流す。蛇行した下流側を丸太で止める。防水シートは不要。水路幅は40cm程度で、水路の間にはセリができる。
- 生物の目標は、明るい湿地性の草原であるから、ヒメギス、キアゲハ。
- ワンド(溜まり)を設けるとよい。アメンボやホタル幼虫の生息が期待できる。



断面図 ⑤(平成28年12月)

【目標種】

ヒメギス♂
(環境科学研究所：七里)キアゲハ
(小雀公園生物調査)オニヤンマ
(小菅ヶ谷北公園指定管理者)カシラダカ
(小雀公園生物調査)

(2) 芝生広場周辺の湿地

特性：谷戸の湧水が集水された小さな池で、バーベキュー場に近接し観察利用しやすい。

管理状況：8月にヨシ刈りを行った。トンボの生存する間は水面が出るが、11月以降は、高さ1m程度のヨシ原に戻る。

利用：レストハウス、駐車場、バーベキュー場等の施設が集中し、本園の中では、最も利用者が多い場所である。

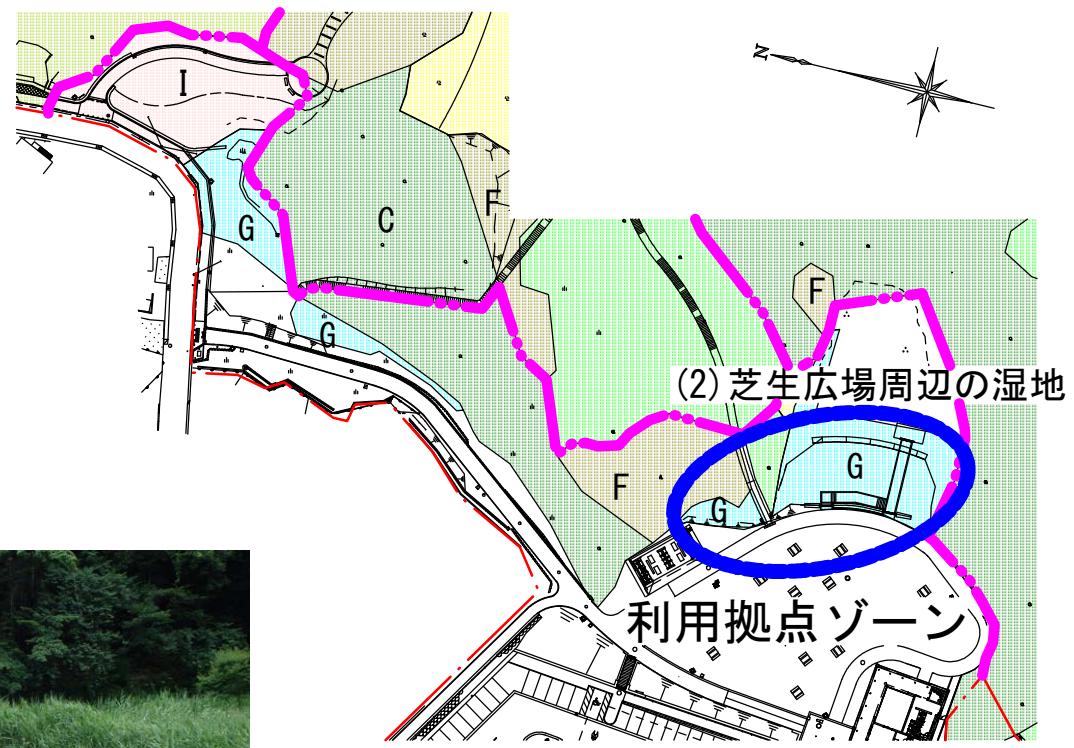
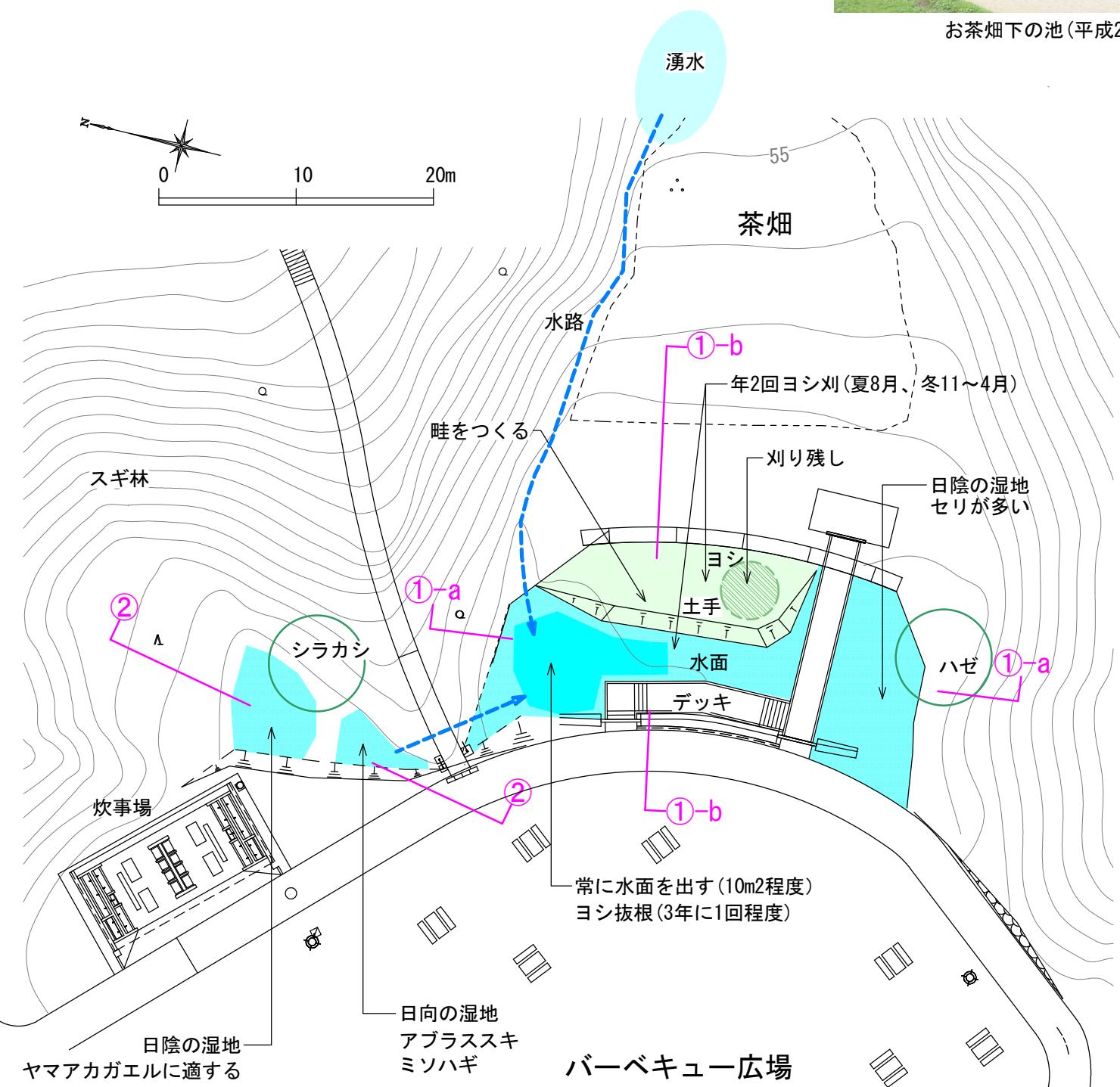
バーベキュー場に隣接し、気軽に自然に親しめる場所として価値がある。

目標：ポテンシャルの高い自然環境を活用して、手軽にふれあえる水辺環境をつくる。

ヨシを残すところと、取るところを明確にし、多様な環境をつくる。



お茶畑下の池(平成28年7月)



ヨシ刈り前(平成28年7月)



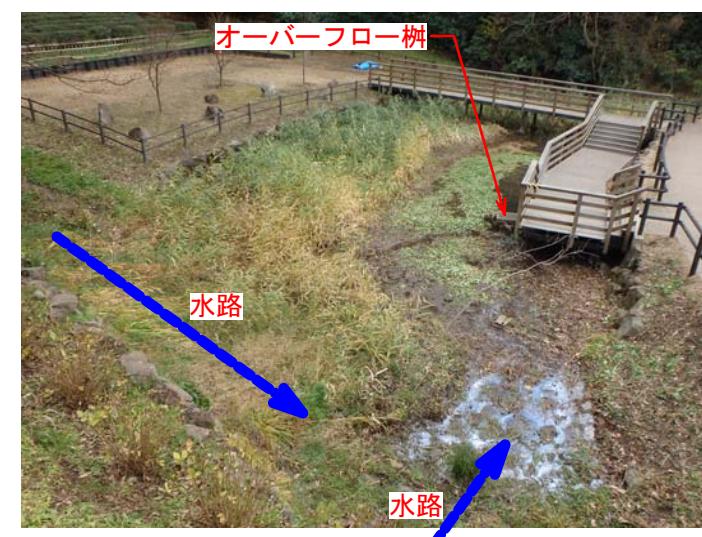
ヨシ刈り後(平成28年8月)



ヨシ刈り後(平成28年9月)

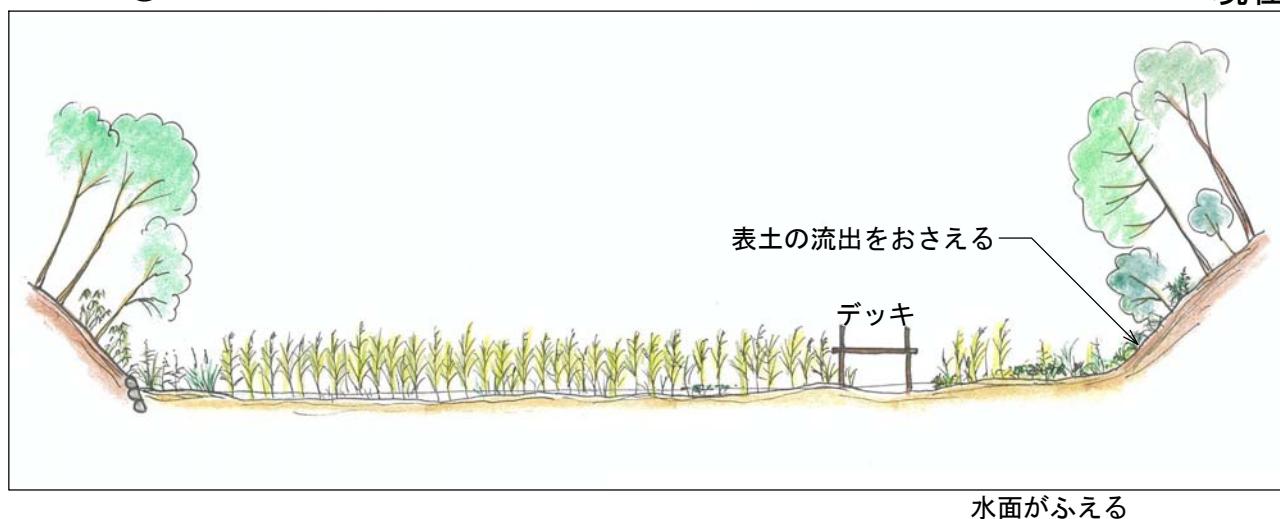


冬のヨシ原(平成28年12月)

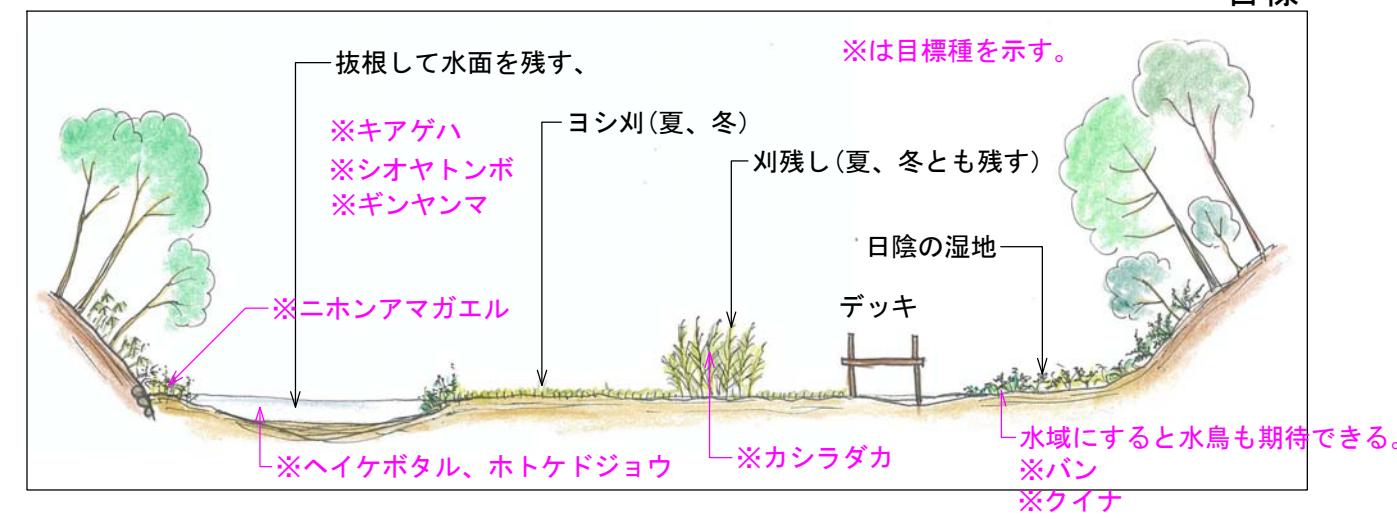


冬のヨシ原(平成28年12月)

断面図①-a



現在

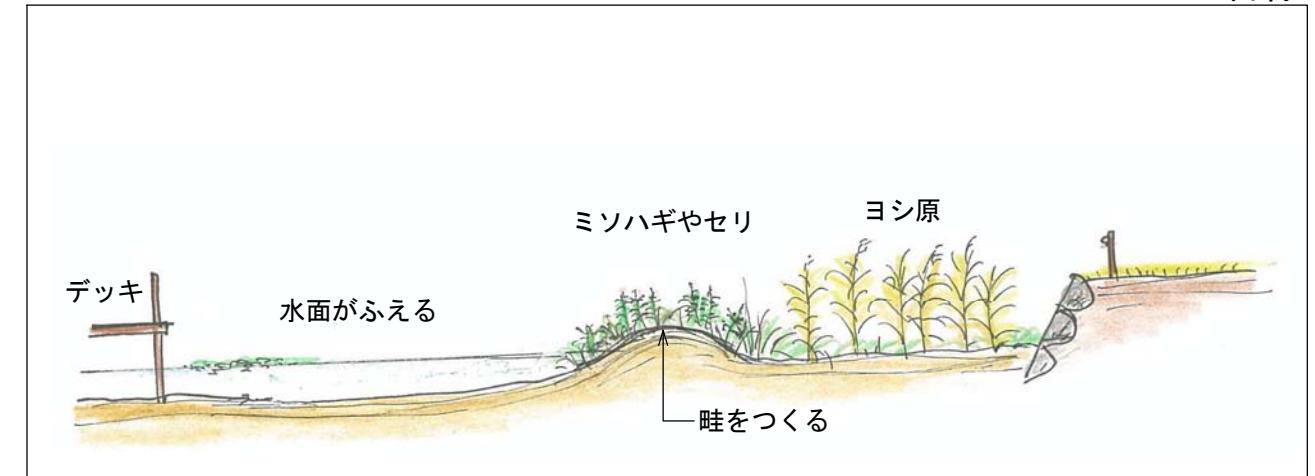


目標

断面図①-b



現在



目標

現状：開放水面を確保しトンボを増やす

- 夏にヨシ刈りを行い開放水面を出すことで、トンボの産卵場所をつくる。
- ニホンアマガエル、ホトケドジョウ、メダカ、シオヤトンボの生息環境を保全する。



目標：ホタルとカエルの水辺

- ヨシは一部を抜根して除去し、湿地の一部(10m²程度)を、開放水面として通年維持する。
- 開放水面を維持すると、ヘイケボタル、ヤマアカガエル、ニホンアマガエル、シュレーゲルアオガエル、ギンヤンマ、キアゲハ、鳥はパン、クイナ、カシラダカ等が入る。
- 全面を池にせず畦をつくり、掘った場所を水面にする。畦にはセリ、ミソハギ等ができる。

ヘイケボタル
(環境科学研究所：七里)ニホンアマガエル
(小菅ヶ谷北公園両生類調査)ヤマアカガエル
(小菅ヶ谷北公園両生類調査)シュレーゲルアオガエル
(小菅ヶ谷北公園両生類調査)ギンヤンマ
(環境科学研究所：七里)シオヤトンボ
(環境科学研究所：七里)

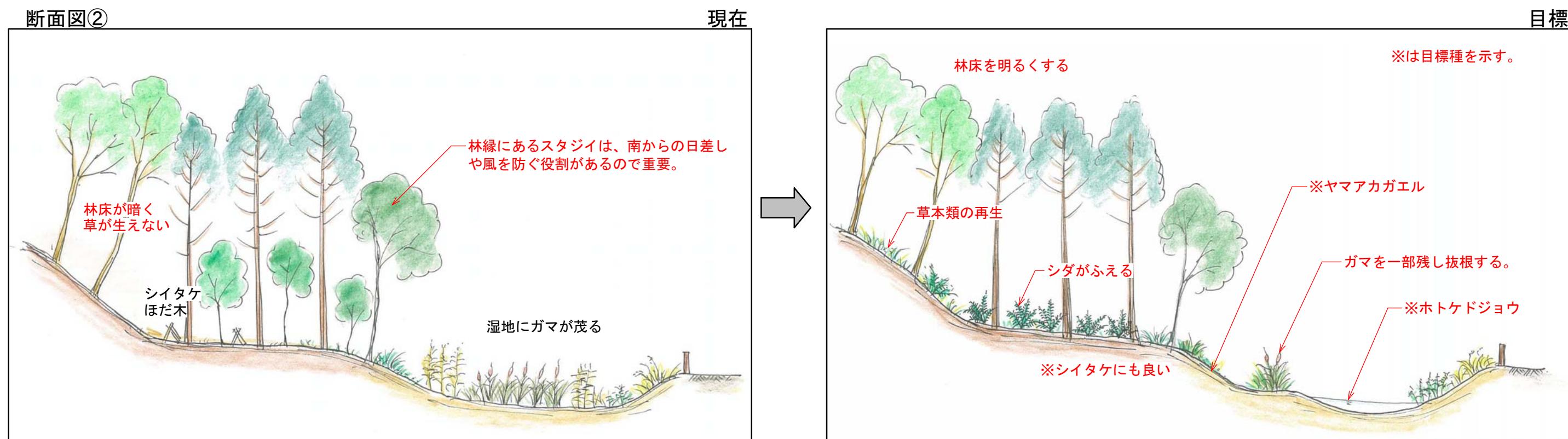
注意点

※-1 開放水面にアサザやヒツジクサ類が増えると、水面を覆ってしまうので注意する。

保全・管理の留意点

- 開放水面により、止水性のホタル、カエル、トンボ等の繁殖地となる。また、ヨシを残すことによりメイガ類が発生し、越冬鳥類の餌場となることが考えられる。
- 今後の調査を踏まえ、開放水面とヨシ原のバランス等を調整していく必要がある。

キアゲハ
(小雀公園生物調査)ホトケドジョウ
(環境科学研究所：七里)パン
(小雀公園生物調査)クイナ
(環境科学研究所：七里)カシラダカ
(小雀公園生物調査)



作業Step 目標：開放水面を確保しトンボやカエルを増やす

- ・ ガマは抜根する。3年に1回数株残して抜根する等、管理のローテーションを組む。
- ・ ガマを絶やすのであれば、夏に抜根する。定期的抜根してガマを残すのであれば冬に抜根する。抜根したガマは土に混ぜて畦に付ける。
- ・ 日陰の湿地は水面ができたら、ヤマアカガエルに良い環境になる。
- ・ 日向はクロスジギンヤンマ等の、トンボにとって良い環境になる。

【目標種】



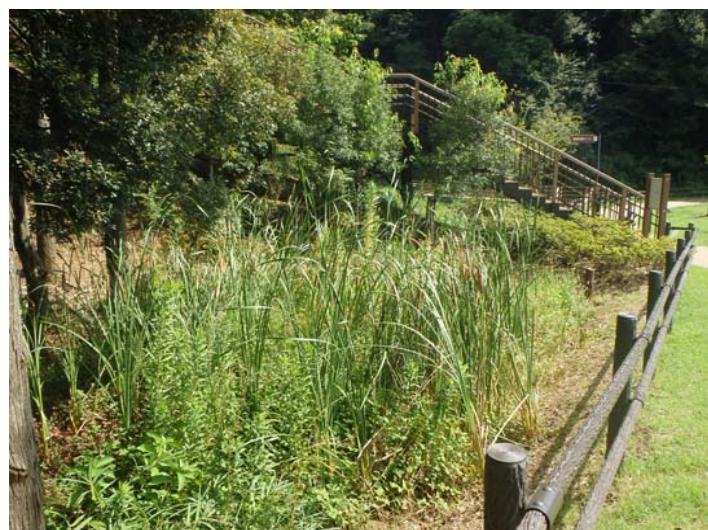
ヤマアカガエル
(小菅ヶ谷北公園両生類調査)



ホトケドジョウ
(かのこ環境プロデュース(株) : 神保)



クロスジギンヤンマ
(小菅ヶ谷北公園指定管理者)



ガマが茂る湿地(平成28年9月)



ガマが茂る湿地(平成28年12月)

4-2 散策の森ゾーン

目標：里山の森を再生し、雑木林、スギ・ヒノキ植林地、竹林、草地等、多様な里山環境で散策や自然観察のできるゾーン。

4-2-1

(1) 雜木林の尾根

特性：コナラ、ヤマザクラ、イヌシデ、エゴノキ等の雑木林で、アゲハチョウ類、アオゲラ等の多様な生物の生息地である。

管理状況：定期的に管理され、安定した雑木林を維持している。

今後もこの管理状態が継続されるよう留意する。

ジャコウアゲハの餌となるオオバウマノズクサを残すように管理している。

利用：スギ・ヒノキ林、竹林と共に、散策の森ゾーンの多様な二次林景観の一つである。

目標：現状を維持し、蝶道としてのグレードアップを図る。

作業Step1 目標：蝶道をつくる。

- 現在も蝶道になっているが、蝶の飛翔する空間を明暗に注意しながら広げる。
- 園路両側を各5.0mぐらいの幅で、常緑低木を取り蝶道を広げる。(3年に1回程度)
- クサギ、カラスザンショウ、クサギ、キブシ、シロダモ、サルトリイバラ等の蝶的好む種を選択的に残す。(樹高3.0m位で止めること。)
- 現在のオオバウマノズクサを残す管理は継続する。
- 市内のアゲハチョウ類の多く観察できる場所となる。

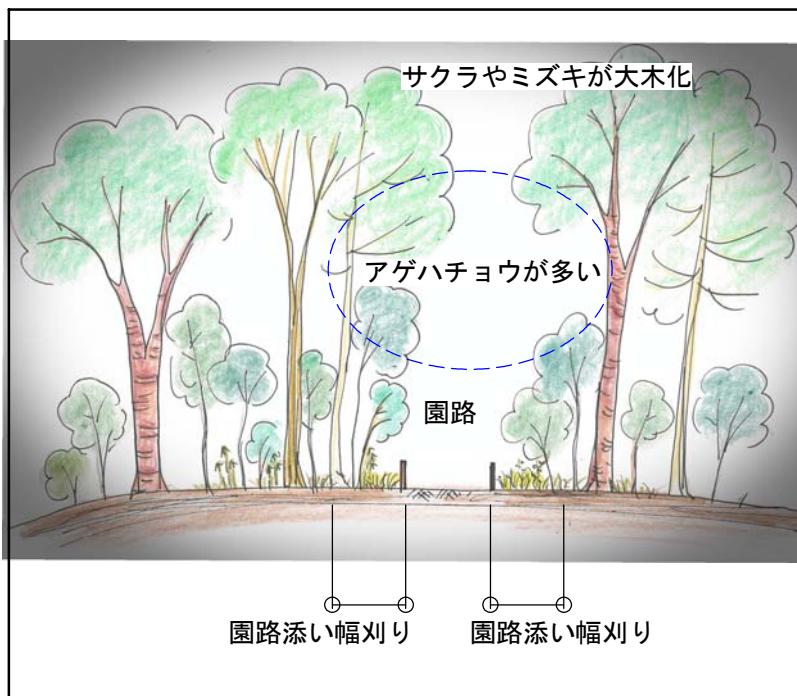
作業Step2 目標：里山の林床植生を育成する。

- 蝶道の環境維持を図りながら、里山植生を育成する。
- モニタリング調査の結果を踏まえ、指標種、目標種を決めて行く。

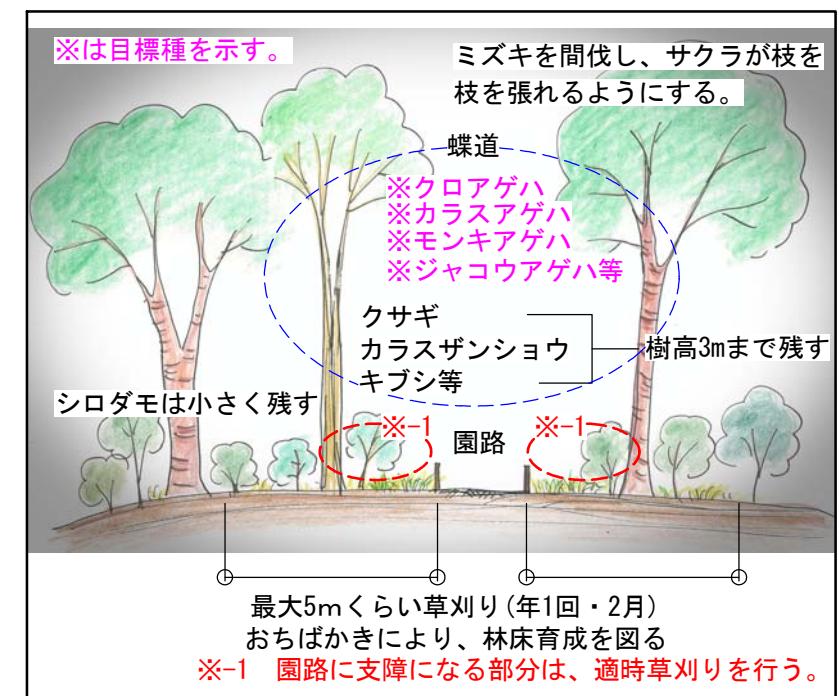
注意点

- ミズキ、ヤマザクラの大木はこのまま放置すると、園路上の枯れ枝処置が困難になり問題。
- ミズキは伐採した方が良い。ミズキを切るとヤマザクラは横に枝を広げる。
- ヤマザクラ、オオシマザクラは残して大木にしてゆく。下枝は枯れ枝になるので除去する。
- 園路添いの放置された切り株は、スズメバチの巣になるので、園路から離す。
- 蝶道の幅員を広げすぎると蝶道が維持できないので注意する。

現在



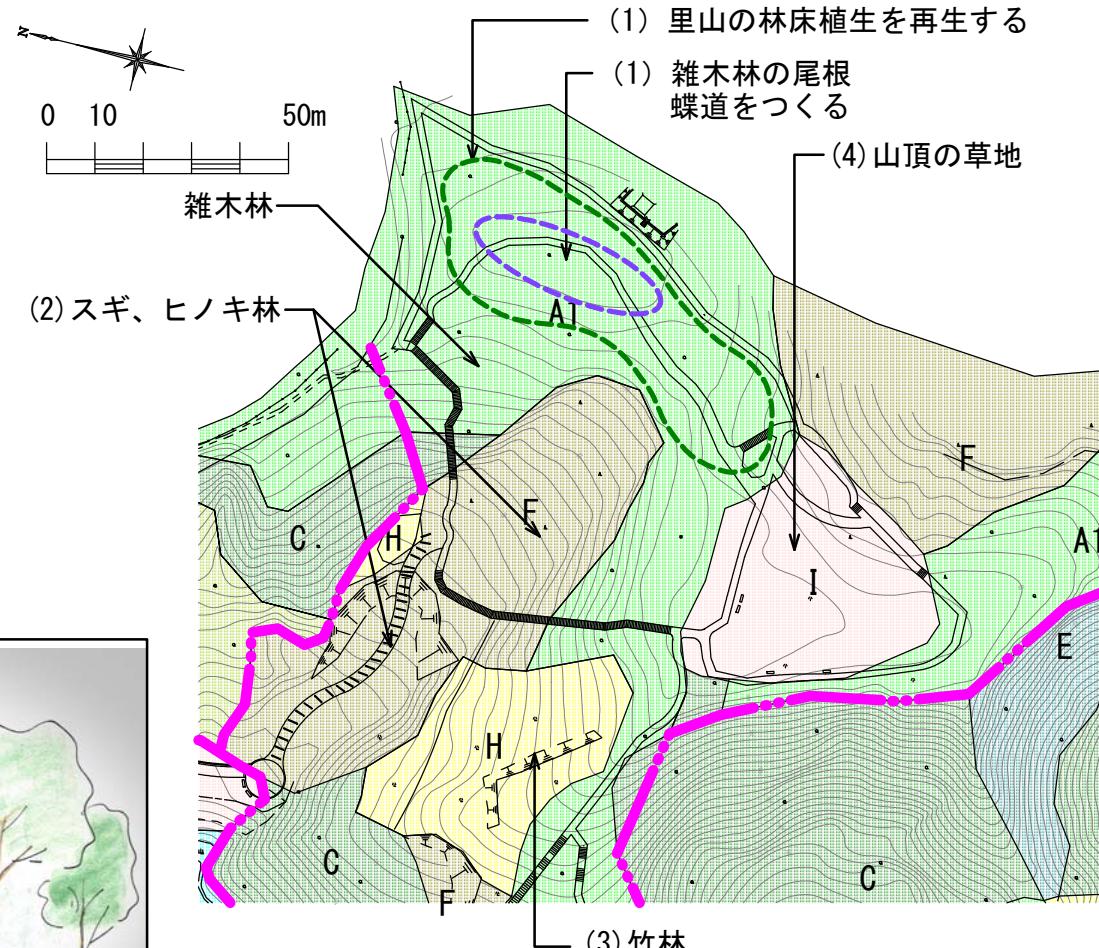
目標



雑木林尾根の園路(平成28年9月)



蝶道イメージ図



クロアゲハ
(横浜市森づくりガイドライン)



カラスアゲハ
(小雀公園生物調査)



モンキアゲハ
(小菅ヶ谷北公園指定管理者)



ジャコウアゲハ
(小雀公園生物調査)

(2) スギ・ヒノキ植林地

特性：東西方向に長い谷戸地形で、林床がシダ類やヤブミョウガに覆われた美しいスギ林を形成している。

管理状況：適切な管理により、林床部を含め良好な樹林が保たれている。
今後もこの管理状態が継続されるよう留意したい。

利用：利用拠点ゾーンから入ると散策の森ゾーンの入口部であり、良く管理されたスギ林の植林地景観は、里山景観として印象深い。

目標：現状を維持する。



スギ林入口部(H28年7月)



スギ林シダ林床(H28年7月)

リヨウメンシダ(三保市民の森)
(北川淑子先生)アスカイノデ(三保市民の森)
(北川淑子先生)

適度な空中湿度の維持が大切。

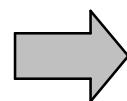
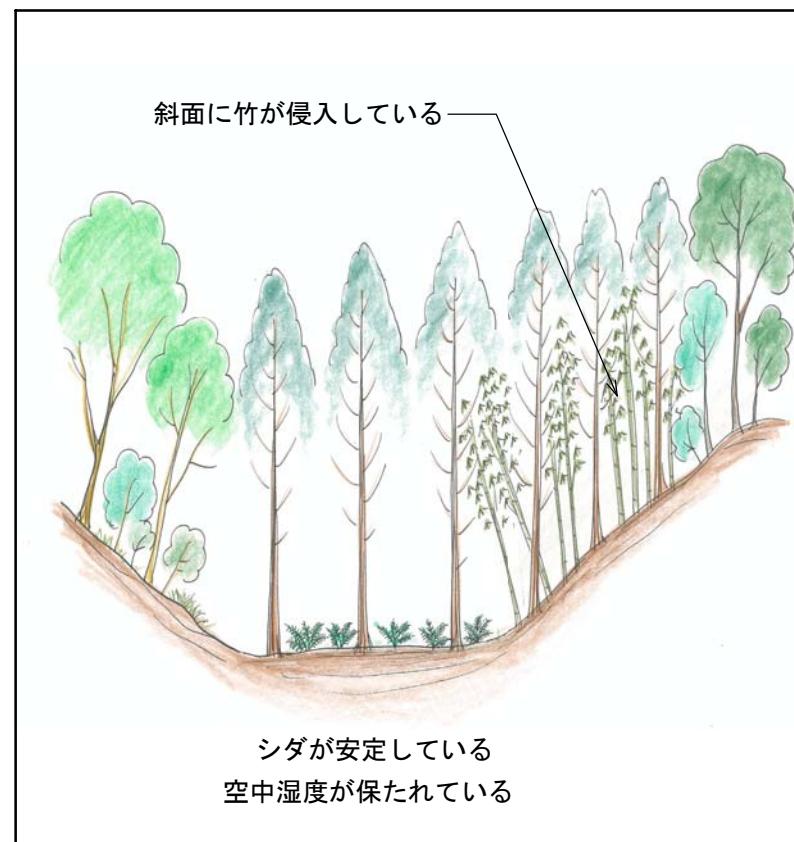


ヤブミョウガ(小菅ヶ谷北公園)

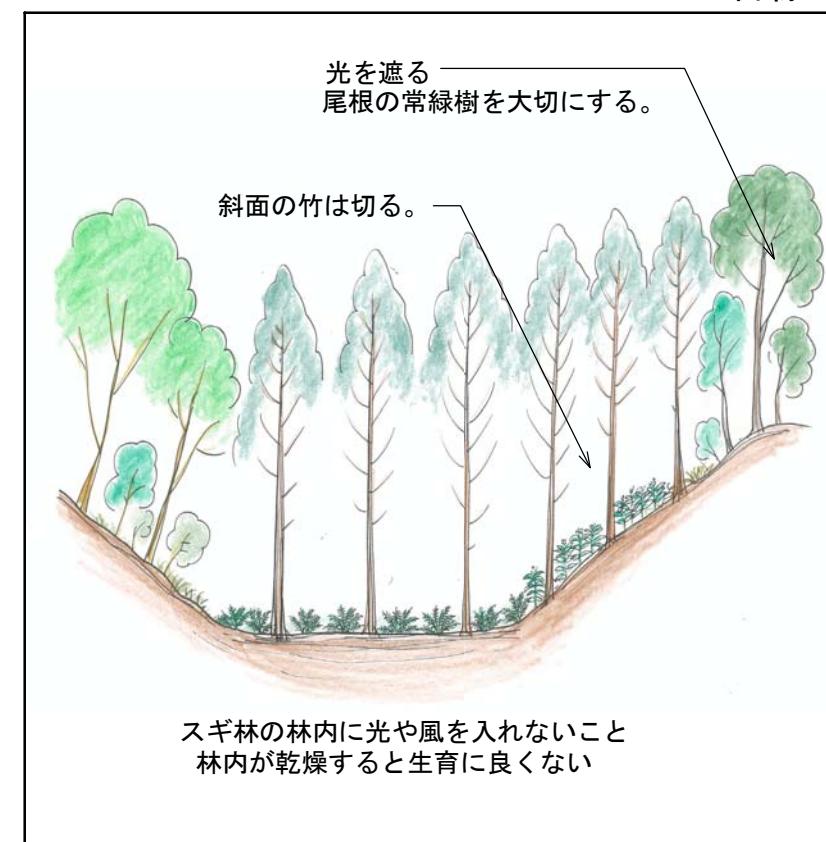
少し明るくなると
ヤブミョウガができる。

断面図

現在



目標



作業：スギ・ヒノキ植林地の管理は現状を維持する。

追加事項として：入口部北側の南斜面を観察ポイントにする。

- ・北斜面に対し管理上困難な点もあり、多少荒れた印象を受ける。
- ・自生するカナムグラはキタテハが好む食草であり、成虫の吸蜜植物のカキノキと共に、生態系として展示可能な環境を整える。
- ・カナムグラは冬に1回刈る。それにより冬は、スミレ、ホタルブクロが出現する。

注意点

- ・スギ林南側の樹林地は、良好なスギ林環境を維持する上で最重要地点である。林内の空間湿度が安定するとシダ類が優先し、風や陽が入るとシダ類は一挙に無くなる。以下の点に留意すること。
- ・常緑樹は絶対に切らない(樹高5mぐらいで止めると効果的)。樹林地の中を塞ぐ。
- ・現在の若い竹は現時点では大切。スギ林に光を入れないように留意する。
- ・将来的には稜線から内側の竹は切り、常緑樹を育てることがほしい。
- ・園路添いの針葉樹は下枝を上げず、光や風を遮蔽するように配慮する。

【目標種】

入口部北側の南斜面の目標種：キタテハ
(横浜市森づくりガイドライン)

(3) 竹林

特性：区切られた範囲を定期的に管理し、良好に竹林が維持されている。

管理状況：竹林内に陽が入り、林床がやや荒れた感じである。竹林内は若い細い竹が多い。

利用：スギ・ヒノキ林、雑木林と共に、散策の森ゾーンの多様な二次林景観の一つである。

目標：外周部に日照を防ぐための樹木を育成し、竹林内に太く大きな竹を育てる。

作業Step1 目標：外周に日照を防ぐための樹木を育て、林内環境を整える。

- ・ 竹林外周には親竹を残さず、下から枝が出る若い竹を残す。（常緑亜高木でも良い）
- ・ 竹林は外周を密にして、中は疎にする。竹林内に陽を入れないことがポイント。
- ・ 林床にオトコエシ、ヒメコウゾが出ると陽が入りすぎている。林縁部を塞げばこれらは絶える。
- ・ 林床はヤブミョウガ、シダ類、マンリヨウがある状態を維持する。

作業Step2 目標：良いタケノコを収穫する。

- ・ 竹林の中の細い竹を取り、太い竹を残して育てる。細い竹は育てても太くならない。
- ・ 間伐した竹は、竹柵等に活用する。

注意点

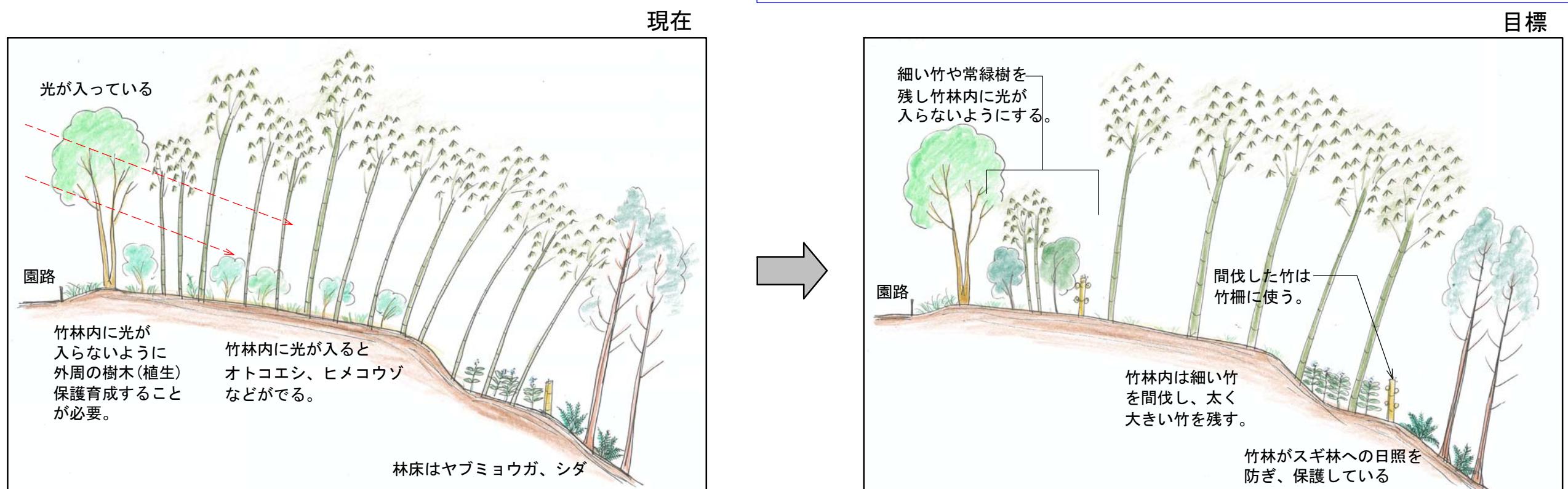
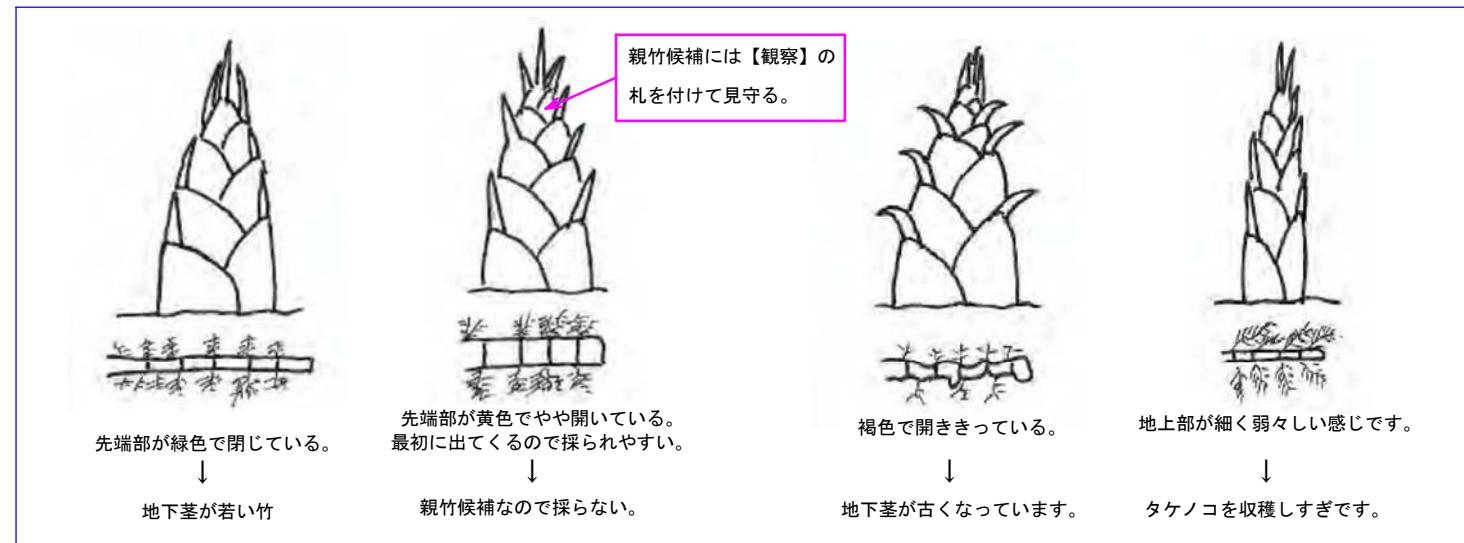
- ・ 竹林が、隣接するスギ林・ヒノキを保護している樹林になっていることを考慮し管理を行う。



竹林外周部(平成28年9月)



竹林内部(平成28年9月)



(4) 山頂の草地

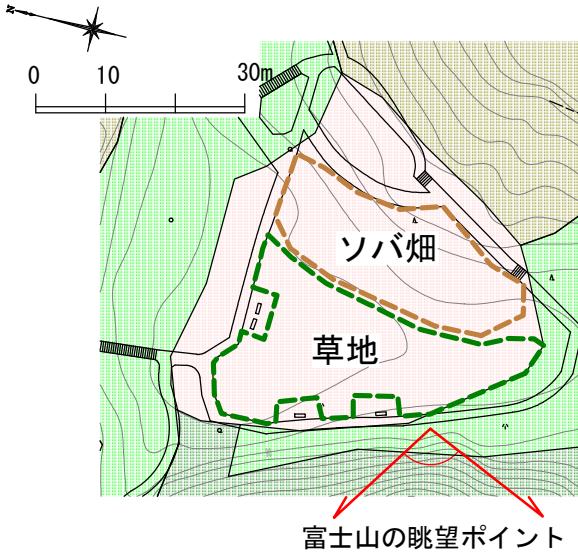
特性：人の立ち入り制限を行った、コオロギやアゲハチョウなどの生息環境である。
富士山の眺望ポイントである。

管理状況：適切な管理により、良好な草地環境が保たれている。

利用：林内を抜けると、視界の開けた頂上部の草地があり、散策路のアクセント
になっている。

ソバの栽培が行われている。

課題：広場利用（人の立ち入り）と保全（立ち入り制限）のバランスをいかにするか。



山頂の草地 (H28年7月)



山頂の草地 (H28年9月)

	種まき	開花	収穫
ソバ	8月	9月	10月中旬～11月上旬
アズキ	4月～5月上旬	7月	8月～9月上旬
コムギ	11月上旬	4月下旬	6月中旬
ナノハナ	9月中旬～10月上旬	3月中旬～4月下旬	5月中旬～6月下旬
ワタ	4月中旬～5月中旬	7月～9月	開花後40～50日
ヒマワリ	5月	7月下旬～8月上旬	10月前後



ソバ畠 (H28年9月)

作業Step1 目標：冬鳥の餌場を整備

- 9月20日頃に刈り高15cmで刈ると、12月には30cmぐらいの高さで枯れる。するとここはホオジロ、アオジなどの冬鳥の餌場となる。冬鳥が増えればモズなどが出でてくる。
- バッタ類が多いと、トビの餌場となる。
- パッチ状に草を残すところは、1年中草刈りを行わない。（火災防止のためベンチから離す）
- 刈草はしばらく置いて、昆虫類が移動してから置き場へ積む。
- 刈草を積んで置くと、コオロギの産卵場所になるほか、冬鳥（アカハラ、シロハラ、トラツグミ）の餌場となる。
- スキを残しカヤ場にしてゆくか、様子を見る。

作業Step2 目標：草原に景観畑をつくる

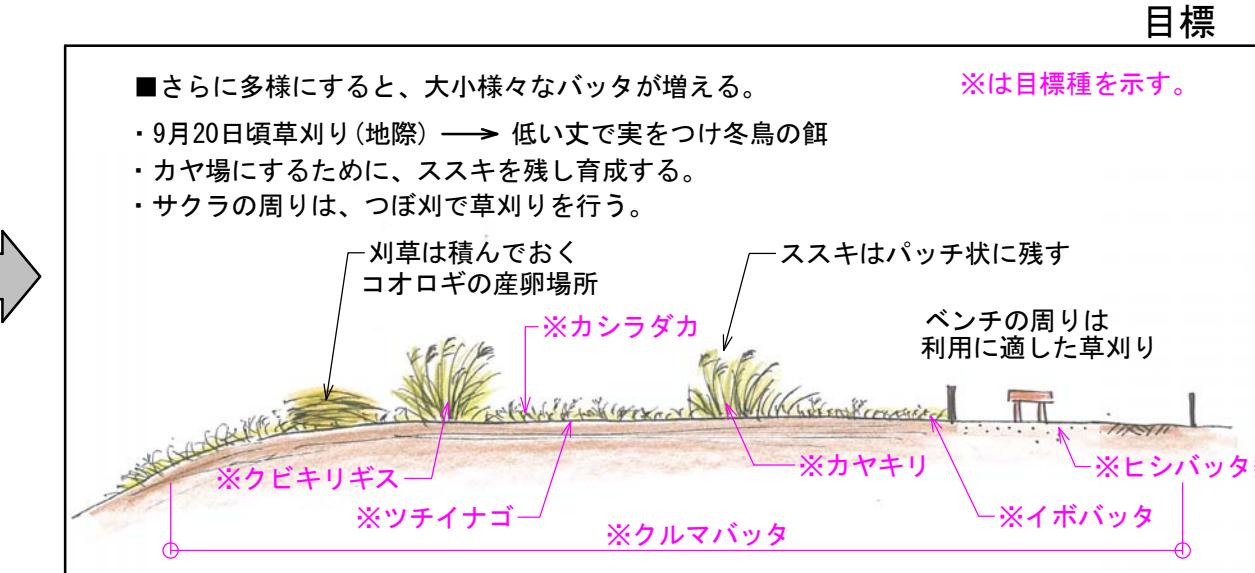
- ナイロンカッターで上をはねる草刈り（地際でするべきではない）を10月上旬まで行う。
- 冬は2月に地際で草刈りを行うとスミレ、タンポポ、ホタルブクロの花畠となる。
- ホタルブクロを増やすには、2月に年1回地際でしっかり刈る。高刈りすると無くなる。
- 現在のソバ畠に加え、アズキ、ムギ、ナノハナ、ワタ、ひまわり等、栽培種をふやし、里山景観にあつた、様々な景観畑をつくる。

注意点　・現地に少数みられたセイバンモロコシは、繁殖力の強い外来種として注意が必要。

現在



【目標種】

クビキリギス
(小菅ヶ谷北公園指定管理者)ツチイナゴ
(環境科学研究所：七里)カヤキリ
(環境科学研究所：七里)クツワムシ
(環境科学研究所：七里)クルマバッタ
(環境科学研究所：七里)イボバッタ
(環境科学研究所：七里)カシラダカ
(小雀公園生物調査)

目標



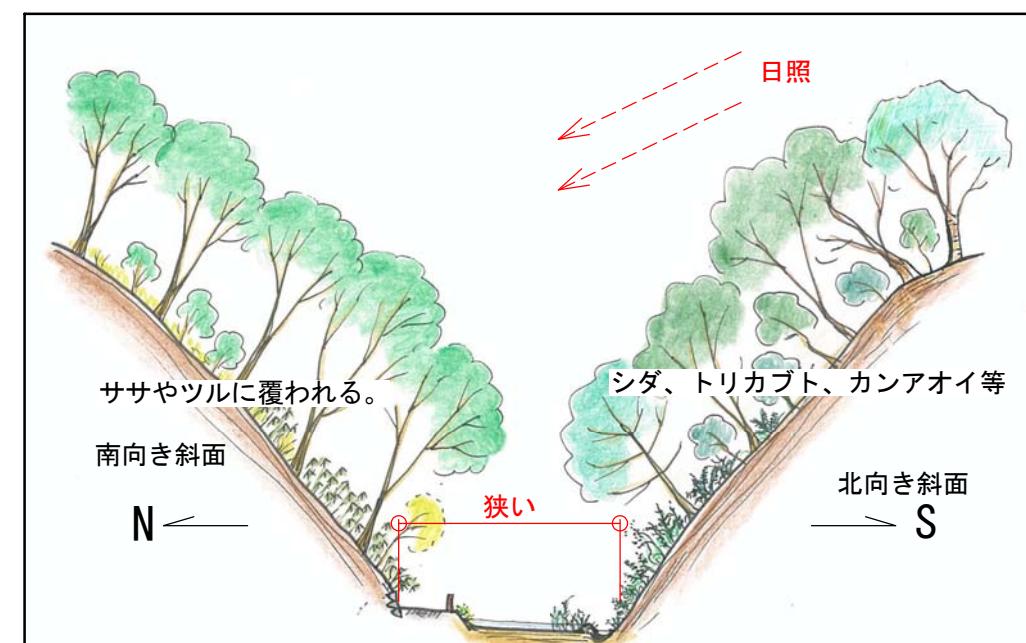
南向き斜面 (H28年7月)



北向き斜面 (H28年7月)

自然観察ゾーンの特徴

- 谷戸の幅が狭く、東西に細長い自然観察ゾーンは、南北斜面に林床植生の違いが顕著に現れる。
 - ・ 強い日照の南向き斜面は、林床がササ、サルトリイバラ、ツル性の植物に覆われた単調な植生である。
 - ・ ほどよい日照の北向き斜面は、林床にシダ、トリカブト等、多様な植物が現れる。



(1) クリノキのある草地

特性：湿地へ至る前の、平坦な草地広場。オギが繁茂している。

開園式で植樹した、ドングリの木がある。

管理状況：繁茂するオギの管理について、水準書に合わせて利用に配慮して刈る。

利用：自然観察ゾーンの入口広場として利用されている。

目標：自然観察ゾーンの導入部として広場を維持し、谷戸景観の見通しを確保する。

課題：広場利用(人の立ち入り)と保全(立ち入り制限)のバランスをいかにするか。

現状 草地広場を維持する。

- ・オギの繁茂する草地を、背の低い草地広場として維持する。
- ・オギの草地を、背の低い草地として維持するためには、全体の30%ぐらいをパッチ状にオギを残し刈る。オギは刈っていれば無くなる。
年に3回ほど刈り、刈り残しを行う事。
- ・シロツメクサ、ムラサキツユクサ等の背の低い草地はモンキチョウの生息場所となる。
- ・南西の斜面側は、背の高い草地として、多様な草地環境を維持する。
- ・背の高い草地は、クサキリ、クビキリギス、クルマバッタの生息地となる。

今後の検討事項：環境展示(インフォメーション)の充実

- ・目標とする環境と実現するための管理方法を解説した、自然観察ゾーン全体の説明板を設置する等、インフォメーションの充実を図る。

【目標種】



モンキチョウ
(小菅ヶ谷北公園指定管理者)



クルマバッタ
(環境科学研究所：七里)



クビキリギス
(小菅ヶ谷北公園指定管理者)



クサキリ
(環境科学研究所：七里)



クリノキのある草地 (H28年7月)



クリノキのある草地 (H28年9月)



クリノキのある草地 (H28年12月)



クリノキのある草地 (H28年12月)

4-3自然観察ゾーン

目標：湿地環境を活かした、多様な生物の生息環境を維持し、里山の自然とふれあい、観察する場を提供する。

4-3-3

(2)ハンノキ林

特性：ヨシ原にハンノキが茂る、美しい湿地景観をなす。湿地性の生物の生息地として貴重である。

管理状況：良好な湿地環境が維持されている。園路、柵等の管理も快適、安全な利用が保たれている。

利用：谷戸部の湿地性自然との、ふれあい、観察の場となっている。

目標：ミドリシジミとヘイケボタルの生息地を保護、育成する。

現状 ミドリシジミとホタルの生息地の保全

- ・ 良好な湿地環境の保全を継続する。

作業Step 目標：ホタルの数を増やす

- ・ ハンノキの下枝を上げ陽を入れる。夏にしっかり陽を入れることが重要。
- ・ 2月に全刈りする。刈るときにハンノキの実生を残すこと。

注意点

- ・ ミドリシジミは地上でさなぎになるため、ハンノキの株元が水につかると、減少するので注意する。
- ・ オモダカが増えると水面を覆ってしまうため、餌となるカワニナ、モノアラガイが減り、ホタルが減少する可能性があるので注意する。



ハンノキ林(H28年7月)



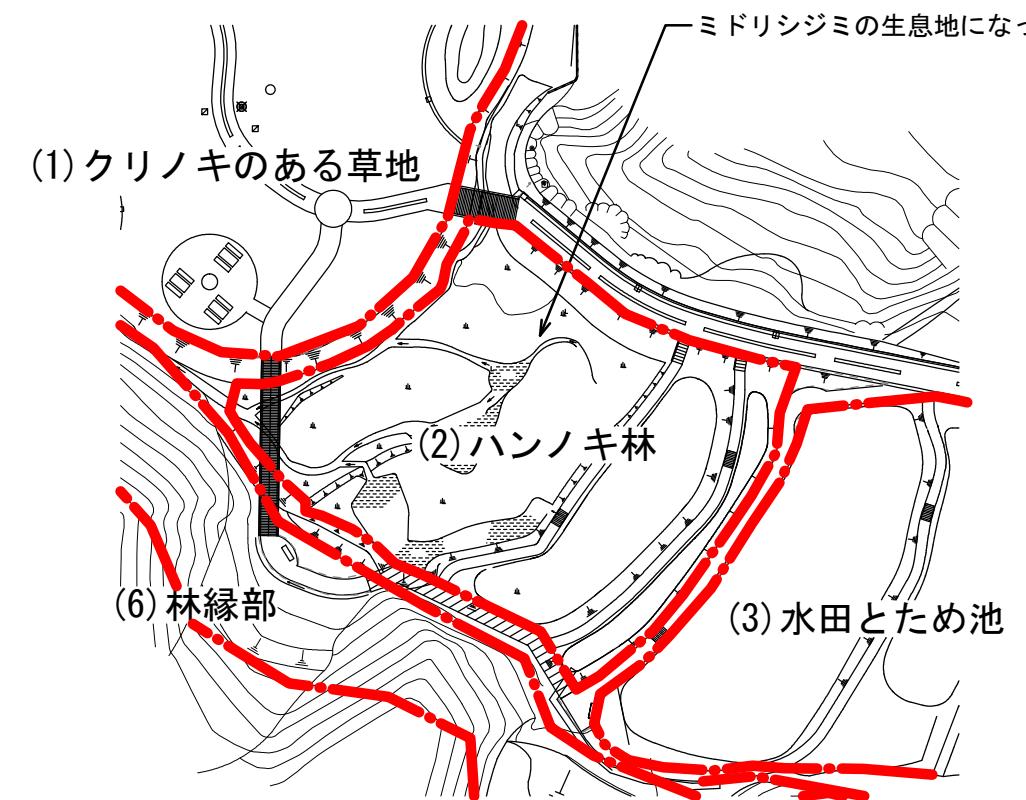
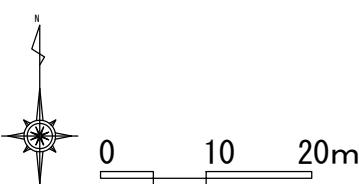
ハンノキ林(H28年12月)



ハンノキ林(H28年9月)



ハンノキ林(H28年12月)



【目標種】



ミドリシジミ
(環境科学研究所：七里)



ヘイケボタル
(環境科学研究所：七里)

4-3自然観察ゾーン

目標：湿地環境を活かした、多様な生物の生息環境を維持し、里山の自然とふれあい、観察する場を提供する。

4-3-4

(3) 水田とため池

特性：水田及び開放水面が整備され、本ゾーンの魅力が向上した。

管理状況：イネは良好に生育し、池にも多様な生物が出現している。

利用：谷戸部の水田により、里山景観の魅力が増し、観察対象も広がり充実した

目標：水田のある里山景観、環境を維持する。

現状 水田のある里山景観、環境を維持する

- ・水田の耕作を継続する。キアゲハが来る環境を維持する。
- ・草刈りを8月中旬に行う。
- ・南東側の畦は、8月草刈りを行い水田に陽を入れる。稲の生長を促進すると同時に水温上昇により、プランクトンが増加しホタルの幼虫の餌が増える。
- ・北側の畦は、セリがあり安定した環境なので、草刈りの必要は無い。
- ・このような作業の意味を、説明することは自然観察の理解につながる。
- ・開放水面の整備により、シャジクモ、トリゲモ、イチョウウキゴケ等の希少藻や苔が発生し、今後も保全を進める。

作業Step 目標：水田や開放水面を広げて、より充実させる。

- ・水田や開放水面の拡張を計画的に進める。(図面参照)
 - ・ニホンアカガエルの生息場所が広がり、ドジョウ等もあらわれる。
 - ・止水域にはシオカラトンボ、流水域にはオニヤンマが入って来る。
- 現在はトンボが過密状態である。下流域に水域を広げることにより、チョウトンボが入って来る。

注意点

※-1 谷戸部では水田にネット等をかけないと、稻が鳥に食べられ収穫量が減る。

※-1 里山管理は、希少種等特定種の保護ではなく、里山環境全体を保全する、面の管理であることに留意すること。



水田 (H28年8月)



水田 (H28年9月)

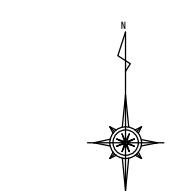


水田 (H28年12月)

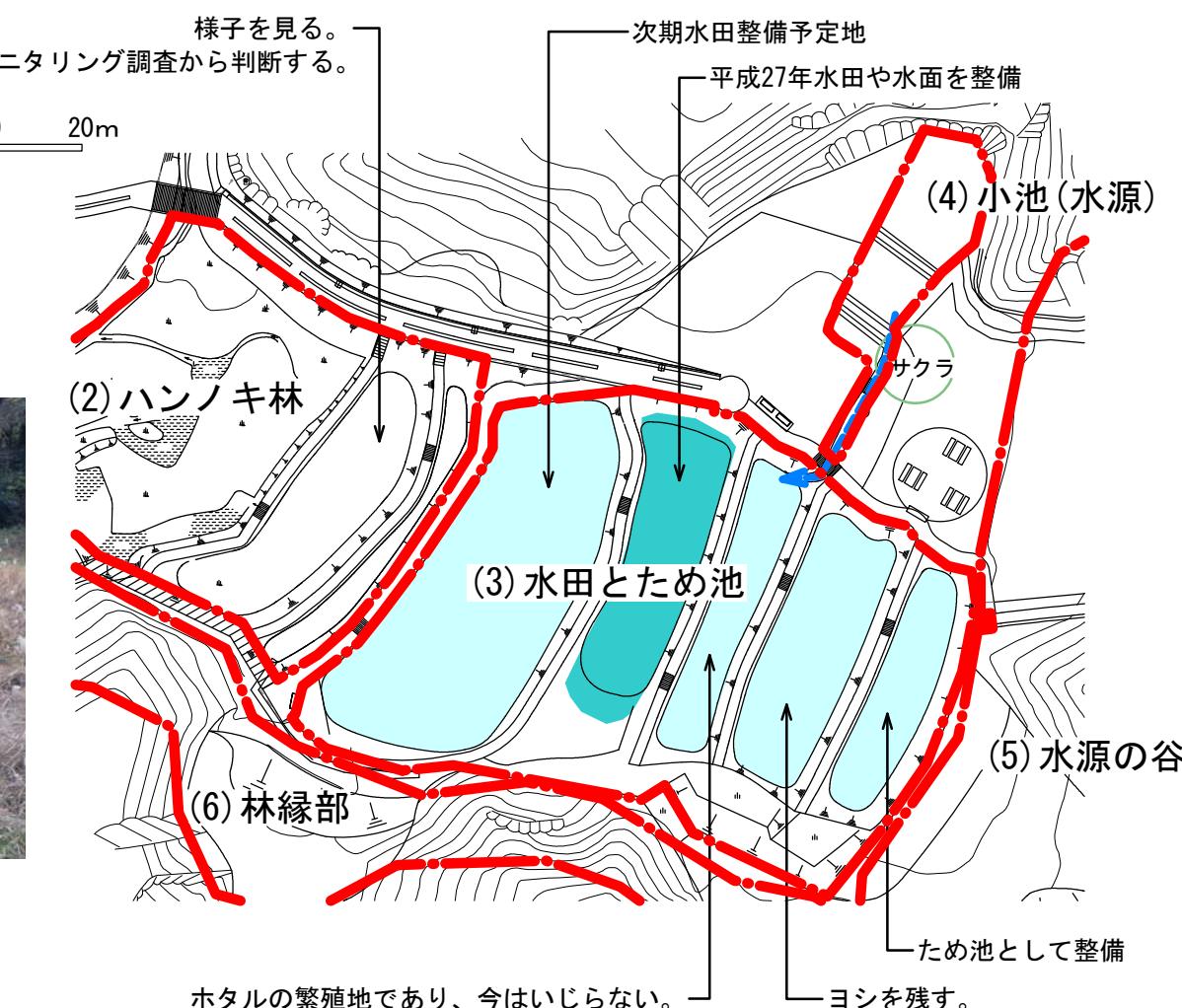
平成27年水田や水面を整備



水田 (H28年12月)



様子を見る。
モニタリング調査から判断する。



水田横の池 (H28年8月)



水田横の池 (H28年12月)

【目標種】



ハイケボタル
(環境科学研究所：七里)



キアゲハ
(小菅ヶ谷公園生物調査)



オニヤンマ
(小菅ヶ谷北公園指定管理者)



チョウトンボ
(環境科学研究所：七里)



ニホンアカガエル
(小菅ヶ谷北公園両生類調査)



オオヨシキリ
(環境科学研究所：七里)



ホトケドジョウ
(環境科学研究所：七里)

4-3自然観察ゾーン

目標：湿地環境を活かした、多様な生物の生息環境を維持し、里山の自然とふれあい、観察する場を提供する。

4-3-5

(4) 小池

特性：自然観察ゾーン湿地の水源である。

管理状況：水源の維持と、池周辺環境の安定が図られている。

利用：人の立ち入りは制限している。

目標：自然観察ゾーンの水源地の保全

現状 水源地の保全を継続する。

- ・ 良好的な湿地環境の保全を継続する。

作業Step 目標：ツチガエルの生息環境を整える

- ・ ツチガエルに良い環境だが、周囲の草が高すぎて、かぶり過ぎている。
8月に草刈りを行う。

注意点

※-1 既存樹のサクラにより、安定した池周辺環境が保たれている。

サクラは切ってはいけない。

※-2 ツチガエルの生息には、過度な草刈りによる乾燥に注意する。

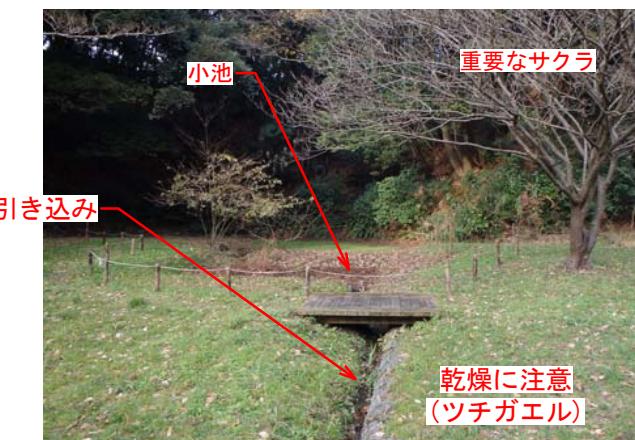
【目標種】



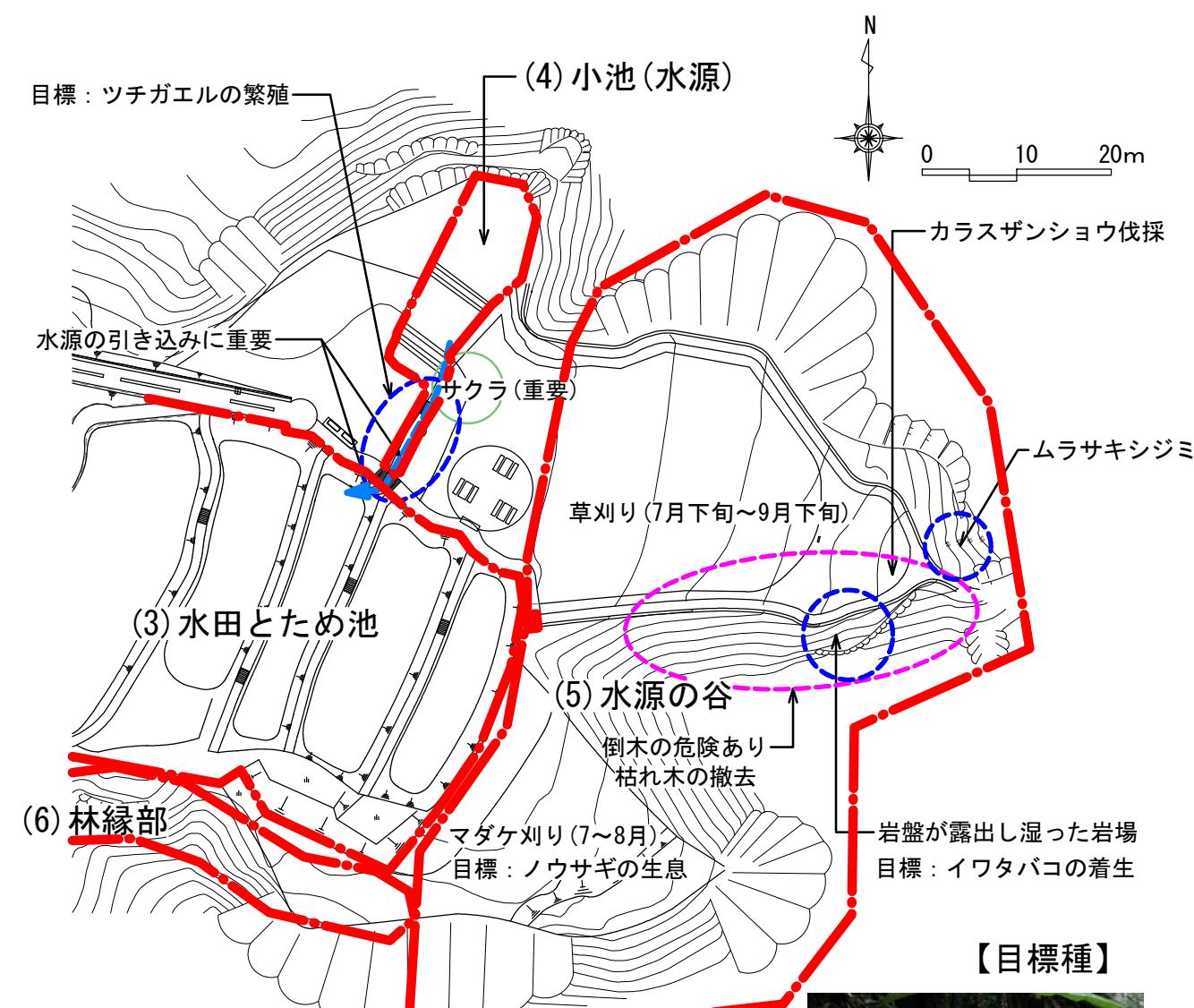
ツチガエル（写真は、他の場所で撮影されたものです。）
(小菅ヶ谷北公園両生類調査)



小池(H28年7月)



小池(H28年12月)



イワタバコ



水源の谷北側(H28年12月)



水源の谷北側(H28年12月)

(5) 水源の谷

特性：自然観察ゾーン湿地の水源である。

管理状況：特に管理は行っていない。

利用：人の立ち入りは制限している。

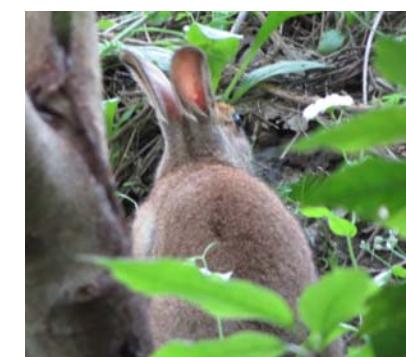
目標：自然観察ゾーンの水源地の保全

作業Step 目標：イワタバコ、ノウサギの生息環境を整える。

- ・ 7月下旬～9月上旬に草刈りを行う。(北側の谷)
- ・ 7～8月マダケを刈り、水源として草地にする。(南側のササ原)

注意点

※-1 北側の谷の斜面林は倒木の危険があるので、枯れ木撤去等に注意する。



ノウサギ
(環境科学研究所：七里)

(7) 林縁部

特性：北向き斜面で被圧があり、安定した環境が保たれている。

管理状況：貴重植物に注意し、管理作業を行っている。

利用：人の立ち入りは制限している。

目標：林床部貴重植物の保全、育成につとめる。

現状 北向き斜面の林縁保全を継続する。

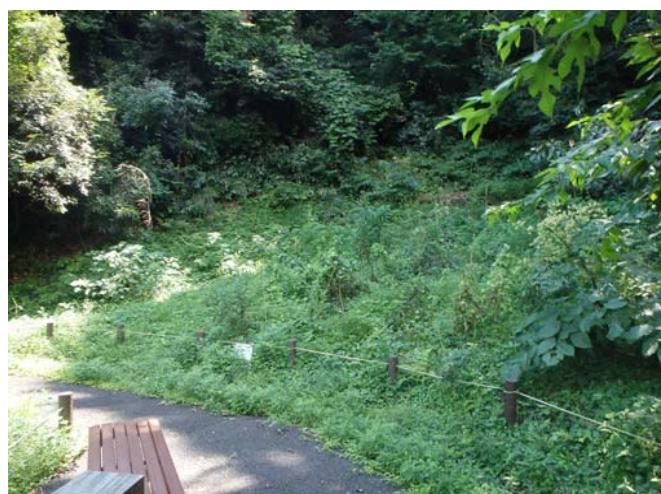
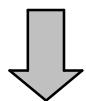
- 夏の草刈りは行わない。樹種を選別して、冬(12月～1月)に地際で草刈り、落ち葉かきをする。
- 希少植物の生育地拡大につとめる。

作業Step 目標：ヤマアカガエルの上陸を目指す。

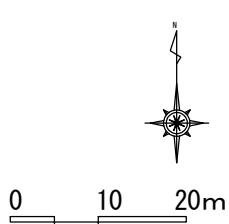
- ササを刈ると草地が広がり、ヤマアカガエルの上陸が期待出来る。
- ササ刈り時期は8月～9月とする。



林縁部の草刈り後



植生の復元



【目標種】



ツクバトリカブト



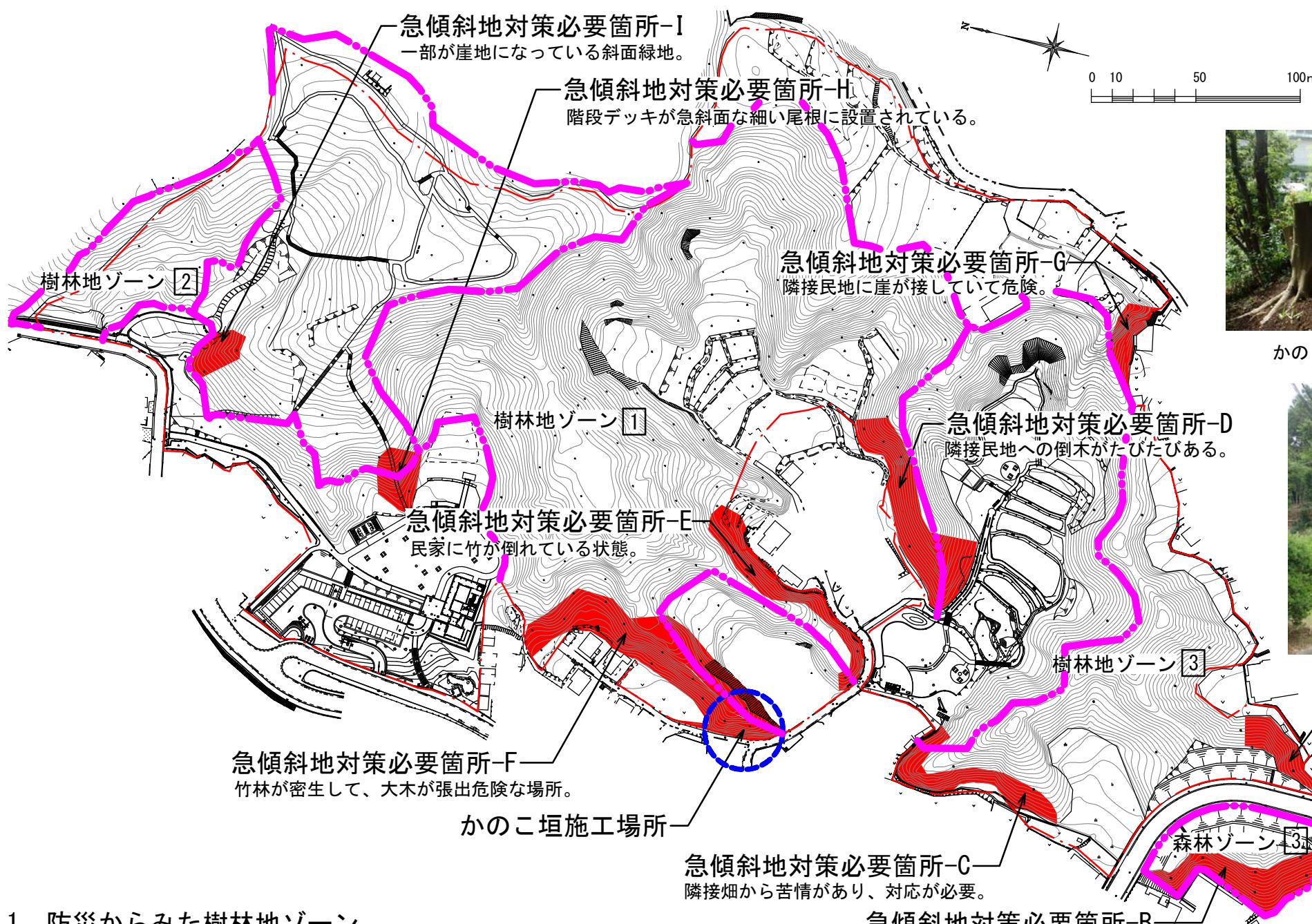
サラシナショウマ
(小菅ヶ谷北公園指定管理者)



イヌショウマ
(小菅ヶ谷北公園指定管理者)



ヤマアカガエル
(小菅ヶ谷北公園両生類調査)



1. 防災からみた樹林地ゾーン

- 急峻な地形で、長年放置された樹林地ゾーンは、高木層の過高木化、竹林の侵入、それらに起因する林床植生の衰退により、斜面に対する負荷が高まり、斜面崩落の危険性が高まっている箇所が多い。
- 地質的には、硬い土丹層に薄く表土が覆った状態と思われ、上記のような過高木状態の樹林を安全に維持することは困難と推察される。
- しかしながら、箇所、規模ともにその数は多く、優先順位を考慮しつつ、順次安全対策を講じる必要がある。

2. 急斜面地対策必要箇所

- 前述のとおり、樹林地ゾーンには斜面崩落が懸念される箇所が多く存在するが、人家や道路に接し斜面崩落の影響が甚大と思われる箇所を、急斜面地対策必要箇所-A～Iとして示す。
- これらは、防災対策の緊急性が高く、被害も周辺地域に及ぶ可能性が高いことを明記する。
- 急傾斜地対策必要箇所-B、Eは、大規模班施工対応予定箇所として、防災工事が予定されている。

3. 急斜面地対策

- 地質的には硬い土丹層で、円弧滑りによる大規模な崖崩れの危険性は少ないと推察される。(専門的な地質調査が必要)
- 表土崩落を防止するための、樹林管理で対応可能な箇所も多いと推察される。
- 南側の常緑樹林はポイント切りで対応可能な斜面地であり、竹林の密生地は竹を全て切る必要がある。危険性を考えると、竹林の防災対策を優先すべきである。

※管理手法は参考資料(資料-8)を参照。

■急傾斜地対策(かのこ垣)

現状(放置された斜面林)

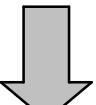


かのこ垣(H28年8月)

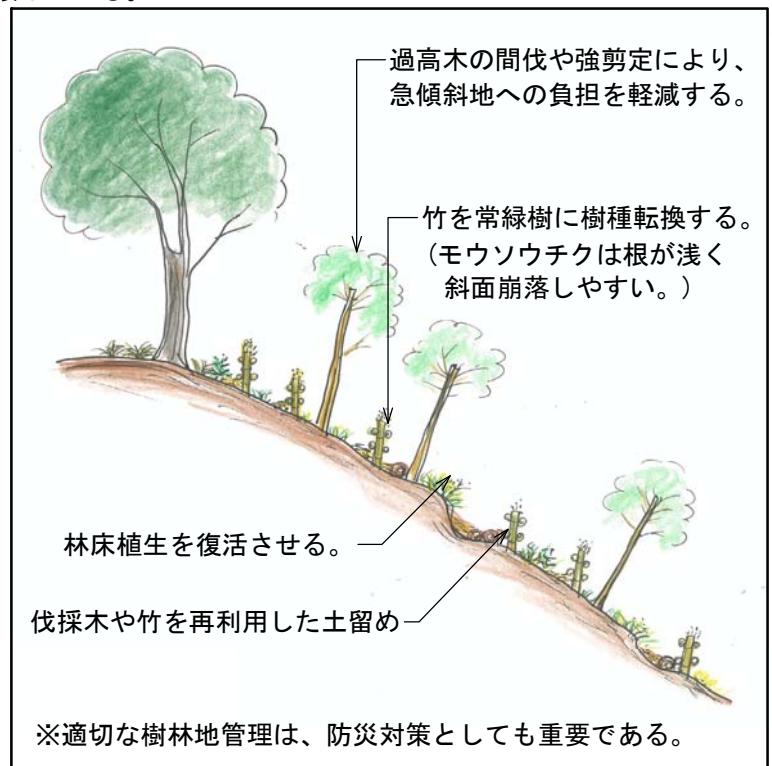


かのこ垣(H28年7月)

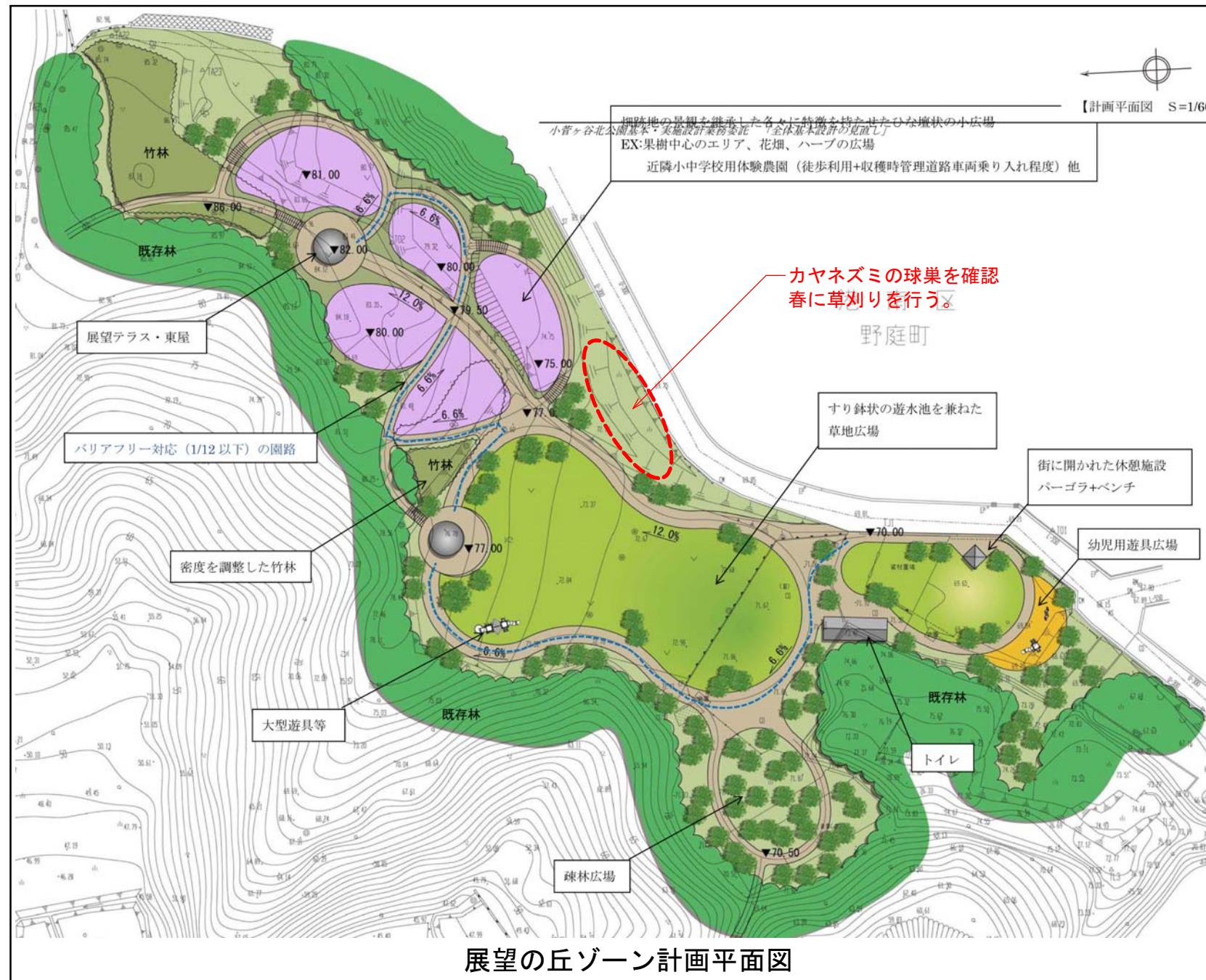
※急傾斜地は土丹層上の浅い表土で、樹木の過高木化や林床植生の衰退により、斜面地崩落の危険が高まっている。



対策後



※適切な樹林地管理は、防災対策としても重要である。



1. 計画案について

(1) 基本設計からの見直しについて

- 駐車場を整備しないことから、体験農園の機能を見直す。
- 広場を中心とした、眺望が確保された活動系のゾーンとする。
- 保全区域外周部はバッファーとしての植栽を設け、畠跡地の景観を活かした整備とする。

(2) 保全管理計画からの要望

- 農地付き公園の選択肢もあると考えるが、検討をお願いしたい。
- 近隣の街区公園が港南区側に接しているので、遊具広場的機能はこの公園に必須かと言う視点でも検討してほしい。
- 瀬上、舞岡、上郷はオオタカのハンティングエリアであり、小菅ヶ谷北公園もこれに含まれると考えられる。畠に住む動物がいるから猛禽類が生息できると言う結果もあり、下の広場(畠の所)は畠で残すことが望ましい。

- 草地広場よりも、そこに多様性をもった畠を残すことは、小動物が入り有効である。キジやフクロウにとっても、畠を残すことは必要で、ここは農地を残すことが望ましい。
- 今までの公園管理で蓄積した、経験や技術を活用する体験農園的な公園整備を検討してほしい。

2. カヤネズミの保護について

- カヤネズミはイネ科の草原や休耕田や水田などに生息する国内最小のネズミで県内では急速に姿を消している。
- 平成27年の春～夏期の調査において、球巣が確認され現在も生息している可能性がある。
- 生息場所の土地所有が確定できないが、公園用地であればカナムグラを撤去し、オギの群落をつければ繁殖地を保護できる。
- そうでなければ、公園用地にオギを移植して代替地をつくる必要がある。オギは地下水の高い所を好むので、現況地盤を掘り下げ代替地とする。
- 以上は、公園整備を待たず、早急に行う必要がある。

春～夏期の調査において、耕作地の土手でカヤネズミの球巣が確認されている。巣の確認地点は車道に面した場所で、オギ、ススキ群落が帶状に存在し、草丈が膝上程度のイネ科植物が繁茂するところである。

今回の冬期調査では確認していないが、本種は狭い範囲でもイネ科植物が群生すれば生息可能なので、現在も生息している可能性がある。

カヤネズミは、ススキなどイネ科草類の草原、休耕田や水田などに生息する国内最小のネズミである。県内では生息環境の分断化と草原環境の減少により急速に姿を消しているものと思われる。多くが孤立分布となっているため、一度姿を消すと他の地域から新しい個体が供給されず、回復は望めなくなってしまうだろう。

当地では土手の草地が生息地になっているようなので、繁殖する春から夏は刈り払いを行わないようにした方がよい。

■カヤネズミの球巣が確認された生息環境



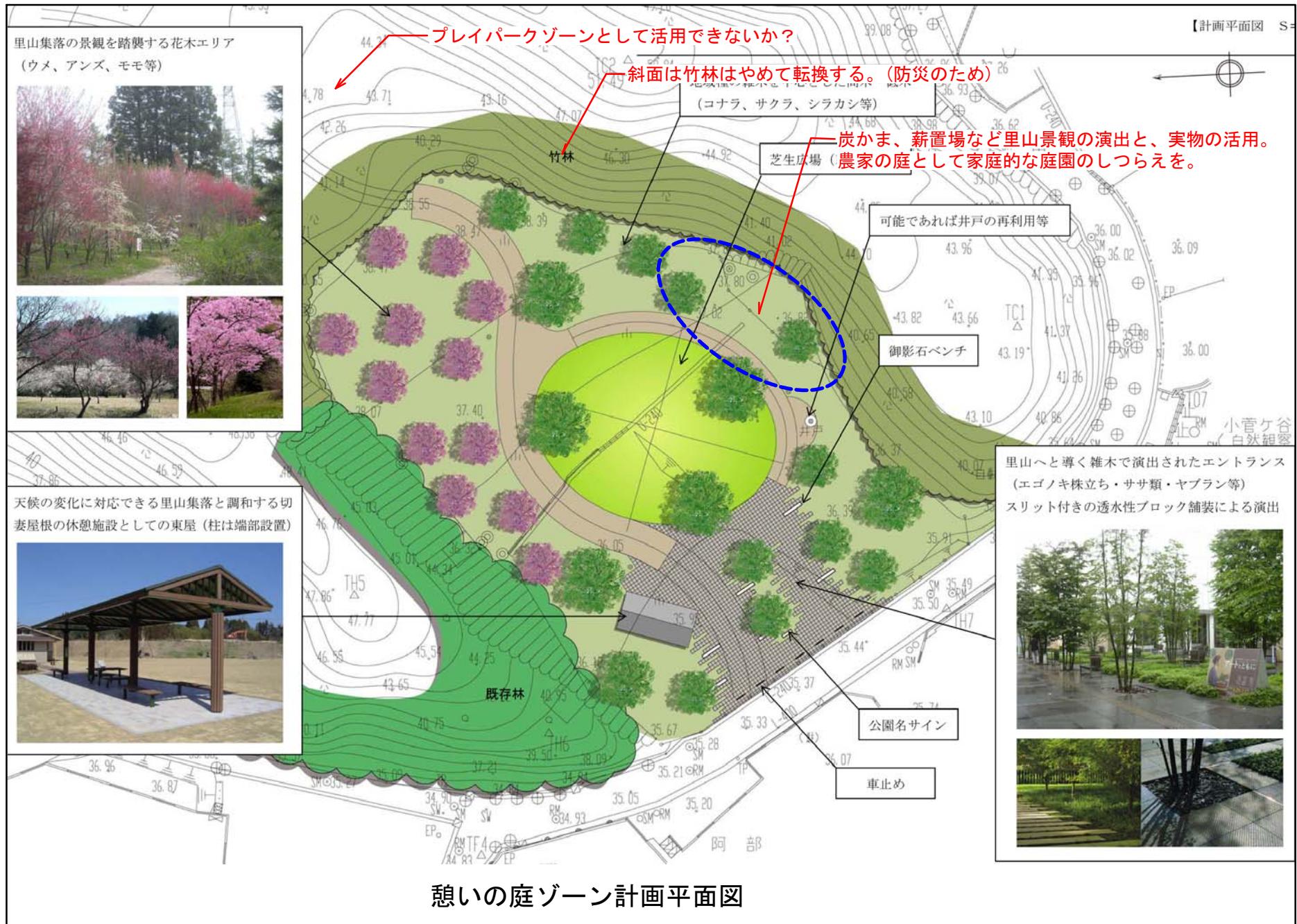
■球巣の発見場所



■球巣



カヤネズミ（写真は、他の場所で撮影されたものです。）
(小菅ヶ谷公園冬季鳥類調査業務委託より)



A wide-angle photograph of a traditional Japanese building, possibly a sake brewery (Saketen). The building has a thick, dark thatched roof and a large, open wooden structure on the left side. A smaller entrance gate or porch is visible in the center. The building is surrounded by trees and a clear blue sky.

A photograph showing a young child in a red jacket and blue pants climbing a large tree with pink blossoms. The child is gripping a thick branch, and another person's legs are visible nearby. In the background, there's a residential area with houses and a street sign.

A traditional Japanese kiln, known as a furnace, is shown in an outdoor setting. The structure is made of wood and features a large, arched opening at the base. The surrounding area is covered in fallen leaves and surrounded by trees.

A photograph of a large, two-story wooden building with a red-tiled roof and dark trim. The building has multiple gables and a balcony on the upper level. It is surrounded by bare trees and several large stacks of cut wood. Two people are walking on a paved path in front of the building.

A photograph of a dirt path or trail winding through a natural landscape. The path is bordered on the left by a rustic wooden fence made of vertical posts and horizontal rails. Behind the fence is a dense growth of tall, yellowish-green grasses. To the right, the path continues into the distance, flanked by bare trees and shrubs, suggesting a late autumn or winter setting. The ground is a mix of dirt and fallen leaves.

1. 実施設計案

- ・散策等の移動の途中に利用できる休憩系をゾーンの方針とする。
 - ・里山を感じる景観を目指す整備を行う。

2. 保全管理計画からの要望

- ・散策の森ゾーンから憩いの庭ゾーンに至る、園路整備が計画されているが、樹木整理や安全対策等の一体的な整備が必要である。
 - ・散策の森ゾーンから憩いの庭ゾーンに至る園路整備計画地は、現在キンラン、ギンラン、ササバギンラン、シュンラン、エビネ等の、希少植物の生息場所であり、保全する必要がある。整備工事に当たり配慮が必要な場所である。
 - ・一定の制約のなかで、自由に遊べる森林を設けられないか。ボーイスカウトからの要望があり、彼らに制約ばかりしているような状況である。
(プレイパークゾーンを憩いの庭ゾーンの上の竹林に設定できないか?)
 - ・里山の循環の中心となる「農家の庭」として、里山の恵みを得られる場所として整備してほしい。
(薪置場、炭焼きがま、竹垣、井戸の活用など)

5. モニタリング計画

5-1ゾーン別モニタリング計画表

5-1-1

		P (計画)		D (実行)		C (調査)				A (解析・評価・対策)	
ゾーン	区分	目標		作業		モニタリング種 (目標種)	モニタリング調査			解析評価作成期限	注意点
				時期	内容		時期	調査対象	方法		
利用拠点ゾーン 目標：里山の生物と手軽にふれあえる、観察コースの魅力アップ											
4-1(1)園路沿い湿地	Step1	ヤマユリの鑑賞スポット		2月	地際で草刈り	ヤマユリ	7月	開花数 (・土手で300株 を目標)	目視カウント	9月	・エリアはサクラまでとし、若いサクラは残す。 ・被圧のクリノキは重要、下枝を大切に残すこと。 ・マダケの侵入を防ぐこと ・キタテハ、モンキアゲハの出現がほどよい明るさの目安
				5月	ヤマユリにマーキング						
				6月	ヤマユリを残し刈高10~15cmで草刈り						
	①	カヤ場と湿性草地を見せる		2月	カヤの親株を残し草刈り	カヤキリ	7月~9月	成虫	スウェーピング	11月	
				11月中旬	水路(湿地)の整備	オオカマキリ	7月~11月	卵塊・幼虫・成虫	スウェーピング、目視	1月	
				2月	ネザサを取ると、クサボケ、フジバカマができる。	ヒメギス	6月~10月	幼虫・成虫	スウェーピング、目視	12月	
						ヤマアカガエル	2月~8月	卵塊・幼体・成体	目視カウント	10月	
						カシラダカ	11月~4月	成鳥	目視カウント	6月	
	②	湿地のグレードアップ 選択肢-1：ヨシを残し、カラ類等の鳥の餌場とする。 選択肢-2：ホトケドジョウを確認したら、ヨシは刈る。 選択肢-3：ヨシを取って、セリ類に変わればコサギ、カシラダカが入って来る。		2月	開放水面を拡張する。	ルリタテハ	7月~10月	卵・幼虫・成虫	目視カウント	12月	・サルトリイバラを残す。
				2月	目標とする環境を選択し、草刈り方法を調整する。	ゲンジボタル	6月~7月	成虫(公園全体で100頭を目標)	目視カウント	9月	
						ヘイケボタル	6月~8月	成虫(公園全体で100頭を目標)	目視カウント	10月	
						ホトケドジョウ	5月~11月	幼魚・成魚	タモ網採集	1月	
						ヤマアカガエル	2月~8月	卵塊・幼体・成体	目視カウント	10月	
	③	湿地の斜面にヤマユリを加える 湿地のグレードアップ		2月	コナラの下枝を取る。その他は①Step1と同じ	ヤマユリ	7月	開花数(・公園全体で300株を目標)	目視カウント	9月	・①Step1と同等 ・この場所で切る木は無い
				2月	水域を増やす。(ミソハギ、ワレモコウの湿原景観をつくる)	ルリタテハ	7月~10月	卵・幼虫・成虫	目視カウント	12月	
				2月	落葉樹を補植する。(ホタル出現)	ゲンジボタル	6月~7月	成虫(公園全体で100頭を目標)	目視カウント	9月	
						ヘイケボタル	6月~8月	成虫(公園全体で100頭を目標)	目視カウント	10月	
						ホトケドジョウ	5月~11月	幼魚・成魚	タモ網採集	1月	
						ヤマアカガエル	2月~8月	卵塊・幼体・成体	目視カウント	10月	

P (計画)		D (実行)		C (調査)				A (解析・評価・対策)		
ゾーン	区分	目標	作業		モニタリング種 (目標種)	モニタリング調査			解析評価作成期限	注意点
			時期	内容		時期	調査対象	方法		
4-1(1)園路沿い湿地	④	Step1 ゲンジボタルを増やす	11~3月	山側常緑樹はサワラを残し全て伐採	ゲンジボタル	6月~7月	成虫(100頭を目標)	目視カウント	9月	・道路のライトを遮蔽する。 ・山側の常緑樹を取り林内を明るくする。 ・常緑樹は4~5年に1回切り戻し、生息環境を維持する。
			3月	ミズキを剪定	ミルンヤンマ	8月~9月	成虫	目視カウント	11月	
			11~3月	道路側にハンノキ2本程度補植	ヒメギス	6月~10月	幼虫・成虫	スウェーピング、目視	12月	
					クツワムシ	8月~10月	成虫	鳴声、目視	12月	
					ヤマアカガエル	2月~8月	卵塊・幼体・成体	目視カウント	10月	
	⑤	Step2 開放水面を拡張し、ホタルの生息地のグレードアップ	2月	現状の水面を残し、他に水面を広げる(棚田のような畦)。	ゲンジボタル	6月~7月	成虫(100頭を目標)	目視カウント	9月	・道路のライトを遮蔽する。 ・山側の常緑樹を取り林内を明るくする。 ・常緑樹は4~5年に1回切り戻し、生息環境を維持する。
				一部常緑樹を残し、大型トンボの産卵場所とする。	ミルンヤンマ	8月~9月	成虫	目視カウント	11月	
					ヒメギス	5月~9月	幼虫・成虫	スウェーピング、目視	11月	
					クツワムシ	8月~10月	成虫	鳴声、目視	12月	
					ヤマアカガエル	2月~8月	卵塊・幼体・成体	目視カウント	10月	
5-1(2)河川敷	⑥	Step1 明るい草地の維持		明るいアゲハチョウの入る場所を残す。	キアゲハ	6月~10月	卵・幼虫・成虫	目視カウント	12月	
					ヒメギス	6月~10月	幼虫・成虫	スウェーピング、目視	12月	
					オニヤンマ	7月~9月	成虫	目視カウント	11月	
					カシラダカ	11月~4月	成鳥	ルートセンサス	6月	
	⑦	Step2 湧水を有効活用して湿性草地に	2月	蛇行した水路をつくり湧水を残す。	キアゲハ	6月~10月	卵・幼虫・成虫	目視カウント	12月	
					ヒメギス	6月~10月	幼虫・成虫	スウェーピング、目視	12月	
					オニヤンマ	7月~9月	成虫	目視カウント	11月	
					カシラダカ	11月~4月	成鳥	ルートセンサス	6月	

5. モニタリング計画

5-1ゾーン別モニタリング計画表

5-1-3

		P (計画)		D (実行)		C (調査)			A (解析・評価・対策)		
ゾーン	区分	目標		作業		モニタリング種 (目標種)	モニタリング調査			解析評価作成期限	注意点
				時期	内容		時期	調査対象	方法		
4-1(2) 芝生広場周辺	現状	開放水面を確保してトンボを増やす。		夏	ヨシ刈り(開放水面を出す)	ホトケドジョウ	5月～11月	幼魚・成魚	タモ網採集	1月	・開放水面をアサザやヒツジクサ類が覆わないように注意する。
						キアゲハ	6月～10月	卵・幼虫・成虫	目視カウント	12月	
						ギンヤンマ	8月～10月	成虫	目視カウント	12月	
						シオヤトンボ	4月～5月	成虫	目視カウント	7月	
						ニホンアマガエル	6月～10月	成体	目視カウント、鳴声、	12月	
	①	ホタルとカエルの水辺		2月	ヨシを抜根して10m ² 程度の開放水面を通年維持する。	ヘイケボタル	6月～8月	成虫(100頭を目標)	目視カウント	10月	・開放水面をアサザやヒツジクサ類が覆わないように注意する。 ・モニタリング調査を踏まえ、開放水面とヨシ原のバランス等を調整する。
				2月	畦をつくる。	ヤマアカガエル	2月～8月	卵塊・幼体・成体	目視カウント	10月	
						ニホンアマガエル	6月～10月	成体	目視カウント、鳴声、	12月	
						シュレーゲルアオガエル	6月～9月	成体(鳴き声)	目視カウント、鳴声、	11月	
						バン	5月～7月	成鳥	ルートセンサス	9月	
	②	開放水面を確保してトンボやカエルを増やす。		夏	ガマを絶やす場合の抜根。	ヤマアカガエル	2月～8月	卵塊・幼体・成体	目視カウント	10月	
				冬	ガマ残す場合の抜根。	ホトケドジョウ	5月～11月	幼魚・成魚	タモ網採集	1月	
						クロスジギンヤンマ	4月～7月	成虫	目視カウント	9月	
4-2散策の森ゾーン				目標：里山の森を再生し、雑木林、スギ・ヒノキ林、竹林、草地等、多様な里山環境で散策や自然観察のできるゾーン。							
4-2(1) 雜木林の尾根	Step1	蝶道をつくる。		11～3月	園路両側各5m幅の常緑樹を撤去する。(1回/3年程度)	クロアゲハ	7月～10月	幼虫・成虫	目視カウント	12月	
				11～3月	蝶の好む植物を、樹高3m程度で残す。	カラスアゲハ	7月～10月	幼虫・成虫	目視カウント	12月	
						モンキアゲハ	7月～10月	幼虫・成虫	目視カウント	12月	
						ジャコウアゲハ	7月～10月	幼虫・成虫	目視カウント	12月	

5. モニタリング計画

5-1ゾーン別モニタリング計画表

5-1-4

P (計画)		D (実行)		C (調査)				A (解析・評価・対策)			
ゾーン	区分	目標		作業		モニタリング種 (目標種)	モニタリング調査			解析評価作 成期限	注意点
		時期	内容	時期	調査対象		方法				
4-2(2)スギヒノキ植林地	現状	現状を維持する。		現状管理作業を継続する。		イノデ リョウメンシダ	随時	生育状態を確認	目視カウント	調査後2ヶ月以内	<ul style="list-style-type: none"> ・林縁の常緑樹は絶対に切らない。H5mくらいを維持する。 ・既存の若竹は現時点では重要。(切ると光が入りすぎる。) ・常緑樹が育てば、竹は取る。 ・園路添いの針葉樹の下枝は下げない。(光を遮ること)
4-2(3)竹林	追加事項	入口部北側の南斜面を、観察ポイントにする	冬	カナムグラを刈る	キタテハ	7月～10月	卵・幼虫・成虫	目視カウント	12月	<ul style="list-style-type: none"> ・スミレ、ホタルブクロが出る。 	
	Step2	良いタケノコを収穫する。	3月～4月	親竹候補を選別する。		同上			目視カウント		
4-2(4)山頂の草地	Step1	冬鳥の餌場をつくる	9月20日頃	草刈り（刈り高15cm）	クビキリギス	5月～11月	成虫	スウェーピング、目視	1月	<ul style="list-style-type: none"> ・草を残す場所はベンチから離す。 ・刈草はしばらく放置し、昆虫が移動してから処分する。 ・セイバンモロコシは繁殖力の強い外来種として注意する。 	
				パッチ状に草を残す場所を設ける。 (1年中刈らない)	ツチイナゴ	5月～12月	成虫	スウェーピング、目視	2月		
	Step2	草原の景観畑をつくる	10月上旬	草の上をはねる草刈り。	クビキリギス	5月～11月	成虫	スウェーピング、目視	1月	<ul style="list-style-type: none"> ・草を残す場所はベンチから離す。 ・刈草はしばらく放置し、昆虫が移動してから処分する。 ・現在のソバ畑に加え栽培種を増やし、様々な景観畑をつくる。 	
			2月	地際で草刈り。 ホタルブクロを増やす場合1回/年草刈り。	ツチイナゴ	5月～12月	成虫	スウェーピング、目視	2月		
					カヤキリ	7月～9月	成虫	スウェーピング、目視	11月		
					クツワムシ	8月～10月	成虫	鳴声、目視	12月		
					イボバッタ	7月～11月	成虫	スウェーピング、目視	1月		
					クルマバッタ	7月～11月	成虫	スウェーピング、目視	1月		
					カシラダカ	11月～4月	成鳥	ルートセンサス	6月		
					クツワムシ	8月～10月	成虫	鳴声、目視	12月		
					イボバッタ	7月～11月	成虫	スウェーピング、目視	1月		
					クルマバッタ	7月～11月	成虫	スウェーピング、目視	1月		
					カシラダカ	11月～4月	成鳥	スウェーピング、目視	6月		

5. モニタリング計画

5-1ゾーン別モニタリング計画表

5-1-5

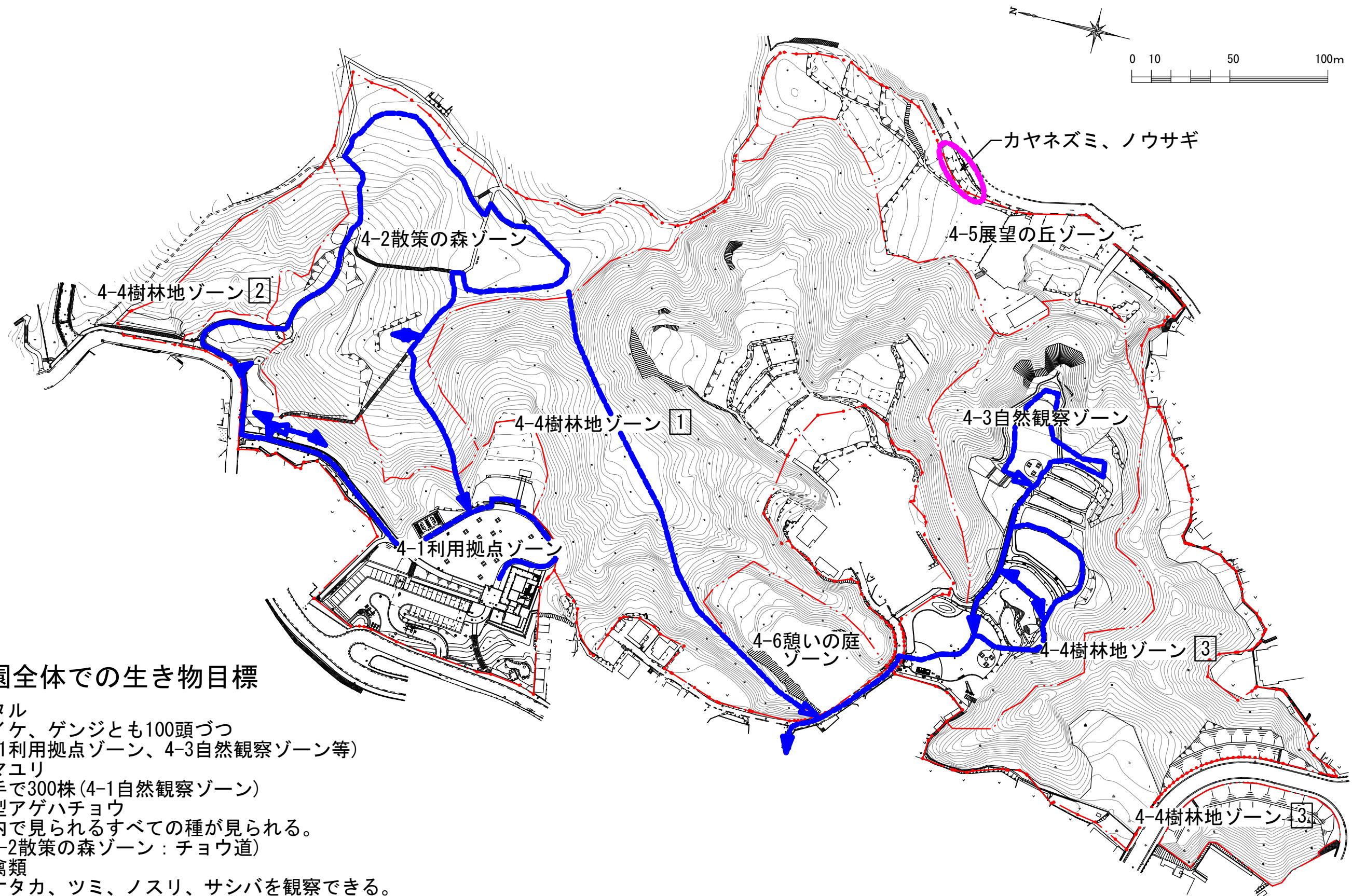
		P (計画)		D (実行)		C (調査)			A (解析・評価・対策)	
ゾーン	区分	目標		作業		モニタリング種 (目標種)	モニタリング調査		解析評価作成期限	注意点
				時期	内容		時期	調査対象		
自然観察ゾーン： 目標：湿地環境を活かした、多様な生物の生息環境を維持し、里山の自然とふれあい、観察する場を提供する。										
4-3(1)クリノキのある草地	現状	草地広場を維持する。	3回/年	オギを刈る。30%程度パッチ状に刈り残す。	モンキチョウ	5月～9月	卵・成虫	目視カウント	11月	・全体としては背の低い草地とする。 ・南西の草地は背の高い草地とし、多様な草地環境を維持する。
				クビキリギス	5月～11月	成虫	スウェーピング、目視	1月		
				クルマバッタ	7月～11月	成虫	スウェーピング、目視	1月		
4-3(2)ハンノキ林	現状	ミドリシジミとホタルの生息地の保全。		現状管理作業を継続する。	ヘイケボタル	6月～8月	成虫(100頭を目標)	目視カウント	10月	・ミドリシジミは地上でさなぎになるため、ハンノキの株元に水域が広がると減少する。注意が必要
				ミドリシジミ	6月(朝・夕)	成虫	目視カウント	8月	・オモダカが増えると、ホタルの餌が減る。	
	Step	ホタルの数を増やす。	2月	ハンノキの下枝を上げる。(夏に陽を入れる)	ヘイケボタル	6月～8月	成虫(100頭を目標)	目視カウント	10月	・オモダカが増えると、ホタルの餌が減る。
			2月	全刈り	ミドリシジミ	6月(朝・夕)	成虫	目視カウント	8月	・草刈り時にハンノキの実生を残す。
4-3(3)水田とため池	現状	水田のある里山景観、環境を維持する。	8月中旬	草刈り(セリのある北側の畦は行わない)	ヘイケボタル	6月～8月	成虫(100頭を目標)	目視カウント	10月	・キアゲハの来る環境を維持する。 ・ネット等で鳥から稻を守る
				キアゲハ	6月～10月	卵・幼虫・成虫	目視カウント	12月		
				オニヤンマ	7月～9月	成虫	目視カウント	11月		
				ニホンアカガエル	6月～10月	成体	目視カウント、鳴声、	12月		
				ホトケドジョウ	5月～11月	幼魚・成魚	タモ網採集	1月		
				チョウトンボ	7月～8月	成虫	目視カウント	10月		
				オオヨシキリ	6月～8月	成鳥	ルートセンサス	10月		
	Step	水田や開放水面を広げて、より充実させる。		水田や開放水面の拡張を計画的に進める。	ヘイケボタル	6月～8月	成虫(100頭を目標)	目視カウント	10月	・キアゲハの来る環境を維持する。 ・ネット等で鳥から稻を守る
				キアゲハ	6月～10月	卵・幼虫・成虫	目視カウント	12月		
				オニヤンマ	7月～9月	成虫	目視カウント	11月		
				ニホンアカガエル	6月～10月	成体	目視カウント、鳴声、	12月		
				ホトケドジョウ	5月～11月	幼魚・成魚	タモ網採集	1月		
				チョウトンボ	7月～8月	成虫	目視カウント	10月		
				オオヨシキリ	6月～8月	成鳥	ルートセンサス	10月		解析評価の作成期限

5. モニタリング計画

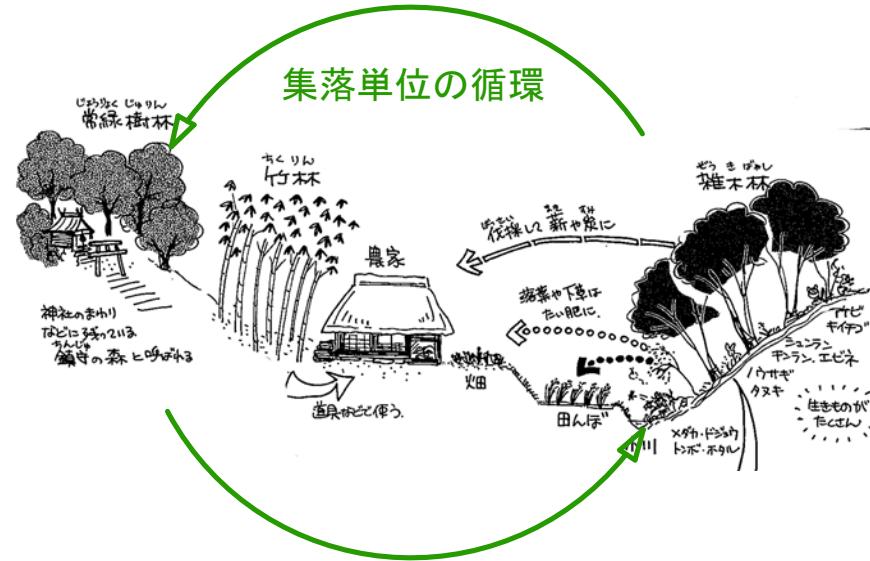
5-1ゾーン別モニタリング計画表

5-1-6

		P (計画)		D (実行)		C (調査)			A (解析・評価・対策)		
ゾーン	区分	目標		作業		モニタリング種 (目標種)	モニタリング調査			解析評価作成期限	注意点
				時期	内容		時期	調査対象	方法		
4-3(4) 小池	現状	水源の保全を継続する。		現状管理作業を継続する。		ツチガエル	7月～8月	成体(鳴き声)	目視カウント、鳴声、	10月	・既存サクラは切らない。
	Step		ツチガエルの生息環境をととのえる。	8月	草刈り。	ツチガエル	7月～8月	成体(鳴き声)	目視カウント、鳴声、	10月	・ツチガエルの生息には乾燥に注意する。
4-3(5) 水源の谷	Step	イワタバコ、ノウサギの生息環境を整える。	7月下旬～9月上旬	現状管理作業を継続する。		イワタバコ	6月	開花	目視カウント	8月	
			冬	ササ刈り。		ノウサギ	12月～4月	成獣・食痕・糞・足跡	食痕、目視カウント	6月	
4-3(6) 林縁	現状	北向き斜面の林縁保全を継続する。	冬	草刈り。		トリカブト	6月～9月	開花	目視カウント	11月	・夏の草刈りは行わない。
						サラシナショウマ	6月～11月	開花	目視カウント	1月	
						イヌショウマ	6月～11月	開花	目視カウント	1月	
	Step	ヤマアカガエルの上陸を目指す。	冬	ササ刈り。		ヤマアカガエル	2月～8月	卵塊・幼体・成体	目視カウント、鳴声、	10月	
4-4樹林地ゾーン											
林内		現状の保全		現状管理作業を継続する。			随時	樹林地ゾーン1の尾根添い	ラインセンサス調査を行い貴重種を整理、報告する。	調査後2ヶ月以内	・キンラン、ギンラン、ササバギンラン、シュンラン、エビネ等の希少植物が生息している。(園路整備時には注意が必要)
		林縁部の崩落危険個所の対策		計画的に対応。巡視による安全確認	ツミ	随時	営巣、幼鳥、成鳥	目視カウント			
					オオタカ	随時	営巣、幼鳥、成鳥	目視カウント			
					フクロウ	随時	営巣、幼鳥、成鳥	目視カウント			
					アオバズク	5月～9月	営巣、幼鳥、成鳥	目視カウント	11月		
4-5憩いの庭ゾーン											
		未整備地区					随時	西側の尾根添い	ラインセンサス調査を行い貴重種を整理、報告する。	調査後2ヶ月以内	
4-6展望の丘ゾーン											
		未整備地区			カヤネズミ	10月～3月	球巣	目視カウント	5月		



← モニタリングルートを示す

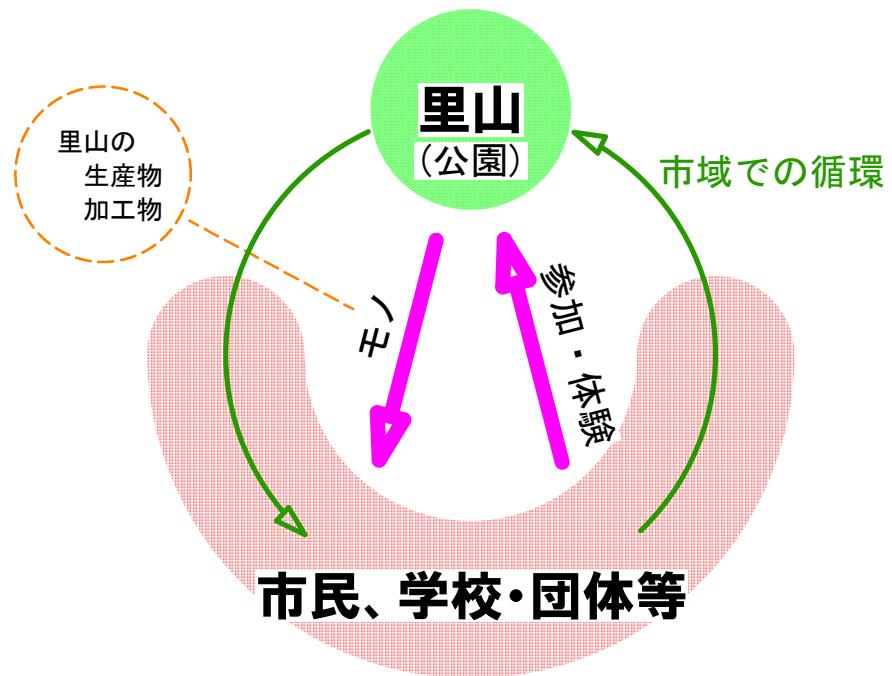


昔の里山：農家を中心とした循環があり持続していた。



“社会構造が変化した今”

里山環境を持続させためには、維持管理に加え運営による取り組みを併用し、里山の循環を再構築する必要がある。



里山環境を持続可能とするための公園管理運営での取り組み(案)

環境	管理作業	作業分担				備考	
		○:作業主体	◎:企画運営	△:行事等参加	×:対象外 場所が限定的であれば記載		
		指定管理者	市民参加	ボランティア			
雑木林	伐採更新	○散策の森	×	×	○斜面地	市は安全対策	
	落ち葉搔き	◎	○	○			
	薪の活用	○				販売の仕組み	
	炭焼	○		○	炭窯設置		
	粗朶柵	○			○斜面地		
竹林	タケノコ掘り	○竹林	○	○			
	竹間伐	○竹林他			○斜面地	竹除去も含む	
	かのこ垣	○竹林他			○斜面地		
	竹灯籠・七夕まつり	◎	○	○		新規ボランティア獲得のためのアピール	
	門松、竹皿、竹箸販売	◎				販売の仕組み 食器はBBQ場で	
スギ・ヒノキ植林	間伐	○散策の森					
湿地	田んぼ 年間作業	○		○			
	〃 収穫、脱穀ほか、餅つき	○◎	○				
	ヨシ抜根、畦ぬり	○			○ 研修など		
畑	景観畑(散策の森)	○◎	○	○		収穫体験など	
	農園(展望の丘)	◎	○募集			農園付公園型?	
花壇	花植え、花がら摘み	○◎		○			
観察会	植物観察会	◎	○				
	生きもの観察会	◎	○				
	虫取り体験	◎	○				
	木登り体験	◎	○				
	モニタリング調査	◎			○ 研修		
工作教室	竹材	◎	○				
	木材	◎	○				
	よしず	◎	○				
	染色	◎	○				
学校等との連携	造園系専門学校の実技授業(里山管理)のフィールドを提供	○			○	次世代の人材育成	
	大学の研究室(学生)に研究フィールドを提供	◎			○	次世代の人材育成 保全管理計画のモニタリングを担つてもらう	
市造協・市コンサル協との連携	里山管理実践研修の実施	◎			○	次世代の人材育成 協会として取り組んでもらえないか	
環境科学研究所との連携	柏尾川流域の調査のポイントに追加 保全管理計画の進捗評価				◎	公園で予算が確保できれば、この分はアロケ	

※ボランティアとは、今後、指定管理者が募集して組織することを想定したもの

指定管理者により、対象となる作業の指導および安全管理や公園管理についての基礎的な指導が行われることが前提となる。

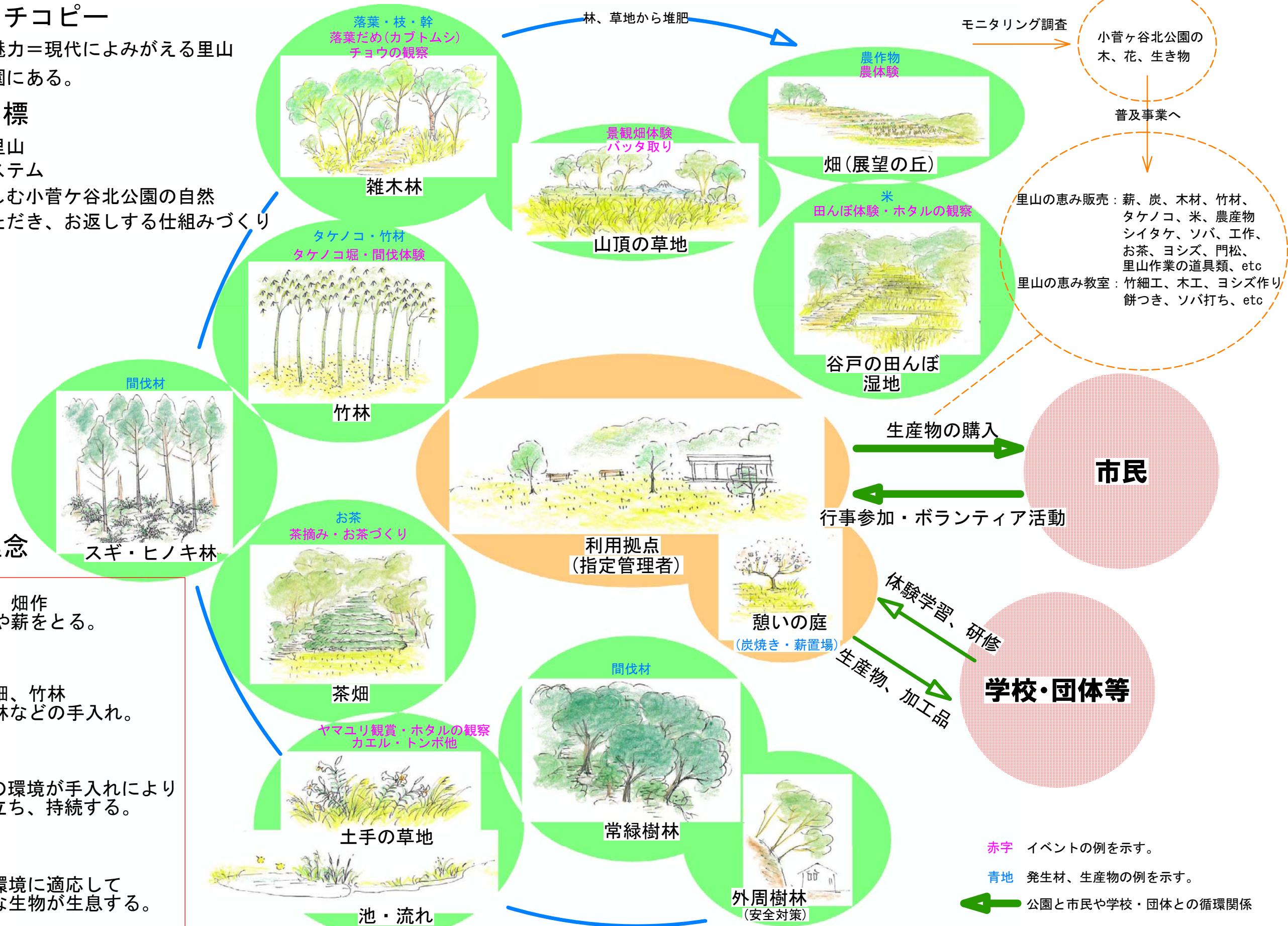
“小菅ヶ谷北公園と市域との循環で、里山環境が持続できる仕組みをつくる。=現代の里山循環システム。”

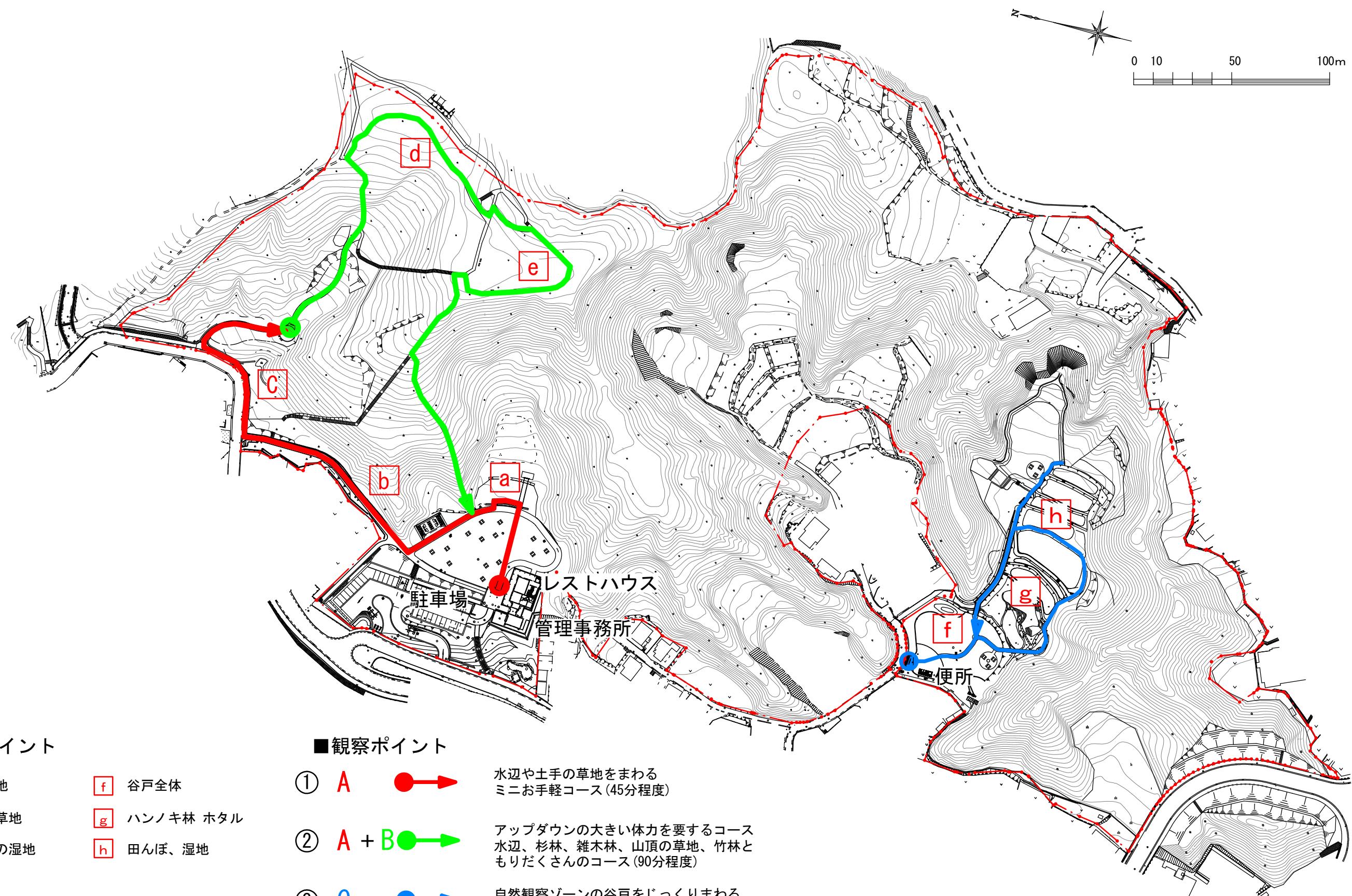
■公園のキャッチコピー

- ・小菅ヶ谷北公園の魅力=現代によみがえる里山
- ・今どきの里山は公園にある。

■運営事業の目標

1. 体感しよう現代の里山
2. 新しい里山循環システム
3. 知る、育てる、親しむ小菅ヶ谷北公園の自然
4. 里山から恵みをいただき、お返しする仕組みづくり



**■インフォメーションへの取り組み**

- ・各ポイントには、インフォメーションとなる、看板を設置する。
- ・小菅ヶ谷北公園の植物や動物の図鑑やマップを作製し活用する。

(1) 役割分担

維持管理作業

～保全管理計画に基づき、維持管理作業を実施します～

指定管理者**日常的な管理・地域との調整**

- ・水準書に定める維持管理
(巡回点検、園路広場の清掃、日常的樹木管理等)

保全計画に基づく維持管理

- ・市が萌芽更新対策を行った後の樹林育成。
- ・選択的な草刈り、中低木・竹林の間伐
- ・ヨシの刈取り、畦の補修、泥上げ等

横浜市**外周部の安全管理**

- ・外周斜面樹林の萌芽更新等他、日常管理では出来ない、大規模な樹林管理

その他

- ・未整備地区の維持管理
- ・新設整備

成果の確認・共有と作業の見直し
(順応的管理)

モニタリングと利活用

～定期的に調査を行い、維持管理作業による環境の変化を確認します(モニタリング)～
～地域や小学校などとの連携を進め、森の利活用や普及啓発等を促進します～

指定管理者**モニタリング(調査)**

- ・定期的な生物調査
- ・草刈り前の野草マーキング、株数調査。
- ・卵塊保護など季節ごとの生物保護対策。

利活用

- ・自然観察会、里山作業体験
- ・里山の生産物、加工品等の販売
- ・地域の学校、事業者等との連携
- ・野草、バッタ、チョウなどの調査体験。

横浜市**モニタリング(調査)**

- ・年間作業計画と成果の共有(事業計画作成時)
- ・成果についての評価と対策のアドバイス
(四半期報告時のふりかえり、アドバイザー派遣等の活用)
- ・中長期かつ専門的なモニタリング調査
(環境科学研究所との連携)

利活用

- ・研修の開催についての協力

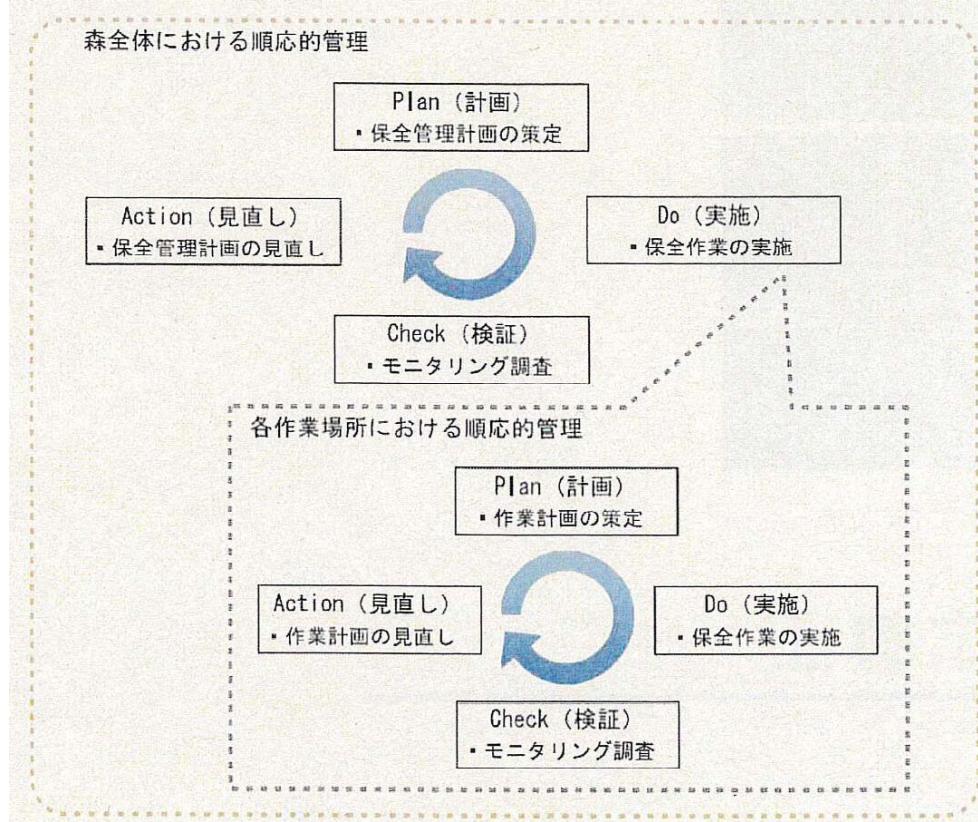
(2) 保全管理計画の進行

保全管理計画を活用した維持管理を進めて行くと、当初の計画通りに行くところもあれば、うまく行かないところも出てくる。そのため作業計画や作業内容、結果検証について関係者間で共有することが重要である。作業後に計画通りの成果が出ているかを検証し、作業内容を適宜見直すといった、順応的管理を行っていくことが重要になる。

指定管理者による維持管理が主体となるため、年間計画を定める事業計画作成時での調査と四半期報告書提出時に、成果を検証する仕組みを構築していくことが望ましい。

また、市が主催するフォローアップ研修等を活用し、専門家のアドバイスも受けながら、順応的管理を実施していく。

さらに、保全管理計画全体についても、自然状況や社会状況に合わせて、5年程度を目安に見直していくものとする。



(3) 今後の課題

1) 未整備地区について

- ・未整備地区である展望の丘ゾーン及び、憩いの庭ゾーンとそれに続く尾根道部分は、生物生息地及び公園利用上重要な場所であり、保全管理計画として望ましい整備内容を本報告書で記述した。
- ・整備後は、拡張部分の保全管理計画を維持管理水準書に追加し、指定管理者へスムーズな管理引継ぎを行う必要がある。
- ・外周部の危険斜面に未整備箇所があり、整備部署である公園緑地整備課と内容や時期について調整し、早期の整備を図る必要がある。

2) 維持管理水準書との関連について

- ・保全管理計画は維持管理水準書に位置づけておく必要があるため、改訂の際に、関連づけて記載しておく必要がある。
- ・樹林地や湿地の自然環境は、本公園の大きな魅力であり、維持管理水準書にも良好に維持管理することが位置付けられている。

3) 特定外来生物対策について

- ・本公園の特定外来生物で問題になっているのは、アライグマとクリハラリス（タイワンリス）である。
- ・アライグマは、水辺のカエルなどを捕食するため、生態系への影響が大きい。アライグマは、防除計画に基づく駆除が可能である。
※平成28年2～3月に、動物園課に届け出をして罠を設置したが、1頭しか捕獲できなかった。
- ・クリハラリスは、近年増加しており、コゲラなどの小鳥の巣を襲う、冬季樹皮を齧るために枝や樹木全体が枯損するなどの被害が多数見受けられる。罠での駆除は効果が小さく、林に手を入れて里山環境を取り戻すことで、猛禽類が林内を飛翔できるようになり、リスの多くの捕食される。
- ・手入れされない雑木林や竹林は、常緑樹との混交が進んだ過高木な林相となり、クリハラリスが好む。

4) 駐車場について

- ・休日等のピーク時の駐車場不足が、指定管理者から報告されており、臨時駐車場の整備等の、対策を検討する必要がある。

小菅ヶ谷北公園検討会議事録

第1回検討会議事録

平成28年8月3日 場所：小菅ヶ谷北公園

【出席者】

指定管理者：奈良・生駒植木共同企業体(長澤、生駒、吉沢、大久保)

横浜市：南部公園緑地事務所(中村、海野)、公園緑地維持課(村岡)、公園緑地整備課(濱見)、環境科学研究所(七里)、栄土木事務所(オブザーバー)(内野、斎藤、五十嵐、松本)

アドバイザー：かのこ環境プロデュース(株) (神保)

受注者：(有)ケイ環境計画(高木)

【検討会の概要】

1. 検討会の主旨説明、スケジュール、第1回説明会の流れを説明する。(検討会資料参照)
2. かのこ環境プロデュース(株)の神保氏より、現地を確認しながら、各ゾーンの特徴、保全管理上の留意点等について説明を受ける。

【現地確認の概要】

1. 調査ルート(調査ルート図参照)を14区分し、各ゾーンについて保全管理の提案を受ける。

2. 各ゾーンの説明

① ゾーン（園路添い湿地）について

- 北西斜面で水系を有する①～⑤地区は、生物相が豊かであり保全管理上、最もポテンシャルの高いエリアである。
- 北西斜面は多様な植物が出現するが、南斜面はクズに覆われてしまうことが多い。
- この地区はヤマユリ観察の場として、おもしろい地区である。
- エリアは奥のサクラの大木までとし、若いサクラは残す。また、クリノキは被圧により、強い日差しからヤマユリを守り重要である。
- マダケの進入に注意し、管理を行う必要がある。

- ヤマユリを増やすためには、2月の草刈り(地際まで)が重要である。また、ヤマユリを効果的に見せるため6月中旬にも草刈りを行う。6月の草刈りでヤマユリを刈らないように、5月にヤマユリにマーキングをする必要がある。
- キアゲハ、ナガサキアゲハ、カラスアゲハ等アゲハチョウが出現することは、ほどよい明るさであることの指標となる。
- ここは水路は、ホタルの生息地に適している。既存のツツジをミソハギ、ハンゲショウ、クサレダマ等の湿性植物に変えて行くと好ましい。
- カヤ場にするためには、カヤの大株を残し夏に草刈りを行う。カヤ場とヤマユリはセットで見せることができる。

② ゾーン（園路添い湿地）について

- 現状は湿地程度で大型のバッタ程度であるが、少しあつたない。
- 水面が奥過ぎる、防水シートを使って安定した、大きい池をつくると良い。
- これにより、ヤマアカガエル、ヒキガエル、ホタル、ホトグエジョウ、ヨシノボリ等が入ってくる。

③ ゾーン（園路添い湿地）について

- 水域を増やす(防水シートで止水する)ことで、ミソハギ、ワレモコウが生息する湿原景観をつくる。現状は少しあつたない。
- ハコネウツギから向こうの山はいじらない、コナラは下枝を取り明るくすると、ヤマユリが出る。
- ここで切る木は無い、ホタルのために落葉樹が必要。
- ここは、ポテンシャルが高く、少し手を入れるとすぐ良くなる。その意味で課題は多く、優先順位を決め、計画的に進めると良い。

④ ゾーン（園路添い湿地）について

- ゲンジボタルは1頭でした。
- ハンノキは、あと2本程度必要である。道路のライトの明かりはホタルにとって最悪であり、それを遮蔽する必要がある。
- 山側の木はサワラを残し、常緑樹は全て取ると良い。(ヒサカキまでは常緑樹を取る) ここは明るくする。
- エゴノキは重要、エゴノキとハンノキで南の光をとり、西日を遮ることで安定する。
- ゲンジボタルを目標とするには、現状の水面はそのまま残し、池を広げると良い。
- ミレンヤンマ等大型トンボの産卵場所にもなる。
- この一帯はポテンシャルが高く、見せ場がたくさんある。少し手を加えると良くなる場所が多い。
- 舞岡公園のゲンジボタル生息場所から300mくらいで、ホタルの行動範囲は700mぐらいなので、舞岡のホタルが飛んで来る。

⑤ ゾーン（園路添い湿地）について

- 明るい、アゲハチョウが入ってくる場所。カラスサンショウを残す。
- 浅くて良いので、水をストックしてから流す。蛇行しながら水を流す。蛇行した下流側を丸太で止める。防水シートは不要。幅は40cm程度で良い。水路の間にはセリができる。
- 生物の目標は、明るい湿地性の草原であるから、ヒメギス、キアゲハ。

⑥ ゾーン（スギ林）について

- スギ林の北側の林床は管理が容易で、ヤブミヨウガ、シダ類の均一な林床が形成されている。南側はカナムグラ、クズ、ヒメムカシヨモギ、タイアザミ等多様で、管理が困難なように見える。しかし、カナムグラはキタテハが好む食草であり、カキノキを植栽し成虫の吸密植物とすることで、これらを生態系として、展示可能な環境となる。
- カナムグラは冬に1回刈れば良い。それにより、春はスミレ、ホタルブクロが出現する。

⑦ ゾーン（スギ林）について

- この位置はスギ林を管理する上で要注意の場所である。ここは常緑樹は絶対に切ってはいけない。西側の竹林、稜線上に陽が少し見えるが、この状態はあまり良くない。樹林地の中を塞ぐようにしなければならない。
- 樹林地の中が安定し、空中湿度が安定すると、シダ類が優先した植生が出現する。風や陽を入れるとシダ類は一挙に無くなる。保全管理計画の押さえ所である。
- このような場所は、ミミズが豊富でタヌキ、ノネズミ等が好む環境である。
- 現在の若い竹は非常に大切である。スギ林に光りを入れないように留意し管理する。
- 稜線上から、内側の竹は刈り、常緑樹を育てる事が好ましい。
- 園路添いの針葉樹は下枝を上げず、光や風を遮蔽するように配慮する。
- 常緑は5mぐらいで切って、それ以上は上げないようにすると効果的である。

⑧ ゾーン（草地）について

- コオロギや草原性のアゲハチョウなどの生息環境を整える。
- エノコログサなどを、9月下旬に刈り高15cmで刈ると、12月には30cmぐらいの高さで枯れる。するとここは木オジロ、アオジなどの冬鳥の餌場となる。冬鳥が増えればモズなどが出でてくる。
- インホメーションとセットで保全管理計画をつくると、テーマが明確になり分かりやすい。
- 草刈りはナイロンカッターで上をはねる（地際で切る必要は無い）。10月上旬まで行う。冬は2月に地際で草刈りを行う。そうすることで、スミレ、タンポポ、ホタルブクロの花畠になる。人の進入を制限することは好みしい。

- ホタルブクロを増やすためには、2月に年1回地際でしっかり刈る。高刈りすると無くなる。

⑨ ゾーン（尾根道）について

- スタジイの大木にアオバズクの巣跡がある。フクロウも営巣している。
- 竹林が入り込み優先しているところは、樹木が全て枯れてしまう。この場所は、このような状態になりつつある。
- モウソウチクは根が浅いので、法面崩壊も起こしやすい。
- 常緑樹の樹勢回復を図り、竹林から常緑樹へ植生転換を計画的に行う必要がある。保全管理のテーマとして重要である。
- 20年ぐらい前は常緑樹の森であった。（中村）
- 竹林に負けて樹木が枯れると、穴が空きパッピング孔から、水が根を伝わって崖崩れを起こす。このように竹林を放置すると崖崩れの原因になり、法面保護の点からも、竹林の形態を整える必要性を、保全管理計画にクローズアップしたい。
- 広葉樹の枝を払い(P切り)し、伐採した竹で土留めを設置し、竹林の管理を進めている。（竹林管理の事例を確認する。）
- オーバーハングしている箇所があり、かなり危険な状態である。

⑩ ゾーン（クリの広場）について

- オギの草地を、利用可能な草地として維持するためには、オギを刈れば衰退する。
- オギは全体の30%ぐらいを、パッチ状に残しては。
- クリノキの下の日陰、日向、オギ等、多様な生態をインホメーション(看板)によりミニ展示を行う。

⑪ ゾーン（湿地）について

- ハンノキの下枝を上げた方が良い。ハンノキの下にミドリシジミ等が越冬する所以踏まない方が良いが、ハンノキの下まで水面になると、ミドリシジミはいなくなる。下枝を上げて陽を入れないと、ホタルはいなくなる。下枝を上げるぐらいはミドリシジミ等の生育に影響無い。
- ゲンジボタルは入っているが、ホタルの数が若干少ない。オモダカがふえることにより、ホタルが減少する可能性がある。
- 夏にしっかり陽を入れた方が良い。

⑫ ゾーン（水田）について

- 水田にネットをかけないと、雀に取られ、収量は良くて5~6kg。ネットはかけた方が良い。

- ・ 日当たりの良い水田は3本植が一般的、谷間の水田は8本植がよい。
- ・ このような水田がさらに2か所ぐらい欲しい。開放水面を増やすとドジョウ等ができる。
- ・ キアゲハはセリに卵を産む。ここでの目標種はキアゲハとする。田んぼの周りに来る。
- ・ 止水域にはシオカラトンボ、流水域にはオニヤンマが入って来る。現在はトンボが過密状態にいる。下流に水域を広げることで、チョウトンボが入って来る。
- ・ ニホンアカガエルが産卵しているのは良い。
- ・ 畦の草刈りは8月中旬に行う。
- ・ 谷戸でホタルを出すには、8月(お盆前)の草刈りが重要。8月の草刈りが全ての植物を育てている。
- ・ 南東側の畦は、草刈りをして水田に陽を入れる。北側はセリがあり安定した環境なので、草刈りを行う必要はない。草刈り時期は8月とする。8月草刈りを行うと、水田の水温が上がり、水中のプランクトンが増加し、ホタルの幼虫の餌が増える。このような一連の作業と意味をインホメーションすることが良い。

【今後の進め方】

1. 現状と分析を今回行ったが、今後の実施については優先順位をつける必要がある。
2. 今回確認したゾーンの、ゾーンごとの課題と優先順位案を、次回までにまとめる。
3. 雑木林、今後整備する畑について、次回に確認を行う。
4. 次回の検討会は、9月9日(金)13:30からとする。(予備日を12日とする。)

⑬ ゾーン（小池）について

- ・ 既存樹のサクラにより、池周辺の環境を安定している。切ることは絶対行ってならない。
- ・ 保全管理計画の中に、場所ごとの木や景観的な谷の向き等、重要なポイントを示す必要がある。
- ・ 水路はツチガエルに良い環境であるが、草が高すぎて、かぶりすぎている。今の時期、草刈りを行って良い。

⑭ ゾーン（お茶畠下の池）について

- ・ 開放水面を広くすると、ギンヤンマが入る。周りの畦を整え、セリ、ミソハギ等を出す。
- ・ ここは浅い池を整備すると、鳥を含めかなりの生物が入ってくる。
- ・ 開放水面の中にヒツジクサの類が入ると、開放水面を覆ってしまうので注意が必要。
- ・ 基本的に環境ができあがっているので、少し手を加えれば良くなる。
- ・ メダカが確認されているのであれば、ヨシの抜根を下流部から半分ずつ行うと良い。
- ・ 上流部から行うと影響が大きすぎる。下流部ができあがっていれば、生物は下流部に逃げる。
- ・ 全面を池にするのではなく、畦をつくり、掘った場所を水面にしていくと良い。単なる池にするとつまらない。
- ・ 目標の生物はギンヤンマ、キアゲハ。鳥はバン、クイナ、カシラダカ。
- ・ キアゲハの幼虫のセリ、成虫（吸密）のミソハギのように、セットで環境をつくることが重要。
- ・ 観察会等で、子どもが池の中に入れると良い。
- ・ 抜根を行わないと、11月までに高さ1mぐらいのヨシ原に戻り、ヨシの花が咲く。トンボ生存する間は水面が出るが、それ以降はヨシに覆われ元に戻る。

第2回検討会議事録

平成28年9月9日 場所：小菅ヶ谷北公園

【出席者】

指定管理者：奈良・生駒植木共同企業体(長澤、生駒、吉沢、大久保)

横浜市：南部公園緑地事務所(中村、海野)、公園緑地維持課(遠藤)、公園緑地整備課(濱見)、環境科学研究所(七里)、栄土木事務所(オブザーバー)(斎藤)

アドバイザー：かのこ環境プロディース(株)（神保）

受注者：(有)ケイ環境計画(高木)

【検討会の概要】

1. 第2回検討会の進め方を説明。(南部公園 中村)
2. 今後の整備予定(展望の丘ゾーン、いこいの庭ゾーン)について説明。(公園緑地整備課 濱見)
3. 散策の森ゾーン、展望の丘ゾーン、外周法面整備について現地調査と意見交換

【今後の整備予定】

1. 基本設計からの見直しについて
 - ・憩いの庭ゾーンは、農家の庭として整備イメージを見直す。
 - ・展望の丘ゾーンは、駐車場を整備しない事から、体験農園の機能を見直す。
 - ・ゾーン間の園路には、尾根添いに園路が設定されているが、地形的に整備が困難な箇所は、園路位置を見直している。
2. 憩いの庭ゾーンの考え方
 - ・散策等の移動の途中に利用できる休息系を、ゾーン方針とする。
 - ・里山を感じる景観を目指す。
3. 展望の丘ゾーンの考え方
 - ・広場を中心とした、眺望が確保された活動系のゾーンとする。
 - ・保全区域外周部はバッファーとしての植栽を設け、畠跡地の景観を活かした整備をする。
4. 散策路の検討について
 - ・展望の丘ゾーンと、いこいの丘ゾーンを整備する際に園路を整備する。
5. 崖の整備予定について

・赤い点線で囲った右側2か所については、大規模班で施工を予定している。29年度に完了の予定だったが、延期されそうな状況である。

・緑の点線の箇所については、スクリーニング会議に案件を上げて、対応を検討して欲しい。

6. 説明に対する意見交換

- ・スクリーニング会議には、整備課から上げないのか？(中村)
- ・南部公園から上げて欲しい(濱見)
- ・崖整備予定が未確定なので、木が危ない状況をとりあえず処置すべきか、判断に迷うところがある。(中村)
- ・展望の丘ゾーンは、農園付き公園の検討は行われていないか？(中村)
- ・その議論は出ていない。今後の修正で検討する必要があるかと考える。(濱見)
- ・農園付きの選択肢もあるかと考えるが。(中村)
- ・近隣街区公園が港南区側に近接しているので、遊具広場的機能はこの公園に必須かという視点でも検討して欲しい。

【現地確認の概要】

1. 芝生広場周辺の湿地

- 1) お茶畑下の池について
 - ・南、東が山でふさがれ、カエルなどには最高の場所になるため、水面が欲しい。
 - ・ヨシを残すところと、取る所を明確にすると、エリアは狭いか環境的に多様になる。
 - ・このゾーンは作業量的な点も踏まえて、どのような環境にするか議論する必要がある。開放水面にすることにより、止水性のトンボ、カエル、ヨシを残すことによりメイガ類の発生による、越冬鳥類の餌場とする等。
 - ・ハゼノキの下は、開放水面をつくるとヤマアカガエルの産卵場所になる。中央の湿地は、開放水面をつくるとトンボには良い環境、またヨシを育てるのもこの場所が良い。
 - ・ヨシを抜根して、石積みに畦のように盛土すれば良い。

2) 炊事場横の池

- ・ガマは抜根した方が良い。3年に1回数株残して抜根する等、管理のローテーションを組むと良い。
- ・ガマを絶やすのであれば、夏に抜根する。定期的に抜根してガマを残すのであれば、冬に抜根する。抜根したガマは土と混ぜ畦に付ける。
- ・日陰の湿地は水面ができたら、ヤマアカガエルには最高の環境である。
- ・日向はトンボ等には最高の環境となる。

2. 竹林について

- ・竹林の周りは親竹を残さず、下から枝が出る若い竹を残す(常緑の亜高木でも良い)。竹林の中に光りが入らないようにする。
- ・竹林は外側を密にして、中は疎にする。
- ・竹林の中は細い竹を9月に取り、太い竹を残して育てる。
- ・竹林の中にオトコエシ、ヒメコウリが出ると光が入りすぎ。林縁部を塞げばこれらは絶える。
- ・竹林の林床はヤブミヨウガ、シダ類、マンリョウがある状態を保つ。

3. 山頂の草地について

- ・草食のキジバト(9月繁殖)が多いことは、草地の安定の目安となる。
- ・バッタ類を増やすのであれば、現在の状態で良い。
- ・現在様々なバッタ類が生息している。このような場所を残すと、バッタ類の産卵場所となる。するとトビやモズの餌場になる。草の種を食べにホオジロ、カシラダカが来る。
- ・草地維持の目的を明確にすることが必要。草地としての残し方も色々ある。
- ・9月20日頃に草刈りの際、パッチ状に草竹の高い所を残すと、ススキの仲間が出てカマキリの生育場所になる。
- ・刈った草は積んで置くと、コオロギの産卵場所になる。
- ・刈草はしばらく置いて、昆虫類が移動してから処分する。
- ・そのような管理の目的をインフォメーションすることが必要。
- ・草刈りの最終は9月20日として、パッチ状に残す所は1年中刈らない。パッチ状に残す所は、火災防止のためベンチから離す等の配慮をする。

4. 雑木林について

- ・切り株はスズメバチの巣になるので、園路から離す。
- ・アオゲラの巣穴があった。アオゲラは巣穴をねぐらとして使い、巣穴を1年中使う。
- ・ミズキ、サクラが大木化している。園路上の枯れ枝に注意(特にミズキ類)が必要。
- ・ミズキは下から切るとまず出ない。ミズキを取るとヤマザクラの樹冠が広がる。
- ・モンキアゲハ、ダイミヨウセセリが飛んでいるが、この園路をもう少し広げると、大型アゲハのすばらしい通り道になる。(蝶道)
- ・現在チョウ道になっているが、チョウ道をもう少し明確にすると、神奈川県産の大型アゲハチョウ(クロアゲハ、ナガサキアゲハ、モンキアゲハ、ジャコウアゲハ)が、全てみることができる環境となる。
- ・5mくらいの幅で常緑低木類を取り、他のものは残すと良い。
- ・クサギ、カラスザンショウ、キブシ、シロダモ、サルトリイバラ等を選択して残しておく。(高さ3mくらいまで)
- ・ジャコウアゲハの餌となるオオバウマノスズクサを残している(幼虫がいる)。(指定管理者)
- ・現在幼虫の食べ物が多いからメスが多いが、吸蜜植物のクサギ等を入れるとさらに増える。

5. 展望の丘ゾーンまでの途中の急斜面地について

- ・亜高木を伐採して、林床を育成して水切り、ソダ垣を作り、1年後林床が安定してから、高木類を個体別に切る。(安全対策としての樹林地管理)
- ・ここは散策路になるのであれば、過高木の除去(枝打ち)と立ち枯れの除去が必要。

6. 展望の丘ゾーン

- ・瀬上、舞岡、上郷はオオタカのハンティングエリアであり、小菅ヶ谷公園もハンティング場として考えた方が良い。
- ・公道添いの草地(用地の所有は現在不明)で、カヤネズミの巣を確認した。市内で他に例がなく(国内的にも)貴重である。
- ・もし横浜市の土地であれば、カナムグラを取りオギの群落をつければ、カヤネズミの繁殖地を残す。
- ・横浜市の土地でなければ、横浜市の用地にオギを移植し、代替地をつくる必要がある。
- ・これは、公園整備を待たず、早めに行う必要がある。
- ・この点について、保全管理計画で明記する必要がある。
- ・オギは地下水の高い所を好むので、現況地盤を掘り下げ代替地を確保する。
- ・下の広場(畑の所)は畑で残せないか。畑に住む動物がいるから、猛禽類が来ると言う結果が出ているので、保全管理計画的には、畑を維持すると良いことを示したい。(中村)
- ・草地は悪くないが、そこに多様性をもった畑を残すこと、小動物が入り有効である。
- ・キジやフクロウにとっても、畑を残すことは必要で、ここは農地としての活動を残して欲しい。

7. 急傾斜地について

- ・保全管理計画の中に安全対策を、しっかり提言する必要がある。
- ・安全対策を行う優先順位を付ける必要がある。
- ・整備途上の公園なので、整備の中で安全対策も行って欲しい。事務所へ引き継いでからでは、普通の管理費での対応は難しい。(中村)
- ・南東エリアの斜面は幼稚園や人家があるので、安全対策が必要。
- ・竹林は安全対策上の優先順位は高い。
- ・ここは下が常緑樹林で上が落葉樹なので、下の常緑樹は大木を除伐し、亜高木を残して林床を造る。上の落葉樹は若いので育てる。

8. まとめ
- ・ゾーン区分についての説明を行う。
 - ・憩いの庭ゾーンについては、憩いの庭ゾーンに至る園路添いを含めたゾーン設定を行っているが、今後検討をお願いしたい。
 - ・展望の丘ゾーンと憩いの庭ゾーンは、今回の内容で概要をまとめる予定です。
9. 今回調査のまとめ（神保）
- ・ヨシ原は被圧環境を活かした開放水面をつくりたい。ヨシを刈り残しながら、開放水面が2か所でき、多様な空間を作り出せる。
 - ・竹林ゾーンは、親竹が十分育っていない状態で、周りに被圧をしつかりつくり、中の若竹は取り地下茎を育て、親竹候補を育てて行く。9月～10月にかけて若竹の処理を行う。
 - ・スギ林ゾーンからは、竹林の若い竹が、スギ林の被圧を作っていることを考慮して管理する。
 - ・草原ゾーンは、バッタ類が猛禽類にとって非常に重要であり、草原ゾーンの付加価値を高める意味で、全面を均一に刈るのではなく、一部残して刈る。最終の草刈りは9月20日をめどにする。
 - ・雑木林はチョウ道として整えると、非常におもしろい場所である。ここらしい環境をつくることができる。
 - ・雑木林の西側の急傾斜地は、水切りをつくり亜高木の整理は行つた方が安心かと思う。
 - ・カヤネズミの生息エリアは、生息場所がどここの土地がはつきりしないが、カヤネズミが生息していることを承知し、対策することが、ゾーン整備の目的の一つと考える。キジの生息も確認されていて、乾いた畠のような土地はキジにより重要であり、考慮した整備計画が必要だと考える。
 - ・安全対策は、優先順位は別として、危ない箇所を明確に示す必要がある。発生する災害の予測ぐらいは行っておく必要があると考える。
 - ・カヤネズミの生息エリアの、用地の確認はしておきます。（中村）
 - ・災害対策については、整備課により土木的な調査を行っていく話がある。樹木の整理の判断をしてもらえると、南部公園として動きやすい。（中村）
 - ・指定管理者さんが、里山管理をまわして行きやすい、保全管理計画にして行きたい。（中村）
 - ・第4回検討会でこの点について、みなさんのアイデアをいただきたいので、よろしくお願いします。（中村）

【次回の予定】

1. 第三回検討会は11月の2週目に南部公園で行う予定です。
2. 保全管理計画の目指すところについて。
 - ・里山環境の保全は、生物の保護だけでなく、人間の営みがあって持続するものであるから、利用、運営、予算をうまくまわす、仕組みづくりが必要である。昔の農業的なもので、循環させて行く事も方法ではないか。（中村）
 - ・そのような活用は、里山の循環の基本であり、安全対策にもつながる。その点を管理システムの中に入れて欲しい。田んぼをつくることは水害対策につながるし、山の手入れは緑のダムである等、安全対策としての重要性も加えて欲しい。（神保）

第3回検討会議事録

平成28年11月17日 場所：南部公園緑地事務所

【出席者】

指定管理者：奈良・生駒植木共同企業体(長澤、生駒、吉沢)

横浜市：南部公園緑地事務所(村田係長、中村、海野)、公園緑地維持課(村岡)、公園緑地整備課(渡部係長、濱見)、環境科学研究所(七里)、栄土木事務所(オブザーバー)(斎藤)

アドバイザー：かのこ環境プロディース(株)（神保）

受注者：(有)ケイ環境計画(高木)

【検討会の概要】

1. 資料説明。(南部公園 中村)
2. 意見交換
3. まとめ

【資料説明及び意見交換】

1. 進め方について(中村)
 - ・資料説明を中村から行い、途中神保から補足説明しながら進め、隨時意見交換を行う。
2. 土地利用と植生の変遷について説明(中村)
 - ・政策課に平成10年代の航空写真を問い合わせている。(中村)
 - ・航空写真から竹林の拡大状況が把握できると考えている。(中村)
 - ・指定管理者のモニタリングについて、個体数の調査がないので優先度の判断ができない。調査結果を見るとカシラダカ、アオジ、水鳥や水辺の好きな昆虫のヒメギスなど、以前は生息していた生物が確認されていない、このことから湿地はあるが、乾燥が進んでいることが裏付けられる。ただし個体数が出ていないので、進行状況等は判断できない。今後のモニタリングでは、個体数の調査もお願いしたい。(神保)
 - ・個体数のモニタリング調査については、次回の検討会で考えたい。(中村)
3. 利用拠点ゾーン(園路添いの湿地)について説明(中村)
 - ・6月のヤマユリを残し、ほかの草の刈り高は北西斜面で、被圧があるので10～15cmの刈り高で良い(神保)
 - ・クリ、サクラを取ると、現状の良好な環境が維持できなくなるので、特に意識する必要がある。下枝を大切にすることが必要。南側斜面の場合と異なるので注意する。(神保)

- ・バランスみながり刈ると言う表現は、具体的表現にしていきます。(中村)
- ・ヨシを残すとカラ類等の鳥の餌場になる。ヨシを取るとセリ類の植物に変わり、そこはコサギ、カシラダカが入って来る。それをどちらにするかは、今後議論して決めて行く必要がある。状況によっては、モニタリング調査を行って決める必要があり、経過をみて決定すると言う事です。(神保)
- ・作業に応じた環境の選択肢を示して、あとで方針を決めていかないか。(中村)
- ・そうです。モニタリング調査でホトケドクジウの繁殖が確認されれば、ヨシは刈った方が良いと判断できる。バランスをみながらとは、状況を把握してから、決定すると言うことです。(神保)
- ・選択肢をもう少し明記しておくことにします。(中村)
- ・断面図③はミソハギ群落が既にあるので、2月に全て刈ると言うことで良い。(神保)
- ・目標種の写真は、小菅ヶ谷北公園の写真ができるだけ使いたいので、小菅ヶ谷北公園の写真があれば差し替えるのでお願いします。(中村)
- ・水路を蛇行させると水流に変化が生まれ、大水時の生物の避難場所等、重要な要素です。(神保)
- 4. 利用拠点ゾーン(芝生広場周辺の湿地)について説明(中村)
 - ・断面図①の杉林の林縁部の中木は、杉林の被圧に非常に重要で、保全は重要なポイントと言える。(神保)
 - ・断面図②の右側の被圧の樹木とデッキの間は、冬場に生きものが溜まる重要な場所で、モニタリングについては留意する必要がある。(神保)
 - ・入口は鳥が来やすいように、草を残す等配慮した方が良いか。(村岡)
 - ・入り口部に人がいることは、鳥は承知しているので、オープンにしていた方が来やすいと思います。隠れ場所は必要だと思います。(神保)
- 5. 散策の森ゾーン(雑木林の尾根)について説明(中村)
 - ・ここは吸蜜植物と幼虫の食樹と同一の場所にあることが重要。目標種のナガサキアゲハは国内移入種なので、カラスアゲハにかえた方が良いと思う。(神保)
- 6. 散策の森ゾーン(スギ・ヒノキ植林地)について説明(中村)
 - ・竹の樹林地への侵入は要注意である。竹を残すのは、被圧のための林縁部の若い竹だけとする。(神保)
- 7. 散策の森ゾーン(竹林)について説明(中村)
 - ・タケノコの形状から、親竹候補をマーキングして育成すると良い。(神保)
- 8. 散策の森ゾーン(山頂の草地)について説明(中村)
 - ・トゲヒシバッタは湿地に生息するバッタなので、この目標種からは除いたほうが良い。(七里)
 - ・トゲヒシバッタはいるとすれば自然観察ゾーンだと思う。(七里)
 - ・カヤキリは舞岡のヨシ原にはたくさんいる。(七里)
 - ・クルマバッタは横浜には少ない。(七里)

- ・肉食性のバッタと草食性のバッタが両方生息していることが重要。幼虫期の5月の草刈りで、草を刈り残すことがポイント。(神保)
 - ・植生調査によって、残している植物があるのか。野草が目標に入るのもおもしろいと思う。(村岡)
 - ・草の指標も必要かもしれない。(中村)
 - ・前回の検討会では、バッタの種類よりは数が多かった印象がある。草刈りの仕方で、バッタの量の比率が変わってくる可能性がある。子どものイベント等で調査して行くのもおもしろい。(七里)
9. 自然観察ゾーンについて説明(中村)
- ・オモダカが増えるとホタルが減少する可能性があると神保さんに伺ったのですが、この点を詳しくお聞きしたいのですが。(中村)
 - ・ヘイケボタルは雑食性でカワニナへの依存が少なく、モロアラガイとかザリガニ等色々な物を食べる。田んぼの環境は以上のような生物が増えるのでヘイケボタルには良い。オモダカが増えるとそのような環境が失われ、ヘイケボタルに暮らしづらい環境になる。オモダカだけでなく、ヨシ原になって覆われるのも良くない。(神保)
 - ・今後のことを考えると、田んぼを拡大し、一番上の湿地をため池にして、水を一度温めて下に下ろすことも考えられる。(神保)
 - ・指定管理者の我々も、田んぼを増やしたいと言う考えはあるので、相談させていただきたい。(吉沢)
 - ・水田化して行く優先順位を、ある程度この場で決めたい。(中村)
 - ・水田の拡張は、現在の水田の下の湿地かと思うが、面積が広いので、我々だけでは厳しい感じがする。(吉沢)
 - ・景観的にも場所的にはここだと思う。(生駒)
 - ・ハンノキ林の上の湿地は、ホタルの繁殖の可能性があるので、調査を行う前にいじらないほうが良い。(神保)
 - ・現在の水田の下の湿地をとりあえず候補地とします。(中村)
 - ・水田を広げた場合の水源確保から、ため池をつくると効果的である。(神保)
 - ・冬場にヨシを残す場所を設定した方が良いのか、全て刈ったほうが良いのか？(中村)
 - ・残して欲しい。(神保)
 - ・オオヨシキリやアリスを期待するなら、冬はヨシを残し3~4月にヨシを刈る。(神保)
 - ・ホタルだけであればハンノキ林は要らない、ここはミドリシジミのすごい生息地になっている。(神保)
 - ・ここは名前として、ハンノキ林という名称にした方が良いか。(中村)
 - ・ハンノキ林と拡張する田んぼの間の湿地は、水田や池にしていくか、湿地から湿性林に移行していくかが良いのか？(中村)
 - ・水田を拡張してから、モニタリング調査を行い、将来の方向性を決定した方が良い。(神保)
 - ・ツチガエルが確認できなかったけれど、注意点とかありますか？(中村)
 - ・ツチガエルは草刈りによって、乾燥させないようにする。現在の管理状況は良いと思う。(神保)
 - ・市内でツチガエルが生息しているのは、新治だけでないかと言われている。(七里)
- ・ため池候補地の上は、背丈の低いササ原とし、大きいササを一回刈って、夏に刈ることで良いか？(中村)
 - ・それで良いです。ノウサギなどに良い場所になると思います。(神保)
10. 樹林地ゾーンについて説明(中村)
- ・急傾斜地-Aは幼稚園とか畠、民家に接している。(中村)
 - ・急傾斜地-Bは作業所等に接していて、落石すると家に当たることが心配される。とりあえず緊急対応で板柵を設置したが、整備課の工事を待っている状態です。(中村)
 - ・急傾斜地-Cは、隣接畠からの苦情もあり、抜本的な対策が必要だが、少しずつ対応を考える必要がある。(中村)
 - ・急傾斜地-Dは、隣接民地にサクラの大木が倒れた等のことが頻繁にある。(中村)
 - ・急傾斜地-Eは、民家に竹が倒れている状況であり、整備課で工事予定がある。(中村)
 - ・急傾斜地-Fは、竹が密生している場所であり、一部かのこ垣で対策を講じている。住宅に接し、竹林が密生し大木が張り出している危険な場所である。整備課の整備で境界部も対応してほしい。(中村)
 - ・管理用通路の整備を検討して欲しい。(吉沢)
 - ・整備の中で検討をお願いして行きたい。(中村)
 - ・その他にも危険な箇所はあるが、AからFを優先度が高いとします。(中村)
 - ・以上の危険箇所はタイプが違うことを承知しておきたい。南側の常緑樹林はポイント切りで対応可能な斜面地、竹林の密生地は竹を全部取る必要がある。その後、台場切り、ポイント切りで斜面崩壊を押さえる。どちらの優先順位が高いかと言えば、竹林を優先する必要がある。このまま放置すると、コナラ、クヌギの元気がなくなり、復活できない可能性がある。(神保)
11. 展望の丘ゾーンについて説明(中村)
- ・駐車場が現在30台しかないので、駐車場整備を期待していた。公園を周回できる園路が必要と考えるが。(吉沢)
 - ・散策の森と園路で結ぶのは厳しいと考える。管理通路は必要と考えるし、自然観察ゾーンに下ろす可能性については検討して欲しい。(中村)
12. 憩いの庭ゾーンについて説明(中村)
- ・生活の場である庭と、里山がつながるイメージが展開されることを期待しています。(中村)
 - ・元々ボーリスカウトの活動場所は自然観察ゾーンなので、そこで活動したいという要望がある。(吉沢)
 - ・キャンプを行うのではなく、木にハンモックをかけたり、アドベンチャー的利用ができるかという要望がある。(生駒)
 - ・人家に近い場所で、そのような活動が認められるか問題があるので。(村田)
 - ・憩いの庭の奥のなだらかな竹林はどうか？(中村)
 - ・部分的にでもつかえたら、ボーリスカウトは喜ぶと思います。(生駒)

- ・竹林の中にも大きい木が残っているので、利用は可能と考えます。(生駒)
- ・そのような場所として開放するが、制限はかけますは、ありかもしれない。(村田)
- ・プレイパークはプレイパークを開催する団体に許可を与え、参加者は自由に利用できる。(村田)
- ・やるに当たって、平地が必要とか、水辺が必要かと言った、条件は何かあるか。(渡部)
- ・木にロープをかけて良いかとか、遊んで良いかといった要望をだされた。現在、行える状況でないので、許可を出せない状態にある。(生駒)
- ・利用可能な場所を設ければ良いのか、それなりの整備が必要なのでしょうか。(渡部)
- ・場所が与えられれば、それで良いと思います。(生駒)
- ・こここのエリア限定で許可するには、環境を整える必要がある。(村田)
- ・憩いの庭ゾーンのゾーニングについて調整を行いたい。(中村)
- ・園路を上まで伸ばす検討はあっても良いが、憩いの庭ゾーンを山の斜面まで広げることは、あまり必要ないと今のところ考える。(渡部)
- ・ゾーニング分け的には、散策の森ゾーンの延長のような整備だと思う。(村田)
- ・樹林地ゾーン 1 の中に園路をつなげる表現にする。(中村)
- ・それで十分だと今のところ思います。(渡部)
- ・樹林地ゾーン 2 は散策の森ゾーンに含め、一体の環境として考えたほうが良いと思う。(中村)
- ・憩いの庭ゾーンを駐車場にする考えはないか。現状の駐車場 30 台では足りない。(吉沢)
- ・臨時駐車場で対応できないか。(村田)
- ・臨時駐車場にした場合の管理方法等の問題がある。(吉沢)
- ・芝生広場を臨時駐車に利用して、40 台対応することは現在行っている。これだけの公園で駐車場 30 台では少ない気がする。(吉沢)
- ・憩いの庭を臨時駐車に利用できるようにするか。(中村)
- ・来園者がどこから来ている等の分析はしているか ? (村田)
- ・していません。(吉沢)
- ・憩いの庭に駐車場を整備すると言うのは、平地が取れそうだからと言う意味か ? (渡部)
- ・そういうことです。ほかの場所でも良いと思います。(吉沢)
- ・駐車場については、今まで議論が出ていなかったようにみうけられるので、駐車場については別の視点で検討したほうが良いと思う。(渡部)
- ・そうだだと思います。(吉沢)
- ・樹林地ゾーンは 3 か所あるが、植生が違うので保全のあり方も違うと思うが。(七里)
- ・樹林地ゾーンは安全対策を行う程度の管理となる。安全対策として伐採更新等を行うと、里山管理的なことが可能になる位置づけです。樹林地ゾーン 2 は、散策の森に谷に面した部分もあるので、一体環境でゾーニングした方が良いと考えた。(中村)

【まとめ】

- ・小菅ヶ谷北公園には、かつての里山のなごり的なものもかなりある。これらについてゾーンを決め丁寧に復元することが目的だと考えます。今後優先順位を決める必要があるが、全体的な大枠はできたと思います。(神保)
- ・安全を第一に考え、保全管理の検証材料はできたのだから、これに伴うモニタリング調査のあり方、役割分担の考え方を整理すれば良い。(神保)
- ・指定管理者さんには、資料について内容の不明点や確認事項について、ご意見をいただきたい。実際の作業内容、時期について、具体的に示して行きたい。(中村)
- ・確定しているものは、それで良いと思うが、今後モニタリング調査の結果によって決定するものについては、経過処置と考え、確定することは好ましく無い。(神保)
- ・モニタリング調査の結果によって、今後の方針を決定するものは、選択肢を示して行きたい。(中村)
- ・目標種の写真の不足分や、小菅ヶ谷オリジナル写真があればお願ひします。(中村)
- ・公園としての、里山環境の持続可能性(循環性)の仕掛けについて、次回の検討会で皆さんの自由なアイデアをいただきたい。(中村)
- ・第 4 回検討会は、1 月 26 日 9 : 30 より南部公園事務所で行います。(中村)

第4回検討会議事録

平成29年1月26日 場所：南部公園緑地事務所

【出席者】

指定管理者：奈良・生駒植木共同企業体(長澤、生駒、吉沢、大久保)

横浜市：南部公園緑地事務所(村田係長、中村、海野)、公園緑地維持課(村岡)、公園緑地整備課(濱見)、環境科学研究所(七里)、栄土木事務所(オブザーバー)(斎藤、内野)

アドバイザー：かのこ環境プロディース(株) (神保)

受注者：(有)ケイ環境計画(高木)

【検討会の概要】

1.資料説明。(南部公園 中村)

2.意見交換

3.まとめ

【資料説明及び意見交換】

1. ゾーン別保全管理計画の、第3回検討会から変更した点について説明(中村)

4-1-5 山側の木のサワラの位置を補足します。(中村)

4-1-3 の選択肢-3 の表現について、セリ類にミゾソバ、タデ類を加え、背の低い湿性植物と言う表現とする。セリだけを守ると誤解されないように表現する。(神保)

4-1-6 に蛇行させる水路のイメージを絵にしようと思います。(中村)

・蛇行させると、たまにはアメンボウやホタルの幼虫などが来る。(神保)

4-1-7 の向かって左の崖はどうするか？(生駒)

・崩れる心配があるので毎木調査し、伐採更新を計画しています。(中村)

・1.全て切ると、裏側の竹林に光が入りすぎ影響を及ぼす心配がある。現地をみながら決める必要がある。(神保)

・右側は落葉樹とヤブツバキを残し、伐採しました。(生駒)

2-1 ミズキ等は切ってサクラは残して大丈夫か？(中村)

・100年サクラになっているヤマザクラがたくさんある。これは財産として残して行きたい。(神保)

・ヤマザクラは下の枝を枝抜きする管理で良いと思う。(神保)

・モニタリングについては、一括表にまとめているが、ゾーンごとに入れたほうが良いかお聞きしたい。(中村)

・大型アゲハチョウは、夏型アゲハチョウとした方が正確だがどうするか？(神保)

・夏型の表記は後で探す手がかりになるが、あまり内容が多くなると、読みづらくなる。参考資料として巻末にいれる工夫を。(村田)

2-2 リョウメンシダヒノデを指標種とする。ヤブヨウガ入り過ぎると明るすぎる。(神保)

2-4 にチョウゲンボウを入れて欲しい。(神保)

・刈った草をつんだ置き場は、いつ頃まで置きますか？(生駒)

・影響が無いような所は、そのまま置いとくとよい。置く場所は常緑樹の下等日陰が良い。下に水域がある場合は置かない。(神保)

・毎年そこに積んでいいって良いのか。(中村)

・結局、溶けてしまうのでそれで良いと思います。(神保)

・ススキの刈り残し位置は、毎年変えるのか？(中村)

・ススキは安定すれば全刈りとする。まだ安定していないので、株を残す。ススキが覆う前に全刈りすると、ネザサが入ってススキが増えない。追分のカヤ場もススキが数株しか無かったが、5年で全域に広がった。(神保)

・整備的な目標はサクラの疎林だと思うが。(中村)

・ススキは刈らないと2mぐらいになる。6月中旬に全高するとH=50cmで穂をつけるので、サクラの疎林ではこれが良い。久良岐公園でやっている。6月以降にやるとススキの穂は出ない。(神保)

・サクラはまだ若いので、今はススキを増やす方向で良いですね。(中村)

・サクラの根周囲は、刈ってススキを取る必要がある。(神保)

・バッタのことを考えたら、その後はどうすれば良いか？(生駒)

・バッタ状に残す。バッタはそこに移動する。(神保)

・刈り高 40cm で全刈りするのであればバッタに影響は無い。(神保)

4-3-3 水田とため池の間に、ハンノキの苗木がある。(長澤)

・ハンノキ林の境を右にずらし、園路を境にする。(中村)

・ハンノキのカブ元に水域が広がると、ミドリシジミがいなくなるので注意する。ミドリシジミは地上でさなぎになる。(神保)

・特定の種に限定した管理を行うと、里山管理から外れた方向に行ってしまうことを、理解する必要がある。(神保)

・ツリガネニンジンが見にくいので 1m ぐらいの垣根をつけると良いと思うのだが？(長澤)

・指定管理者と南部公園で方針をはっきりすれば良いと思う。(神保)

4-3-5 ササ刈りの時期はいつですか。(中村)

・ゴイシシジミ(ノウサギも同じ)を目指すなら、6 月の下旬に高さ 20cm で刈る。秋には高さ 50cm 程度

の

ササ原で安定する。見せるササ原にするには 10 月にも刈る。(神保)

・そこに行くためには 1 回冬場に刈って、リセットする必要がありますか？今はどのような状態ですか？

(中村)

・今は 3~4m のマダケがメインです。(生駒)

・マダケだと話が違ってきます。良いマダケ林にするのか、マダケを無くすかで違って来ます。(神保)

・水源としては、どのような状態が良いですか？(中村)

・1 回冬にリセットして、5 月下旬～6 月中旬に出た親竹候補だけを残すと、良いマダケ林になる。草地にするのであれば、冬に刈って 6 月に刈れば草地になります。(神保)

・緩斜面であれば、水路があるはずですから。草地にすればホタルの大繁殖地になる可能性がある。

(神保)

・水源として何が良いかで判断したい。(中村)

・カエルには湿った草地が良い。景観的にもよいと思う。(神保)

3-6 の管理が入る前の荒れた感じの写真と、現在の写真があれば報告書に入れたい。(中村)

・それは重要で、全部について必要だと思います。(神保)

・参考資料でかっこ垣の作り方を入れたい。(中村)

・了解です。(神保)

2. 全体目標として保全管理計画表についての説明。(中村)

・ヤマユリは土手で 300 株とします。(中村)

・モニタリングのメニューを示していますので、どれをやるかは今後決定すれば良い。(神保)

・期限を 2 ヶ月にしたのは、結果を反映するためには 2 ヶ月程度がスパンかと考えました。(神保)

・今まで指定管理者の行ってきたモニタリング調査に追加、変更の検討材料として出しています。ご検討お願いします。(中村)

・ルートマップにはゾーン分けのエリアを入れます。(中村)

3. 運営事業計画の説明。(中村)

・里山管理を維持管理として行っていくだけでは、なかなか難しい状況があり、現状にあった里山循環を構築しないと継続していかない考えます。指定管理者制度では収益を得ることが可能で、それを原資にして、管理に回して行くことはできないかと考えました。(中村)

・管理運営事業計画の図が、目次とセットになっていると見やすいと思います。(神保)

・利用の多様性を実践することだと思います。里山は利用の多様性があって管理の多様性がある。管理の多様性があるから環境の多様性できあがり、生物の多様性につながる循環です。利用の多様性をアピールする必要がある。単独の販売ではなく、売る拠点を作つて欲しいです。日常的に買い物ができる場所があると良いと思います。(神保)

・売店について市の制約はありますか？(吉沢)

・売店スペースの設置許可は必要ですが、指定管理担当は売って良いといってましたので、大丈夫だと思います。(中村)

・管理の多様性についての神保さんの話は、報告書に入れます。(中村)

・里山に関わる動機づけ等について、七里さんより説明があった。

・今のボランティアの関わりは、ストイックに思える、もう少し儲けるとか、おいしい物食べるとか単純な動機であって良いのではと思う(中村)

・ボランティアが高齢化されて、活動がつらいと言う話を良くうかがうが、目を三角にしてもこういう活動はできない。暮らしがあると活動が楽しく変わっていくと考える。使命感で活動されている方がいらっしゃる、楽しくできる活動に移行していくって良いと思う。(神保)

・木材は単に材料を販売するのではなく、樹種を示して売る等、地域性等を付加すると良いと思う。

(七里)

・相模原では樹皮のついたままのコースターは喜ばれている。薄くひいた物をルーベで年輪を見せたりしている。(長澤)

・丹沢の六木(スギ、ヒノキ、モミ、サワラ、ツガ、ケヤキ)のようなものが、小菅ヶ谷北公園に創れないか。

(神保)

4. 今後の課題他

・未整備地区の意見交換、外周の危険個所等を考えています。(中村)

・用語解説を入れると分かりやすいかと思いました。(中村)

・以上を3月までにまとめて報告書をお渡します。それまでに何かご意見等ありましたらお願ひします

(中村)

・目標種で今いいけど出て欲しい物は、わかるようにしておいたほうが良いと思う。★マークをつける。

(村田)

・課題のところに外来種対策は入れます。(中村)

・ホタル100頭、アゲハチョウは市内で見られる物は全て見られる等、公園の全体目標をいれることも検討します。(中村)

・市内のアゲハは全て見られるなどは、広報にのせて宣伝にはつかえる。アゲハが全て見られるは他ではやつてないと思う。(村田)

■公園の特性と管理の基本的な考え方

●公園の特性

- ・公園は市街化調整区域に位置し、周辺は概ね第一種低層住居専用地域または第一種住居専用地域に指定されている。
- ・公園周辺は宅地開発が進んでおり、西及び東南には低層戸建て住宅を主体とする大規模住宅地が隣接している。北西は舞岡公園、北東は樹林地に接している。また、この公園は、横浜市緑の七大拠点に位置づけられる舞岡・野庭の緑地帯の一部となっている。
- ・横浜の典型的な谷戸地形が残っており、標高差最大60mと起伏のある地形となっている。
- ・平成21年6月に、自然観察ゾーンが開園されている。今後、活動拠点施設とキャンプのできる広場がある利用拠点ゾーン、樹林地の中を散策や体験活動ができる散策の森ゾーンが整備されていく予定である。

○管理の基本的な考え方

- ・来園者が、安全で快適に利用できる管理を行う。
- ・公園内の自然環境は、地域に残された貴重な自然として、適切な保全を行う。

■ゾーンの特性、管理の目標

●エリア特性
○維持管理の留意点



A: 自然観察ゾーン

- 湿地環境を活かした、多様な生物が生息するゾーン
- 入口広場東側の築山部には開園式で近隣の児童が植栽したドングリの木がある。
- 潜在的に多様な生物が生息できる区域として、適切な保全を行っていく必要がある。
- 入口広場は安全で快適な空間として維持をする。



B: 利用拠点ゾーン

- 公園利用の中心となるゾーン。
- 活動拠点施設やバーベキュー場が整備され、イベントやキャンプ利用に活用される多目的広場空間となる。
- 起伏のある地形のため、見通しに配慮しながら、来園者が安全で快適に利用できるように管理する。



C: 散策の森ゾーン(保全区域)

- 落葉樹林を活かした、散策や自然観察のできるゾーンである。
- 利用者の安全を守るために危険木の処理を適宜行う。
- 里山の林の再生を目指す樹林地である。
- 樹林地の再生をめざした管理を行う。
- 利用者の安全を図るために、園路沿いの草刈り、倒木等の処理を行う。
- 雑木林を生かした活動の場となることから、心地よく散策できるよう、林床、園路の維持管理を行う。



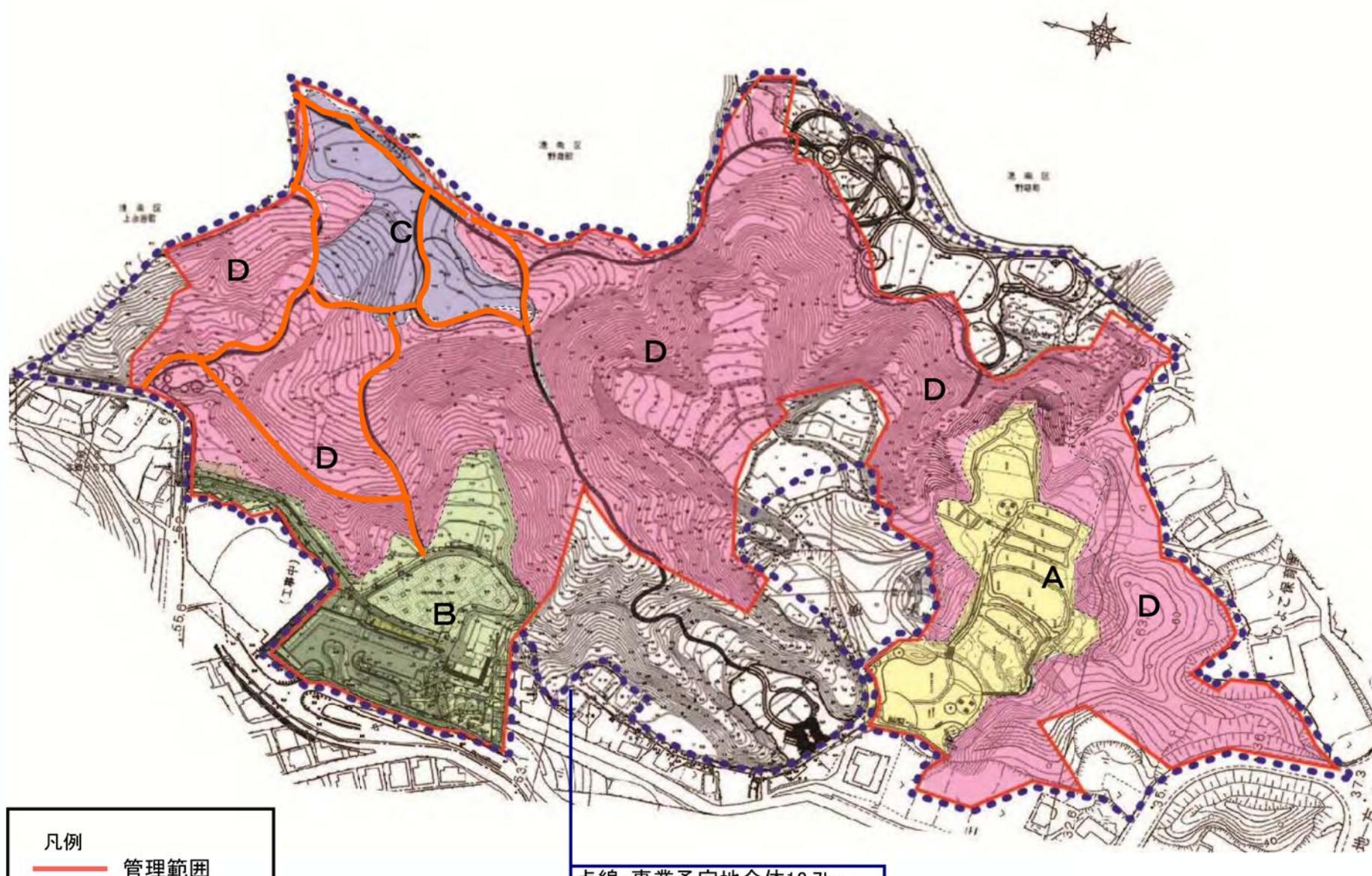
D: 樹林地ゾーン(保全区域)

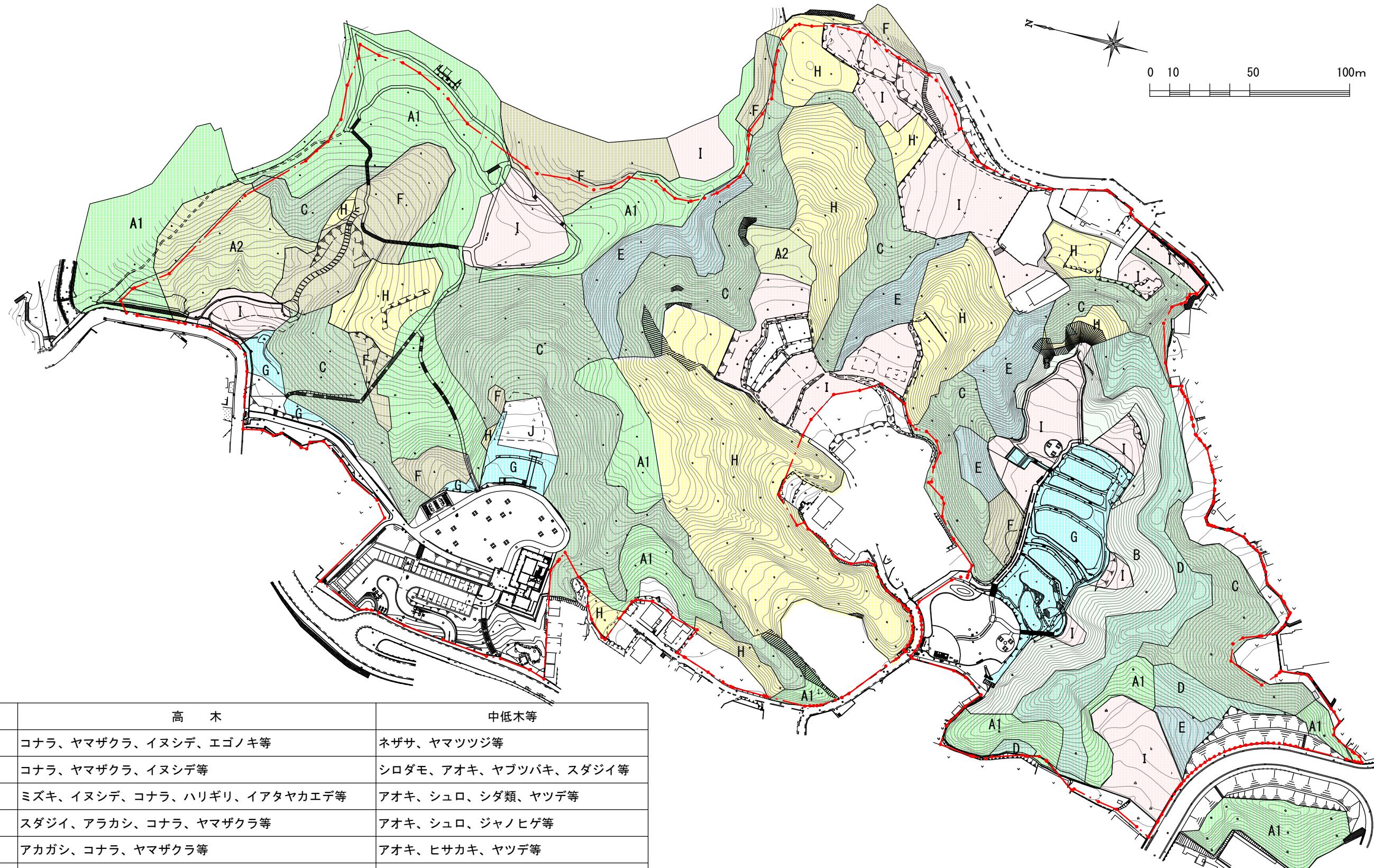
- 樹林地として保全するため、人の立ち入りを制限するゾーン。
- 管理は最小限にとどめる。(倒木や枯損木の処理)



E: ゾーン間園路

- 各ゾーンを結ぶ園路。
- 樹林の保全を図りながら、園路沿いの草刈り、枯枝・危険木・倒木等の処理を行う。

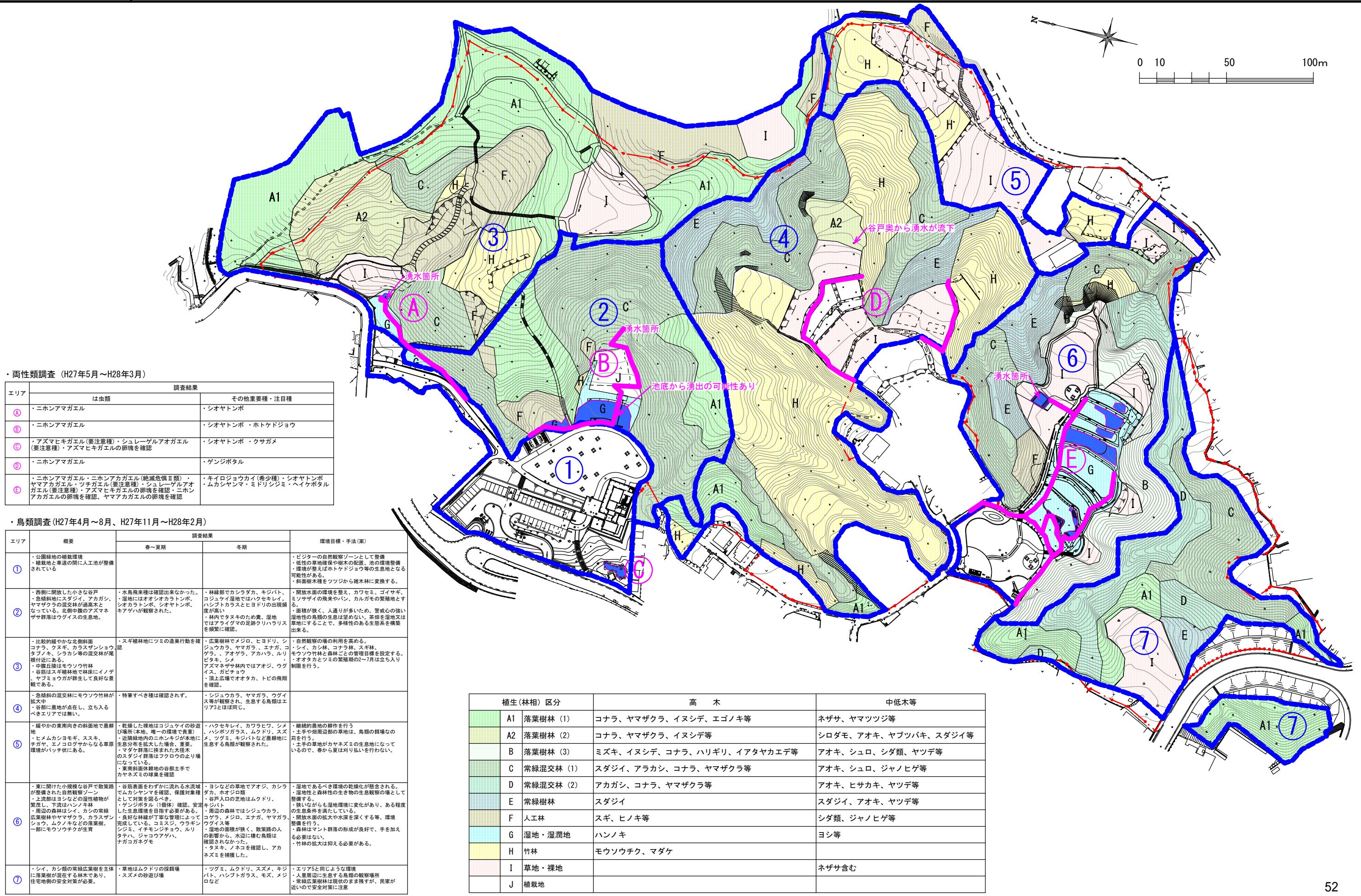




植生(林相) 区分		高木	中低木等
A1	落葉樹林 (1)	コナラ、ヤマザクラ、イヌシデ、エゴノキ等	ネザサ、ヤマツツジ等
A2	落葉樹林 (2)	コナラ、ヤマザクラ、イヌシデ等	シロダモ、アオキ、ヤブツバキ、スダジイ等
B	落葉樹林 (3)	ミズキ、イヌシデ、コナラ、ハリギリ、イアタヤカエデ等	アオキ、シュロ、シダ類、ヤツデ等
C	常緑混交林 (1)	スダジイ、アラカシ、コナラ、ヤマザクラ等	アオキ、シュロ、ジャノヒゲ等
D	常緑混交林 (2)	アカガシ、コナラ、ヤマザクラ等	アオキ、ヒサカキ、ヤツデ等
E	常緑樹林	スダジイ	スダジイ、アオキ、ヤツデ等
F	人工林	スギ、ヒノキ等	シダ類、ジャノヒゲ等
G	湿地・湿潤地	ハンノキ	ヨシ等
H	竹林	モウソウチク、マダケ	
I	草地・裸地		ネザサ含む
J	植栽地		

資料3

小菅ヶ谷北公園生物調査(平成27年度春～夏期鳥調査、冬期鳥調査、平成27年は虫類調査より)



資料4

第1、2回検討会確認生物リスト(環境科学研究所 七里)

表 小菅ヶ谷北公園 各ゾーンにて確認された主な生物

調査日:2016/8/3および9/9

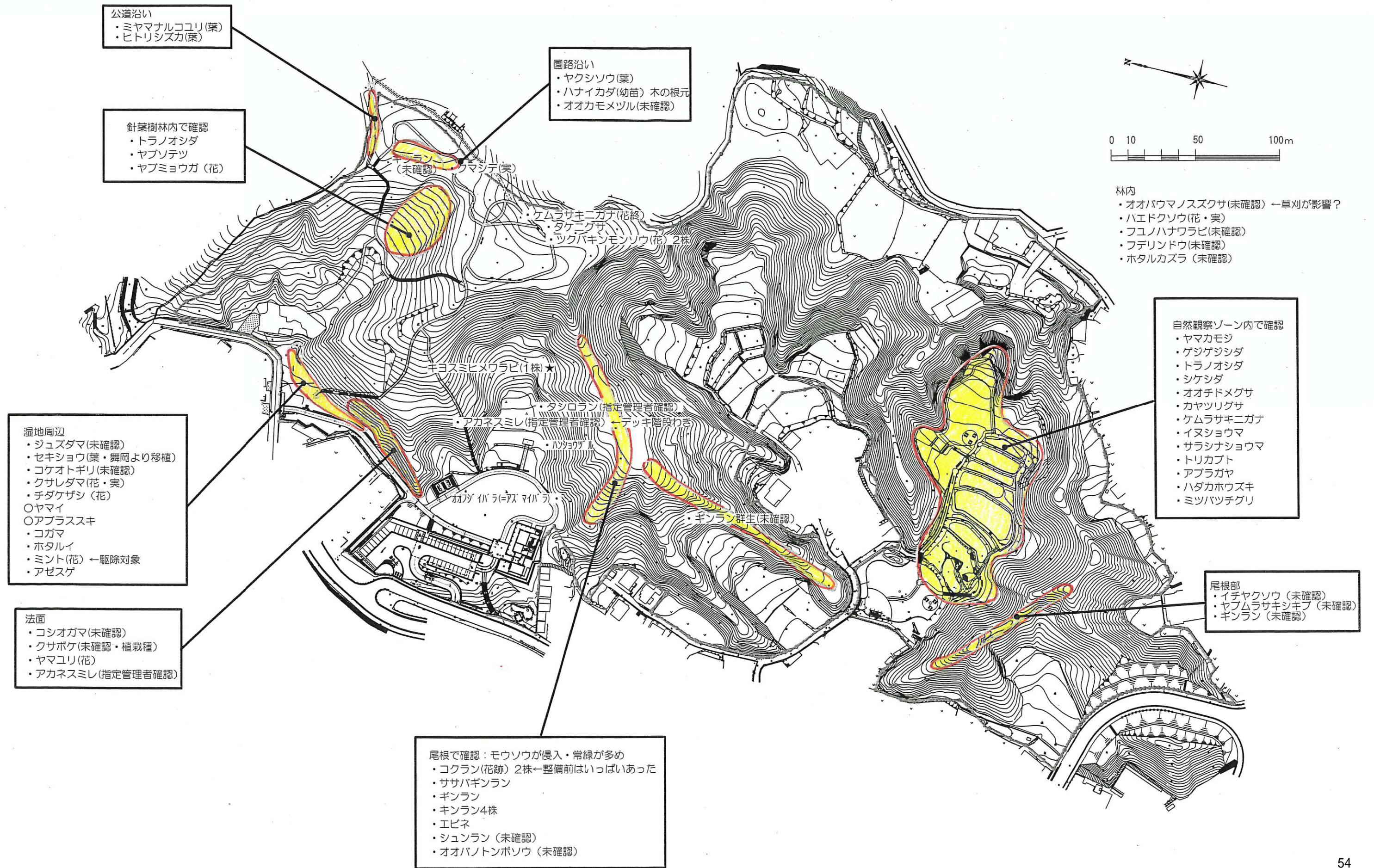
目名	科名	和名	散策の森 ゾーン	自然観察 ゾーン	利用拠点 ゾーン	樹林地 ゾーン1	樹林地 ゾーン3	憩いの庭 ゾーン	展望の丘 ゾーン
カメムシ目(半翅目)	セミ科	ミンミンゼミ	○	○	○	○	○	○	○
カメムシ目(半翅目)	セミ科	ニイニイゼミ	○	○	○	○	○	○	○
カメムシ目(半翅目)	セミ科	アブラゼミ	○	○	○	○	○	○	○
カメムシ目(半翅目)	セミ科	ヒグラシ	○	○	○	○	○	○	○
トンボ目(蜻蛉目)	トンボ科	ウスバキトンボ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	アゲハチョウ科	ナガサキアゲハ	○	○	○	○	○	○	○
スズメ目	カラス科	ハシブトガラス	○	○	○	○	○	○	○
トンボ目(蜻蛉目)	トンボ科	シオカラトンボ	○	○	○	○	○	○	○
バッタ目(直翅目)	バッタ科	ショウリョウバッタ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	アゲハチョウ科	モンキアゲハ	○	○	○	○	○	○	○
カメムシ目(半翅目)	セミ科	ツクツクボウシ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	アゲハチョウ科	ナミアゲハ	○	○	○	○	○	○	○
スズメ目	メジロ科	メジロ	○	○	○	○	○	○	○
トンボ目(蜻蛉目)	トンボ科	オオシオカラトンボ	○	○	○	○	○	○	○
ハト目	ハト科	キジバト	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	アゲハチョウ科	キアゲハ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	シジミチョウ科	ヤマトシジミ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	タテハチョウ科	アカボシゴマダラ	○	○	○	○	○	○	○
バッタ目(直翅目)	イナゴ科	ツチイナゴ	○	○	○	○	○	○	○
スズメ目	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	○	○	○	○	○	○	○
バッタ目(直翅目)	オンブバッタ科	オンブバッタ	○	○	○	○	○	○	○
ネズミ目(齧歯目)	リス科	クリハラリス	○	○	○	○	○	○	○
バッタ目(直翅目)	コオロギ科	ツヅレサセコオロギ?	○	○	○	○	○	○	○
無尾目	アマガエル科	ニホンアマガエル	○	○	○	○	○	○	○
-	クワ科	カナムグラ	○	○	○	○	○	○	○
カマキリ目(螳螂目)	カマキリ科	オオカマキリ	○	○	○	○	○	○	○
バッタ目(直翅目)	バッタ科	ヒナバッタ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	アゲハチョウ科	オスジアゲハ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	アゲハチョウ科	カラスアゲハ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	アゲハチョウ科	クロアゲハ	○	○	○	○	○	○	○
スズメ目	ウグイス科	ウグイス	○	○	○	○	○	○	○
カメムシ目(半翅目)	アオバハゴロモ科	アオバハゴロモ	○	○	○	○	○	○	○
コウチュウ目(鞘翅目)	カミキリムシ科	ヨツシジトラカミキリ	○	○	○	○	○	○	○
-	ラン科	シュンラン	○	○	○	○	○	○	○
トンボ目(蜻蛉目)	トンボ科	ショウジョウトンボ	○	○	○	○	○	○	○
コウチュウ目(鞘翅目)	コガネムシ科	マメコガネ	○	○	○	○	○	○	○
-	マメ科	ムラサキツメクサ	○	○	○	○	○	○	○
トンボ目(蜻蛉目)	オニヤンマ科	オニヤンマ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	セセリチョウ科	イチモンジセセリ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	シジミチョウ科	ウラギンシジミ	○	○	○	○	○	○	○
バッタ目(直翅目)	コオロギ科	エンマコオロギ	○	○	○	○	○	○	○
トンボ目(蜻蛉目)	トンボ科	コノシメントンボ	○	○	○	○	○	○	○
ゴキブリ目(網翅目)	チャバネゴキブリ科	モリチャバネゴキブリ	○	○	○	○	○	○	○
バッタ目(直翅目)	ヒバリモドキ科	マダラスズ	○	○	○	○	○	○	○
バッタ目(直翅目)	バッタ科	クルマバッタモドキ	○	○	○	○	○	○	○
バッタ目(直翅目)	バッタ科	イボバッタ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	セセリチョウ科	ダイミョウセセリ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	シジミチョウ科	ムラサキシジミ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	タテハチョウ科	コミスジ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	ジャノメチョウ科	ヒカゲチョウ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	ジャノメチョウ科	ヒメウラナミジャノメ	○	○	○	○	○	○	○
コウチュウ目(鞘翅目)	ハンミョウ科	トウキョウヒメハンミョウ	○	○	○	○	○	○	○
コウチュウ目(鞘翅目)	コガネムシ科	ヒメコガネ	○	○	○	○	○	○	○
コウチュウ目(鞘翅目)	コガネムシ科	クロナナブン	○	○	○	○	○	○	○
-	クワ科	ヒメコウゾ	○	○	○	○	○	○	○
-	ミツバウツギ科	ゴンズイ	○	○	○	○	○	○	○
-	オミナエシ科	オトコエシ	○	○	○	○	○	○	○
-	ツユクサ科	ヤブミョウガ	○	○	○	○	○	○	○
バッタ目(直翅目)	イナゴ科	コバネイナゴ	○	○	○	○	○	○	○
カメムシ目(半翅目)	ヨコバイ科	ツマグロオオヨコバイ	○	○	○	○	○	○	○
カメムシ目(半翅目)	アメンボ科	アメンボ	○	○	○	○	○	○	○
チョウ目(鱗翅目)	ジャノメチョウ科	クロコノマチョウ	○	○	○	○	○	○	○
ハエ目(双翅目)	ムシヒキアブ科	シオヤアブ	○	○	○	○	○	○	○
コウチュウ目(鞘翅目)	ゲンゴロウ科	ハイイロゲンゴロウ	○	○	○	○	○	○	○
コウチュウ目(鞘翅目)	コガネムシ科	コフキコガネ	○	○	○	○	○	○	○
コウチュウ目(鞘翅目)	ゾウムシ科	シロコブゾウムシ	○	○	○	○	○	○	○
ハチ目(膜翅目)	ツチバチ科	キオビツチバチ	○	○	○	○	○	○	○

調査日:2016/8/3および9/9

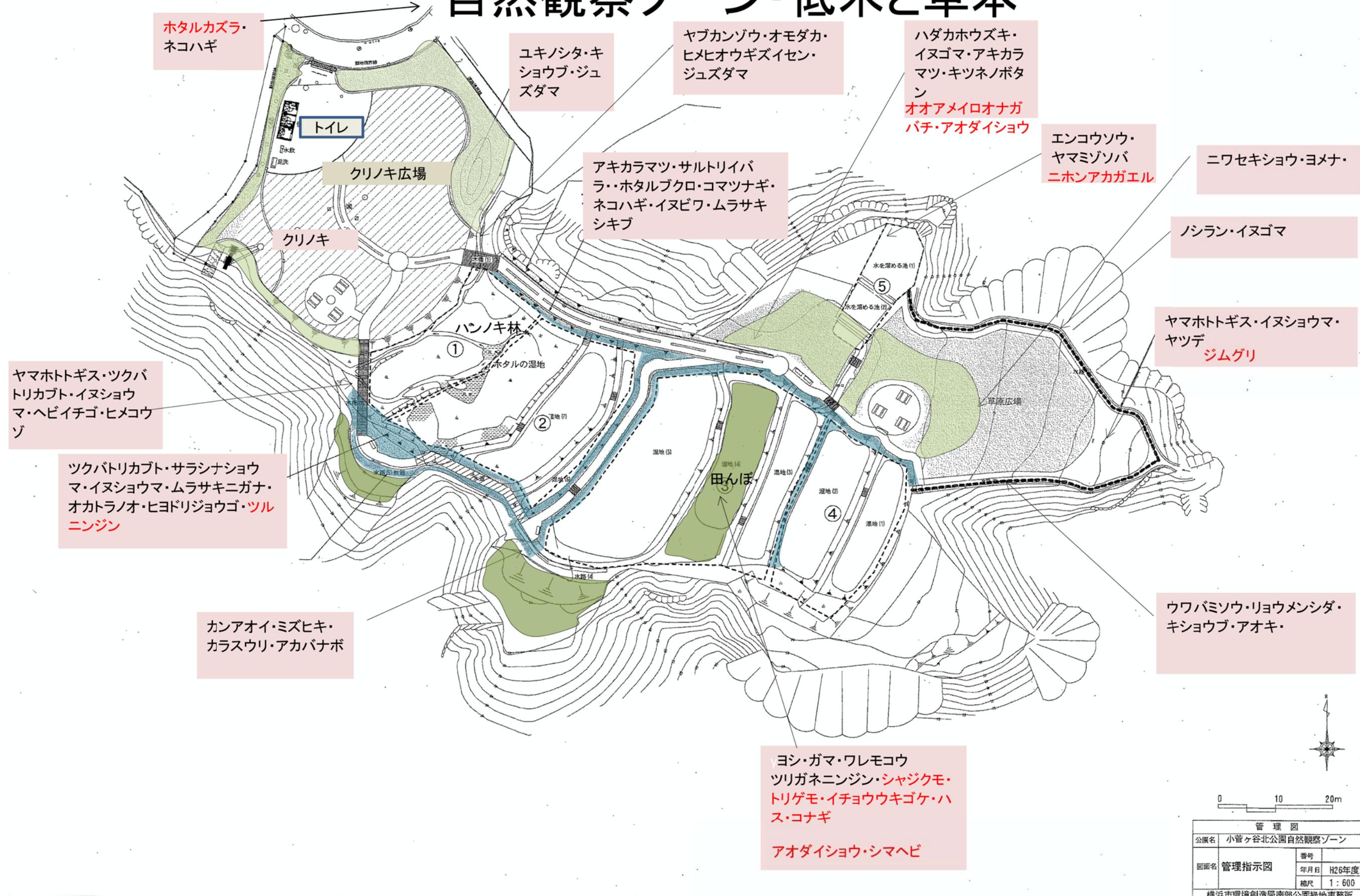
目名	科名	和名	散策の森 ゾーン	自然観察 ゾーン	利用拠点 ゾーン	樹林地 ゾーン1	樹林地 ゾーン3	憩いの庭 ゾーン	展望の丘 ゾーン
タカ目	タカ科	トビ		○					
スズメ目	ツバメ科	ツバメ		○					
ネコ目(食肉目)	ジャコウネコ科	ハクビシン?		○					
-	イヌ科	メリケンカルカヤ		○					
カメムシ目(半翅目)	セミ科	クマゼミ			○				
チョウ目(鱗翅目)	シロチョウ科	キタキチョウ		○					
コウチュウ目(鞘翅目)	テントウムシ科	ナナホシテントウ		○					
ハチ目(膜翅目)	スズメバチ科	キアシナガバチ		○					
スズメ目	カラス科	ハシボソガラス		○					
-	マメ科	クズ		○					
-	ガマ科	ヒメガマ		○					
-	ガマ科	コガマ		○					
チョウ目(鱗翅目)	ジャノメチョウ科	ヒメジャノメ			○				
チョウ目(鱗翅目)	ジャノメチョウ科	サトキマダラヒカゲ			○				
-	ラン科	キンラン			○				
-	ラン科	コクラン			○				
チョウ目(鱗翅目)	ミノガ科	オオミンガ				○			
チョウ目(鱗翅目)	アゲハチョウ科	ジャコウアゲハ				○			
スズメ目	シジュウカラ科	シジュウカラ				○			
スズメ目	ハタオリドリ科	スズメ				○			
ハチ目(膜翅目)	スズメバチ科	キボシアシナガバチ						○	
有鱗目	トカゲ科	ヒガシニホントカゲ						○	
バッタ目(直翅目)	マツムシ科	アオマツムシ							○
バッタ目(直翅目)	カネタタキ科	カネタタキ						○	
チョウ目(鱗翅目)	タテハチョウ科	キタテハ						○	
チョウ目(鱗翅目)	シロチョウ科	スジグロシロチョウ?						○	
チョウ目(鱗翅目)	シロチョウ科	モンシロチョウ						○	
コウチュウ目(鞘翅目)	ハムシ科	ウリハムシ						○	
ハチ目(膜翅目)	スズメバチ科	ヒメスズメバチ						○	
タカ目	タカ科	ツミ							○

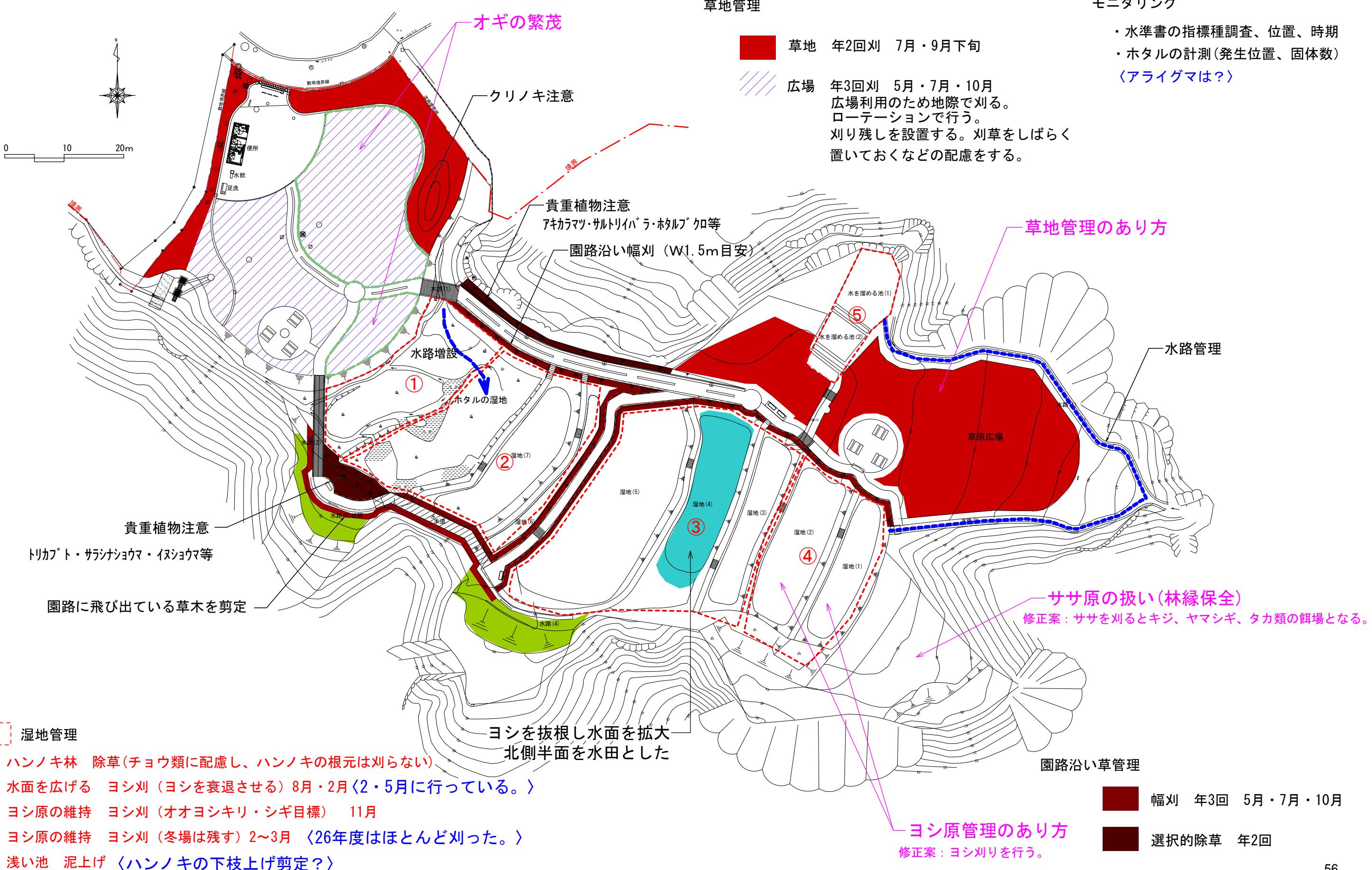
資料5

小菅ヶ谷北公園植物調査図(平成27年7月横浜植物会)



自然観察ゾーン・低木と草本



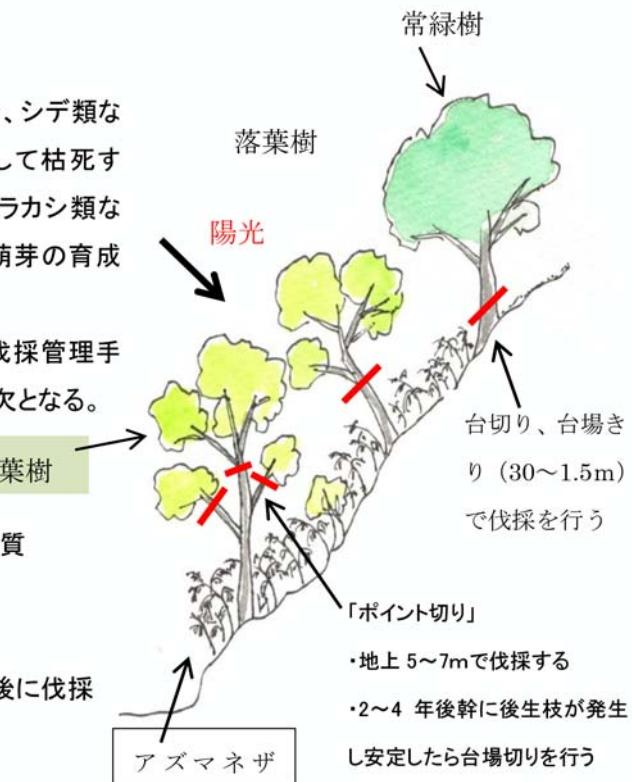


伐採後に発生した陽樹(コナラ、サクラ、シデ類など)の萌芽は、光量が不足すると衰弱して枯死する。しかし、樹陰(ツバキ、ヒサカキ、シラカシ類など)の多くは、制限された日照環境でも萌芽の育成が可能となる。

このため、安全で健康な樹林地帯の伐採管理手法の決定は、以下の項目の観察が不可欠となる。

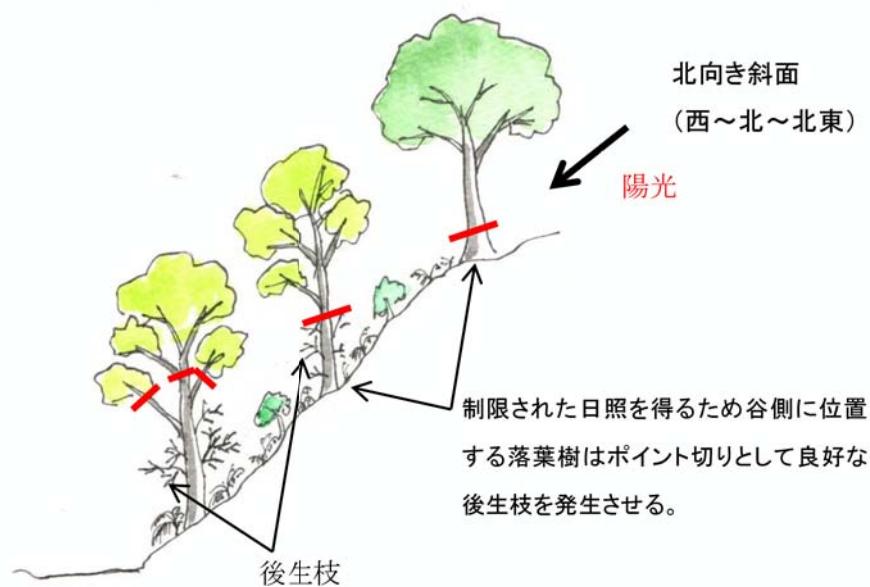
- ① 樹林地環境(斜面)の方向
- ② 固体となる対象木の育成、母材の地質
- ③ 固体の健康状態
- ④ 当該地の林床状態

以上のような現状を観察し分析した後に伐採



手法
(台切り、台場切り、ポイント切り、除伐)
を決定する。

* 注)南側斜面は伐採により樹冠が解放されると、林床のアズマネザが一斉に育ち、茂みとなるため、ポイント切りとする場合がある。



生物多様性と斜面緑地等の安全対策を目的とした樹木伐採手法

対象樹種で生物種は異なる

台切り

対象樹種

- ・常緑樹
- ・南側斜面などの落葉樹

(例)タブの木

- ・アオスジアゲハ幼虫の食樹
- ・ウグイスの営巣木

伐採適期3月上旬～3月中旬

台場切り

対象樹種

- ・常緑樹
- ・南東斜面などの落葉樹

(例)クヌギ

- ・ウラナミアカシジミ幼虫の食樹
- ・ミズイロオナガシジミ幼虫の食樹
- ・アカシジミ幼虫の食樹
- ・オオミドリシジミ幼虫の食樹
- ・カブトムシの餌場
- ・ノコギリクワガタの餌場
- ・シロスジカミキリの食樹
- ・ホオジロ、モズの営巣木
- ・ウグイスの営巣木

伐採適期3月上旬～3月中旬

ポイント切り

対象樹種

- ・東西南北の落葉樹
- ・後生枝を発生させて2～5年後の台場切りを目的としてポイント切りを行うケースもある。

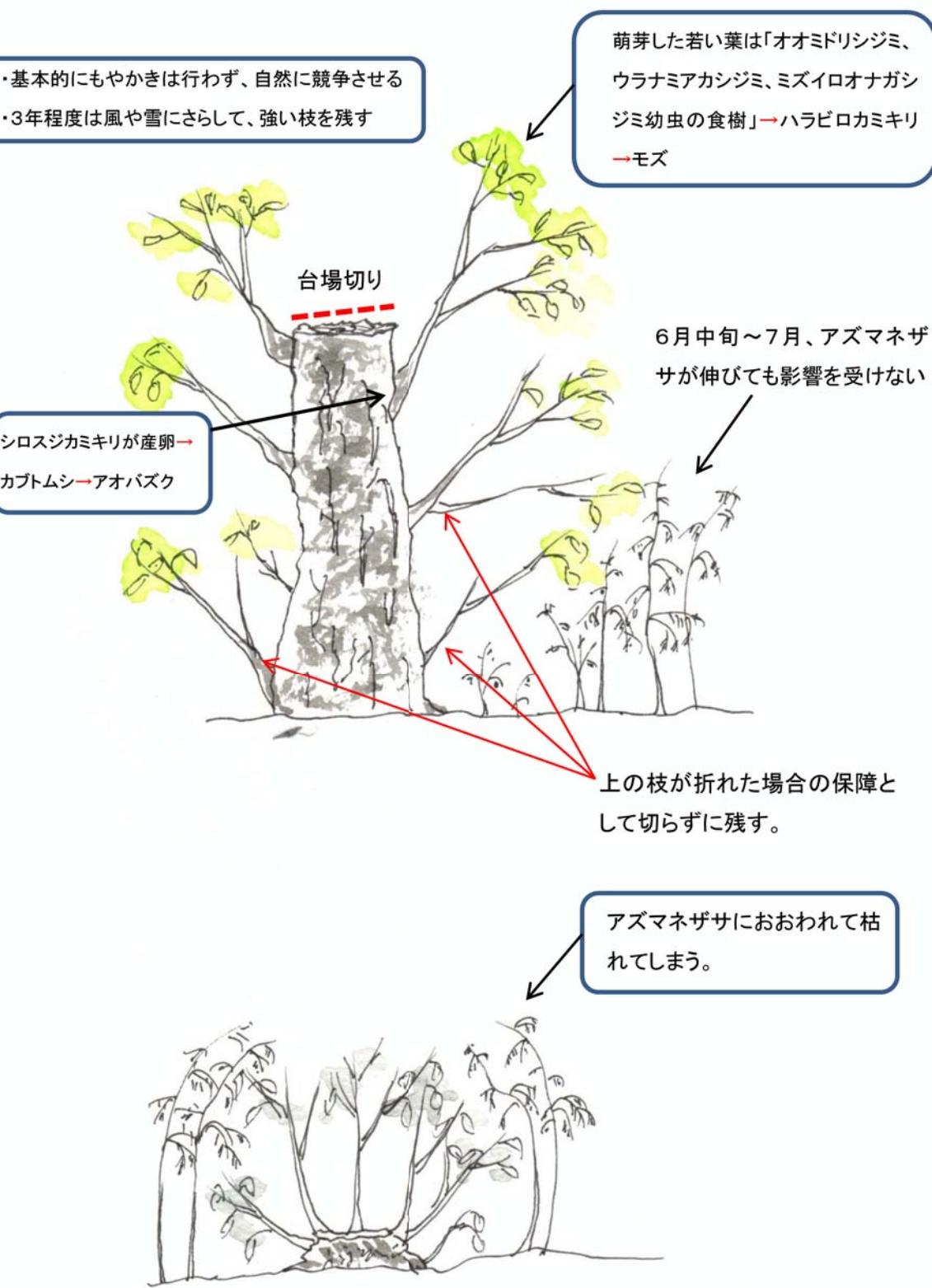


(例)コナラ

- ・アカシジミ幼虫の食樹
- ・オオミドリシジミ幼虫の食樹
- ・ゴマダラチョウの餌場
- ・ルリタテハの餌場
- ・サトキマダラヒカゲの餌場
- ・カワラヒワの営巣木
- ・メジロの営巣木
- ・エナガの営巣木
- ・キジバトの営巣木

伐採適期2月下旬～4月上旬

台場切りによる生物多様性を目標とした「萌芽した若枝を残す」目的と意味



A. 竹林管理と竹垣作り



- <主な機能や特徴>
- ・立入防止機能
 - ・手入れが行き届いた美しい景観
 - ・生きものの住みか(昆虫の産卵等)
 - ・他の場所で出た発生材も活用可
 - ・林内がきれいに片付くきっかけに